資料編

凡例

・できる限り原本の記述形式に沿って翻刻した。詞章本によって形式が多少異なるのはそのためである。
・原則として旧漢字は常用漢字に直した。
・明らかな漢字の間違いは訂正するか、ママとルビを振った。
・文章は適宜改行し、句読点を施した。
・当て字等はわかる範囲でルビでカッコ内に正しい文字を入れ、判読不能文字は□で示した。
・濁川獅子舞『獅子舞根本記』の漢詩と易占の部分は言立と関係がないため削除した。

一、番楽関連資料

（一）荒沢番楽「奉祭本海流系譜」

佐藤洋一家所蔵掛軸・明治二年

（一段目）

抑獅子舞ノ謂レト云ハ、古ヘ天照大神天ノ磐戸ニ引籠ラセタモウ御時ニ、八万ノ神達コレヲ歎セ、岩戸ノ前ニテ神楽ヲ奏シ、玎トウ颯々タル鈴ノ声ニテハヤサセ給ヘハ、天照太神磐戸ヲ少シ開キ玉ヘハ、又常闇ノ雲晴テ人ノ面百々ト見ケレハ、天照太神岩戸ノ中ヨリ是ヲ見給ヘ、面白ヤト神ノ御声ノ聞ヘサセ玉フ也

（梵字）

其時戸隠ノ明神岩戸ヲ取テ押開ハ、日月光リ輝キテ、是ヲ目出度始トテ、今ノ世迄モ是ヲ伝テ諸人々ニ教給也。是獅子舞ノ始ナリ。我深是ヲ信シタヒシニ、或時三輪ノ明神女ノ姿ヲ現シ、昔神代ノ物語一々是ヲ伝シニ、盡ク秘法アリ。千振破（ママ）神ノ彦佐ノ昔ヨリ、久シカレトテ是獅子舞ヲ奏スレハ、誠ニ天下太平国家安全五穀成就ノ御祈禱ニシテ、国土万民賑セルモノナレハ、故ニ此法ヲ奏スルニオイテハ、随分身ヲ清メ潔斎シテ奏スヘシト云云

（二段目）

爰古来ヨリ荒澤村エ獅子舞之初リ云者、元亀天正之頃、大和国ヨリ本海防ト云行人来テ教習スト云エリ時、根城館ニヲイテ大井五郎光安ヲリシ先ヨリ、八幡大明神之一宇有リ。コヽ以御領内御武運長久村中家運繁昌家内安全ノタメ御獅子ヲ奏テ、氏子中集テ番楽等ニ至マテ学フコト多年也。故後ノ人本海流ト名ツク為白山ノ社ニ本海塚ト建有リ。全矢嶌御領内獅子舞大祖也。仍五穀成就虫日和祭トシテ、鳥海山学頭ニ而御祈禱有リテ、同処エ相結番楽相勤、御堺小板戸川迄参リ候ハ、已ニ御用獅子ト被仰付候無相違久例也。於アラ澤村ニヲイテハ鳥海山開キタモウトテ、善鬼後ト云有リ。右正末ノ神力尊ヒ、隣国ニ至マテ矢嶌荒澤村本海番楽ト云テ今ニ広マレリ。各子孫ニ至マテモ相継テ、又子孫ニ伝エタマハン事ヲ云々

奉祭本海流系譜

時慶應四之頃、象頭山并八幡宮御神徳ヲ現、祈拝スル者謹テ可也。矢嶌侯天朝ノ仰を賜リ、百宅仁賀保両道エ御出兵申ト、横道ヨリ賊兵二分ニ御城エ押来リ、防戦ス云トモ、敵多勢故不得止タメ、終七月二十八日暮秋田表エ御立移有リテ、故御領内ヤミノ如ニナリケレハ、怯ザル者無、何カハ以テ重来ノ御仁政報ジ奉ベキ便リ無ヲリカラ、金毘羅八幡宮エ舞子中集テ、御無難御帰城アラン事ヲ起精ヲ掛、明ル日ヲモヲソシト待祈奏ル。シカルニ神之徳現レ歳更マテ、明治紀元十月御帰国ス。春以来軍功叡聞ニ達シ、高一萬五千貳百石

生駒讃岐守従五位下ト成ラセラレ賜フ。如旧御帰城アソハサレタレハ、国中民夜ノ明ケシ如恐悦不斜ト云、サルハ無為大願成就トシテ、金毘羅殿エ御獅子ヲ奏シタテマツテ、其奇トク神妙也ト感シ、此ノ一巻ヲ奉献謂哉後世信可也　謹言

（三段目）

吾祖平内左エ門者、鳥海山嚮開壬太良衛比良衛正嫡成故、荒澤古住スルニ奇（ママ）リ本海行人ヨリ一巻ヲ賜リ、是以テ今ニ伝ハレリ。仍テ楽師重来整信ナルコト多年ニシテ、実神妙之至ト奏テ、御獅子エ又壹巻奉献ウヤマイ尊ト申寿

本海防

明治二年

己巳
正月吉祥日
土田丈之助
謹書
鳥海信義
（印）（花押）

（四段目）
奏楽翁
荒澤　今野　市助
矢越　山田　伊助
針ケ岡　金子佐治右エ門
矢越　佐藤　伊三郎
矢越　山田　直之助
針ケ岡　畑澤　長作
針ケ岡　金子　幸吉
矢越　山田　彌重郎
荒澤　土田　徳右エ門
荒澤　土田　金十郎
荒澤　今野　友治
荒澤　今野　宇市
針ケ岡　佐藤　竹治
荒澤　土田　竹治
荒澤　土田　忠助
荒澤　佐藤　勇助
荒澤　土田　春治
荒澤　佐藤　鶴治
根城　相庭　分平
荒澤　佐藤　林治

〔解説〕
掛軸の寸法はタテ一五五・五㎝、ヨコ六六・八㎝、本紙部分はタテ八九・七、ヨコ五六・二㎝。本紙は周囲を朱色の罫で囲み、同じく朱線で全体を四段に分ける。一段目の中央上部に二重の朱線円の中に大きく種字を描き、二段目中央に「奉祭本海流系譜」と大きな文字で記す。三段目中央には朱線の円の中に「本海防」と大きく記す。「奉祭本海流系譜」、「本海防」、人名は朱色の縦罫で区切る。一段目に獅子舞（番楽）縁起、二段目に本海坊伝授獅子舞由来と一三代藩主生駒親敬の戊辰の役の戦功による取立のこと、三段目に掛軸の筆者である土田氏の先祖が本海坊から一巻を授かったこと、ならびに奥書、最下段に荒沢番楽連中二〇名の氏名を連記している。

本掛軸の文が記されたのは、神仏分離令が発布された翌年の明治二年である。全国で廃仏毀釈の機運が高まる中、矢島十八坊の一つである荒沢の矢越八幡寺別当矢越隆英も、明治三年二月には神祇官より裁許状が発行され神職に転じた（矢越隆弘家文書）。戊辰戦争の混乱につづく社会、宗教基盤の大換期に本掛軸は記されている。

写真　掛軸・奉祭本海流系譜　（髙山　茂）

（二）濁川番楽「本海流獅子舞秘伝大事　乍恐奉申上獅子舞之事」

抑獅子舞ト申ハ、天神七代地神五代ニ相始メ、社人所神ヲイサメ、宮祭リ相勤メ申候御事ニ御座候。伊弉諾伊奘冉ノ尊ヨリ、天照皇大神宮アマノ岩戸ニ日月トモニ引キコモラセタマエハ、此世チヨヤミヤミトナラセタマエ、其時八人ノハナノ八百トメヲノゴグハ、テイトサスくノスズノモロコエニテ、岩戸ノマエニテ、カグラヒヨシタテマツリ候得ハ

天照皇大神宮モ面白コト始メ候得トテ、戸隠ノ明神様ヲチカツケ、アマノツマ戸三間取テヲシ開、日月トモニ出サセタマエハ、誠ニ国土日チユトナリタマエハ、日月カヽヤキ、面白キミヨニ納候御事ナリ

其祭リ相学候獅子舞也。惣様サマカタ、上ツカタノアソヒ御ラン候テ、万民ノ見物百性中ノ祭リ事ニモ成物ナリ。是ヲ習立相勤申候ヨウニト被仰付候得ハ、其時本海房ト申人、獅子舞ノ心有モノニ御座候得ハ、社人様方ニ奉願候得ハ、早速御ゆるシ被仰渡候事、偏ニ難有奉存候。本海坊一々習ウカベ百性ノ若者ノ師匠ト成

右ノ趣一々被仰渡候事

○此獅子舞ノ祈事

天下泰平国土安全五穀成就、ヒナンサエナン、ヤモウヤク神相遁ナニカ成ル天満楽神モ相遁候御事ニ御座候カ、必無精進ニテハ不罷成、随分身ヲキヨメ

八幡大神

天照皇大神宮

春日大明神様ニ

キセヲカケ、タエセツニ相勤申候様ニト本海房急度被仰付候

獅子舞番数之事

○門獅子ヨリ神舞神供獅子迄テ第七番、夫ヨリ舞台始メ、先番楽ヨリイカト申迄第七番也

○山神ヨリ地神舞迄テ第八番也

○武士舞ト申ハ、其昔源平ノタヽカイツクリコメ、第十二番

○女舞ト申ハ、岩戸開キヨリハラヒヲリ迄第七番也。并ニハントウヲカシモ第七番、番数合テ四十八番也

○一番一字ウスナハンベシ、若シ失エ候得テハ

天照皇大神宮

八幡大神

春日大明神様ノ

トカメタヽリニ罷成、随分心ニトナイヲイタシ、日本大小ノ神祇可蒙御罰者也仍テ如件

月　日　　本海房

（高山　茂）

（三）土谷獅子舞「本皆流獅子舞秘伝之大事」

抑獅子舞ト申者、天神七代地神五代ニ相始、社人諸神ヲ勇、宮祭ホ相勤申候御事御座候。伊弉諾伊弉冉(再)之尊ヨリ、天照皇大神宮、天岩戸江日月共ニ引籠ラセ玉ヒ、此世長夜之闇ヲ為成玉フ、其時八人ト花之八乙女己国、鉄塔颯々鈴ノ緒之声ニ而、岩戸之前ニ神楽拍子ヲ奉候得者

天照皇大神宮、面白事初候迚、戸隠之明神様ヲ近付、天之岩戸ヲ三間執テ押開キ、日月共ニ出サセ玉ヘハ、国土日昼ト也、日月輝キ、面白御代治リ候御事也。其祭相学候獅子舞也。惣客様方遊ヒ御説被成、万民之見物百姓之政ニモ成者也。習立テ夫ヲ

相勤申候様被仰渡候。其時本皆坊ト申人、獅子舞之心有者ニテ御座候得ハ、社人様方ニ奉願、早速御免被仰渡候事、偏ニ難有奉存候。本皆坊百姓之若物之師匠トナリ、右之趣一々被仰渡候

一獅子舞之唱フル事ニハ、天下泰平、国土安全、五穀成就、火難災難、疫神御逃、如何成天魔疫神モ相追候御事ニ御座候。必雑進ニテハ罷不成、随分身ヲ清メ天照皇大神宮、八幡大菩薩、春日大明神様ニ寄誓ヲ掛、大切ニ相勤申候様被仰渡候

一獅子舞番数之事、門獅子ヨリ地舞、神宮獅子迄第七番、夫ヨリ舞台始メ、先番楽ヨリイガト申迄第七番、山之神ヨリ地神舞迄第八番

一武士舞ト申ルハ、其昔源平之戦作込メ、第十番ニ、女舞ト申者、岩戸開キヨリ蕨折迄第七番、并バンダウ、ヲカシモ七番、番数合而四拾八番ニ御座候。壹番一字不可失、若シ失ヒ候テ者

天照皇大神宮

八幡大菩薩

春日大明神

咎崇リニ相成、随分心ニ唱ヲ至シ、日本大小之神祇、御罰蒙ムル可キ者也、依テ如件

明治十丑八月

土屋村

若者中

秋田県由利郡屋敷村

佐藤平右エ門㊞

（丸谷仁美）

（四）土谷獅子舞「神宮獅子」（柱がらみ）

□□□座須時者　天道在理

賀美伊万須登伎者　地道在理

加巳伊万須時者　人道在理

柏手二ツ

謹請東方仁　青帝龍王

謹請南方仁　赤帝龍王

謹請西方仁　白帝龍王

謹請北方仁　黒帝龍王

謹請中央仁　黄帝龍王

正月長命　二月嘉解　三月長栄　四月天癸　五月正吉　六月正洗　七月大一　八月天公　九月従　十月空訴　十一月大吉　十二月神居

抑手握之鈴器妙哉、颯々声天仁響地仁満ヲ、急悪魔祓徐邪気於没ヲ、早久不浄忌穢ヲ除、三才清浄、五行清浄、家内清浄、神殿清浄、自他清浄、神祇来格志ヲ諸天降臨ヲ、感応ノ眉ヲ開キ、殊仁鎮守氏神波左右仁立ヲ、和合之妙利ヲ正導引賜。誠仁是楽器無双之第一日也。誠仁根源之礼尊謹而再拝々白須

清水

今水取結、天真名井乃清伎伊左伎与伎、始水ヲ天降志給布。天清牟地ヲ清牟、人清女身本登ヲ清牟

散米

一粒や八十や万仁増鏡、宝ヲ降海須美乃神。天長地久、四海泰平、五穀豊熟、家運永久、守護令成給布。

綾瓊奇久尊登屋船、久々遅神屋船、豊宇気姫神御名ヲ波奉称氐、恐美恐美毛白。

此家所者奥山乃大峡小峡爾生立留、木ヲ斎部乃斎斧ヲ以氐斎伐採氐、本末ヲ山神尓祭氐中

間平持出来氐、斎鉏平以テ斎柱立氐作利終、此函家所乃底津磐根乃極美、下津綱根波府虫能ワサワイナク禍無久、高天原波ハラ青雲乃靄久極美、天乃血垂、飛鳥乃禍無久掘堅多留柱桁梁戸牖乃錯動鳴事無久、引結幣留ルツナメノユル葛目能緩比取葺計留フケルカヤ草乃噪伎無久、床都比乃佐夜伎夜女乃伊須々伎伊豆都志伎事無久平気久安気久守給幸給事乎尊美タフトミカタジナ美氐、礼代乃幣帛止ミテクラ御酒御饌種々捧奉氐、畏美畏美称辞竟奉久止白

勧請祝詞

掛茂畏大日本天神七代、地神五代、天孫降臨、三十二神式内式外、安上安下、洛中洛外、三千一百三十二座、総而天神地祇八百万神別天波。鎮守氐神、産土神等乃神号乎唱奉里、清浄御座乎設弖勧請奉留。速仁降臨守幸賜止恐美恐美申須無上霊宝神道加持

天下泰平、国土安穏、風雨順時、五穀豊穣、万民快楽、諸願成就祈処

廉書故後ニ清書

明治二十三年旧七月四日下賜

祠掌之印

若者中江

（丸谷仁美）

二、「鳥海山北麓の獅子舞番楽」詞章本（言立本）

言立本解題

次は、国記録選択となった「鳥海山北麓の獅子舞番楽」八カ所の番楽および荒沢番楽が保有する詞章本（言立本）の概要である。荒沢番楽は早い時期に途絶えたが、「鳥海山北麓の獅子舞番楽」にも影響を与えるなどその存在は大きかったため、ここに取り上げた（第七章五節参照）。左記の詞章本は、これまでの調査において知り得た範囲であるから、ほかにも個人所有のものなどで未見のものがあるかも知れないが、ほぼ全体を確認できていることと思う。この概要に続く詞章本の諸曲一覧表と詞章内容は、複数の詞章本を保有している伝承地については、（1）に記した本をとりあげた。

なお、鳥海町の「本海獅子舞番楽」の詞章本については、『本海番楽―鳥海山麓に伝わる修験の舞―』（鳥海町教育委員会、二〇〇〇年三月）で主要なものをとりあげている。

（一）坂之下番楽（由利本荘市）

表紙に「獅子舞言立　全」、裏表紙に「大正九年九月改書　坂之下　若者」とある。最後の部分「花ノ御礼」の後に、ペン字で「空臼舞」（空臼がらみ）の順番等を記す。これは昭和四十九年に書いたものである。最後に「柱堅」の段取りの概要を記す。三六葉。

（二）屋敷番楽（由利本荘市）

（1）表紙に「講義教本書　講義教証」とあるが、これは後に付けたものであろう。奥書に「明治三十六年旧六月十一日　謄写候也」、その後に「謄写之節、悪筆のうちミに一句」として句を記す。表紙裏に「覚」として記す二〇番の演目名と、

最後の「小田八郎きそ舞」は別筆。本文には一七番を記載する。裏表紙にある熊谷松蔵の名は、筆者名ではないとみられる。表紙を含め二七葉。熊谷治郎兵衛家所蔵本。

（2）表紙はなく、最初に「覚」として、「佐藤梅哉　七十三ノ年」の文字の後に二一番の演目名を記すが、本文には一二番を記載する。二二葉。二一葉、二二葉目に破損部があり、なお、二二葉裏の「裏矢しま」の言立は二行のみで終わっていることから、二三葉以降が欠損していることがわかる。保存会所蔵本。

（3）保存会作成本。「屋敷番楽保存会言立本」と題したファイル二冊にまとめられている。何人かの会員が必要に応じて書いたものをまとめたものらしく、字体も何通りかあり、演目の重複、書き込みもみられる。したがって演目順は必ずしも一貫しているわけではない。前二冊にはない「志賀団七」「矢嶋小弓」「神々舞」「空臼舞」などが記載されている。

（三）濁川番楽（由利本荘市）

（1）表紙は古紙を用いている。表紙の後に見返しがつく。はじめに「十二大天」を二段に分けて記し、言立の最初に「獅子舞根本記」と記す。本の上部（天部）に焦げたような痕があり欠損しているが、本文に支障は及んでいない。「女舞」（蕨折）の末尾に漢詩を記す。最後の「桜子」の言立の後に獅子舞縁起、易占の解説、「乍恐奉申上獅子舞乃事」を記し、奥付に「維時　元治元甲子星　仲秋日　書写之　印」とある。二四番の演目名を記し、そのうち二二番の言立を記載する。表紙を除き五七葉。

（2）表紙に「獅子舞根本記」、奥付に「維持　明治十五年午十月下旬　村上信治写之」とある。前の部分に「千歳」「熊谷敦盛」「熊襲平討之幕」「源光国」「三韓征服ノ幕」などを記し、「獅子舞根本記」の記載に続く。「獅子舞根本記」以降は（1）の元治本の写しかとみられるが、その前の部分は、後に一緒に綴じられたものであろう。本文六七葉。

（3）表紙に「大正四年八月十五日写ス　熊襲手討　三韓征伐之幕　濁川青年神楽講」とあるように、「熊襲手討」「三韓征伐」の言立のみを記す。表紙含め八葉。

（四）伊勢居地番楽（にかほ市）

（1）表紙に「昭和五十八年正月吉日　伊勢居地獅子舞神歌　伊勢居地番楽保存會」とある。最初に保存会名で伊勢居地番楽についての解説が記される。「村を通る時のうたい」「神舞」「獅子舞」の神歌ほか一五演目の言立を記す。「鳥舞」の後に、古典より記すとして「天女」の言立が記される。最後に「伊勢居地番楽獅子舞構成人員名簿」「伊勢居地少年番楽獅子舞人名簿」筆者菊地一郎氏の「結語」が付く。本文三〇葉。

（2）表紙に「昭和二十六年七月　獅子舞神歌」とある。「通節」「神舞」など一六演目のうち、一五演目の言立を記す。裏表紙はなく、最後に一三番の舞順を記す。全一七葉。

（五）釜ヶ台番楽（にかほ市）

（1）表紙に「郷土芸能　釜ヶ台の獅子舞　釜ヶ台獅子舞保存会」とある。謄写版で作成されており、「はじめに」の記述に、昭和四十三年五月の年号が入っている。続いて「獅子舞保存会結成趣意書」「釜ヶ台の神社について」「獅子舞について」、および一八番の「舞順」を記し、「小路わたり」など一九番の言立を記す。全一四葉。

（2）「蕨折」のみの言立。表紙に「昭和六十一年七月　釜ヶ台郷土芸能獅子舞の内　蕨折舞集　釜ヶ台番楽保存会獅子舞連中」とある。

（六）冬師番楽（にかほ市）

（1）表紙に「冬師獅子舞謡　冬師番楽保存会」、奥付として「昭和六十三年六月補正　責任者　佐藤専之助」とある。最初に一七番の目次を記し、「わらび折舞」をはじめ一六番の言立を記す。最後に「御花銭の読み方」がつく。全一九葉。

（2）表紙に「冬師番楽　わらび折り　二人餅つき　やさぎ獅子」とあり、この三演目の言立を記す。全一四葉。他に「わらび折り舞」のみ記したもの、謄写版で一四演目の言立を記した冊子などがある。

（七）鳥海山小滝番楽（にかほ市）

（1）表紙に「昭和十六年八月　鳥海山小瀧番楽舞　篠原作左エ門　持用」とある。最初に阿部貞臣「鳥海山小瀧村番楽舞之事」という小滝村と小滝番楽についての解説が置かれ、続いて二三番の演目名中、二二番の言立を記す。演目によっては太鼓・笛の声歌（口唱歌）を挿入している。本文二五葉。

（2）表紙はなく、青焼き、「通りの歌」「振込みの歌」「楽屋の歌」「幕出の歌」「番楽」「翁」「大江山」「田村」の言立を記している。全七葉。

（八）鳥海山日立舞（にかほ市）

（1）表紙に郷土藝術　日立舞　横岡芸能保存会」とあり、二面の尉面、扇・刀・薙刀の図が描かれる。青焼きのものが残っており、マジックペンで「口上わたり」から「団七」を含む二五番の言立を記す。全一八葉。

（2）表紙に「郷土芸能　鳥海山日立舞　横岡番楽保存会」とあり、奥付に「昭和三十九年十一月十七日　秋田県無形文化財指定」、「表紙　昭和三十九年十二月一日　中村定雄書」とある。（1）の本の表紙と図柄は同一である。本文はペン書きで、（1）本と同じ二五番の言立と、その後に「舞の由来」として演目解説を記す。

（九）荒沢番楽（由利本荘市）

現在、左記の二冊が残っている。荒沢の針ケ岡、佐藤洋一氏蔵。佐藤家はかつて荒沢獅子舞（番楽）の荒沢講中のうちの針ケ岡講中の宿元の一つであった。

（1）表紙に「舞子案内」とある。この表紙と見返しの紙は後に付けたものであろう。はじめに「乍恐奉申上獅子舞之事」の内容を記すが、一オ（一頁目）の部分が破れて欠落している。一頁に七行ずつに分けて、上手な文字で記し、表記もほとんど統一されている。漢字等に付けたフリガナのほとんどは、後の人が付けたもの。濁川獅子舞の言立と共通点が多くみられる。表紙除く五六葉。次の大正五年本よりも古いと推察される。

（2）表紙に「獅子舞根本記　全」、奥書に「大正五年上旬　金子佐治右衛門整川原三浦與茂吉　行年七十五之書」とある。前のものと同じく最初に獅子舞縁起を記す。一頁に七行ずつ楷書で筆記し、多くの漢字にカタカナでルビを振る。（1）にはない「先番楽」「桜子」を記すほか、言立の文句にも（1）と異同が見られる。表紙除く四〇葉。

記録選択「鳥海山北麓の獅子舞番楽」および荒沢番楽詞章本（言立本）諸曲一覧

注（　）内の演目は演目名のみ記載のもの

		(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)
		由利本荘市			にかほ市					由利本荘市
1		四季	翁	鳥舞	通り節	小路わたり	わらび折舞	通リノ神歌	口上わたり	岩戸開
2		翁	三番	*十二大天	神舞	神舞	屋島合戦の武士舞	振リ込ミノ歌	ふりこみ	翁
3		三番叟	鶏舞	翁舞	よしなど	獅子舞	神舞	楽屋ノ歌	五拍子幕合	三番神
4		那須与市	若子舞	三番神	ばんがく	拝舞	地神舞	幕出ノ歌	神舞	鳥舞
5		すゞか舞	曽我	念事	鳥舞　※後に天女	翁	鳥舞	番楽	番楽	衣更着
6		伊加	わらびおり	扇子的	翁	さんば	牛若	翁（三社様ノ内）	おぎな（翁ノ舞）	一人晩楽
7		鳥舞	忍の太郎景時	キサラギ	ばんがくたらう	番楽	弁慶	吉田（三社様ノ内）	吉田	地神舞
8		五拍子	機織	一人晩楽	三人立	鳥舞	山の神舞	若子（三社様ノ内）	やしまぢ	（暦の舞）
9		三人太刀	鈴木三郎重家	地神舞	小弓舞	餅搗	三人立舞	松迎ヒ	くまがい	念　*念事
10		地神舞	義経公吾妻下タり	（暦舞）	熊谷次郎	三人達	三番叟	トンボウ（日山）	ほりかわ	扇の的
11		小弓之舞	橋引舞	舩弁慶	三人餅つき	若子舞	翁	猩々	田村	曽我
12		木曽	熊谷次郎一ノ谷合戦之事	曽我	うれしき舞	さかさま番楽	空臼舞	鎧揃へ	とり舞	潮酌
13		蕨折	佐藤次信忠信矢嶋団の裏合戦	（山神舞）	蕨折り	やしま	獅子の舞	幡揃へ	一人もちつき	（山神舞）
14		山之神	裏矢島	潮汲ミ	やさぎ獅子	ねっこ切り舞	御神楽	大江山	たろたろ	女舞　*蕨織
15		花ノ御礼	弁慶舞	三人立チ	空臼舞	二人舞	忍ふ太郎	曽我	三人立	（三人立）
16		（空臼からみ）	松迎舞	女舞　*蕨折		熊谷次郎	源頼光	田村	やしま	舩弁慶
17		柱堅	小田八郎きそ舞	切合		牛若弁慶	御花銭の読み方	清重	影清	切合
18				木曽		やっちゃぎ獅子		堀川	重蔵	木曽
19				鐘巻		四人空臼		鈴木ノ三郎重家	ゆらゆら	金巻
20				機織リ		花・読み		蕨折り	さるばんがく	機織
21				信夫				修験舞	団七	（山の神）
22				岩戸開				御神楽	さつま	信夫太郎
23				鳥舞				（猿番楽）	やさぎじし	天女
24				桜子					わらびおりの女郎	
25									からうすからみ	
26										
		坂之下番楽『獅子言立　全』大正九年	屋敷番楽・熊谷治郎兵衛家所蔵本　明治三十六年	濁川獅子舞『獅子舞根本記』元治元年	伊勢居地番楽『伊勢居地獅子舞神歌』昭和五十八年	釜ケ台番楽『釜ケ台の獅子舞』昭和四十三年	冬師番楽『冬師獅子舞謡』昭和六十三年補正	鳥海山小滝番楽『鳥海山小滝番楽舞』昭和十六年	鳥海山日立舞『郷土藝術　日立舞』	荒沢番楽『舞子案内』
				最後に「乍恐奉申上獅子舞乃事」を記す。	最初に伊勢居地獅子舞（番楽）等について記す。	最初に保存会結成の趣旨、獅子舞等について記す。	他に拝舞（早舞）、二人餅つき、御神等の演目を記したものもある。	最初に「鳥海山小滝村番楽舞之事」を記す。		最初に「乍恐奉申上獅子舞之事」を記すが、冒頭部分が欠落している。

詞章本（言立本）

（一）坂之下番楽『獅子舞言立　全』　大正九年

（表紙）

獅子舞言立　全

四季　鳥舞　蕨折
翁　五拍子　ソッソク
三番叟　三人立　山之神
那須与一　地神舞　餅搗
スヽカ舞　小弓舞　唐臼舞
可笑　木曽
伊賀　今田八郎

四季

幕出
へ番楽太郎は、岩谷に籠り、さら〳〵さらりと、いでとりたり
中舞
武士舞四本堅ニテ終り

翁

幕出
へちりヽや、たらりら、どう〳〵やらりんかと
へあれは、何所の翁とも、いづくの翁峯の松、沢辺の鶴亀や、翁は先に生れづや、松は先に生れづや、いざ〳〵いでて、年くらべせんやひめこ松、鶴は千才、亀万劫、うとふたり彼の翁なり。
はやし
へゑんやァらァ、はんやァさァさ、はんやァさァ、はんやァさァさ、はんやァさァ、
「はんやァさァ」
中言立
へ花の色、春咲そむ夏のよし、秋になる冬までも、身は衰（オトロ）へし、たのしむ声の目出ださよ。春は来て、秋は行くてふ、つばめの鳥、此殿の玉のゆどのに巣ヲかけて、十二の卵を産みそたて、さよつるこえの目出度ださよ
へはって彼の翁は東を伏し拝んで見奉れば、観音の浄土も月高く見へまします。はって南を伏拝んで見奉れば、薬師の浄土も月高く見へまします。はって西を伏拝んで見奉れば、あみだの浄土も月高く見へまします。はって北を伏拝んで見奉れば、釈迦毘沙門の浄土も月高く見へまします
へ空には百海玉のはた、下には万所を八重たヽみ、錦の御座をしすろうて、小金の蝶は舞遊ぶ。天竺の万代の池の亀は、甲に三玉を載き、額には四海の浪をたゞんだり。峯の松風さっ〳〵と、谷のいさごりん〳〵と万代の言（コトバ）もたへずとふたり、うとうたり
へはって彼の翁は、髭の長きと我君の御よはいと、千代に八千代や、千代と御万才にすぐれたり
へはって彼の翁は、目出だき事を申そふや。上には天長、下には地久、御観円満息災延命とふみしづめ　切拍子ニテ入ル
ヤン〳〵チク〳〵、ヤン〳〵チク〳〵

三番叟

幕出

〽吉田野に〳〵鶴と亀との齢にて祐福心ぞまかせたり。

はやし

〽ヤァ鶴と亀との齢にて、祐福心ぞまかせたり

右四本堅

中言立

〽いや〳〵とふざい。東方、南方、西方、北方、中央に向て、きり〳〵きっと舞って候。舞いてのついでには、目出度へ事を申そうや。されば先に参りたるは翁と申して、色白く背は高く、大衣紋に指貫ぎ、息災の来るまで、はかきよううったる式の面をとって顔に当て、天竺通る地蔵菩薩のめした芦毛馬の尾をとり、鬢髭なんどにひっ造り、此所を百世百代千代万代、御観延命災息、太平太楽どう〳〵と、ふみそめたる三番叟にて候。されば、唯今参ったるは三番叟と申して、それにもおとらずとて、色黒く、背もちいさく候。されば、天道のほしの如くにいながれし、式諸人の人々は、何を見てどう〳〵と笑せたもう。我もしらずに笑って候

〽いや〳〵笑ふ客相は、し、、は、、なんど、笑って候

〽いや〳〵是も時の狂言。されば、鹿島育の者なれば、鹿島で習ひたるは鹿島拍子、三島育の者なれば、三島で習ひたるは三島拍子。上の拍子も八拍子、下の拍子も八拍子、合して十六拍子、中にもたいごの拍子、おんたのみ候

〽ヤァ、上を見たれば桜川とて流したり。〽ヤァ、下を見たれば藍染川とて流したり。〽ヤァ、桜川ヤ藍染川ヤ、何を千鳥ニ泳ぐやら。〽ヤァ、沖にかもめのまわるように、渚に千鳥の羽よぶように。〽ヤァ、ざっと舞いては舞い戻し。〽さっと舞ては舞戻し

那須与市

幕出

〽よふ〳〵いそぎ行程に、是ははや沖の汐屋に着にけり

中言立

〽ヲヽ、源氏と平家の境の的をたてばやなんど、ばんじ候。陸に立てば珍らしからず。沖の汐屋に立ばや、なんど、ぞんぢ候

〽沖の汐屋に立る的は、舩の上にも筏をゆい、筏の上に立つるとも聞いてある。波はうきつ沈みつせし程に、射取べき者はさらになし。実に〳〵忘れてある。下野の国の住人那須与市宗高こそ、弓は小兵なれども、手待人とも聞いて有る。いざ〳〵彼人呼出し、彼的程なく射とらせ申さばやとぞんじ候

〽源氏と平家の境の的たったと聞いて、いざ〳〵御覧じ候へ共、源氏の氏神正八幡の守にて、彼的程なく射取りたり

〽常陸の国は八百町をかさねて、授だいに賜はったり。所持する那須こそめてたけれ

すゞか舞

幕出

〽浮世めぐる花車、浮世は車の輪の如く

〽幕出はれ〳〵、幕さへ出はれば事錦、ながまさしる世に　〽ソラ、いよ〳〵さ

〽エンヨァラ、すゞかにまわれソレヤ〳〵　〽ソレヤすゞかにまわれば事にしき、ながまさしる世に　〽ソラいよ〳〵さ

〽エンヨァラ、鏡見れ　〽ソレヤ見れ、鏡を見れば事錦、ながまさる世に　〽ソレヤいよ〳〵さ

〽エンヨァラ、鈴を振れ　〽ソレヤ振れ、鈴さへ振れば事錦、ながまさしる世に

〽ソレヤいよ〳〵さ

〽エンヨァラ、芝屋めぐれ　〽ソレヤめぐれ芝屋をめぐれば事錦、ながまさしる世に　〽ソレヤ、いよ〳〵さ

可笑

口上

〽ヤァヤァ、唯今の者は何んであった

脇詞　〽尊ひ神の花の若子
可笑　〽尊ひ神の花の若子でもあれ、此鼻の若子でもあれ、高いて〳〵物引て引こくられだ
脇詞　〽ソレヤまた何を引こくられた
可笑　〽天竺の三日市で買った煮び、引こくられた
脇詞　〽煮びではあるまひ、帯であろふ
可笑　〽実に其帯よ。もう一品引こくられた
脇詞　〽ソレヤまた何を引こくられた
可笑　〽天竺の三日市で買ったなっとふ神、引こくられた
脇詞　〽なっとう神では有まい、とふ〳〵神であろふ
可笑　〽実に其とふ〳〵神、此二品引こくられた。何んとして取返したへものだ
脇詞　〽三本水がしらの、猫の爪がくしにて、とこ〳〵とねた所の歌でなければ取返されねーものだ
可笑　〽己も若ひから、早へ男だ。夏あぶのぶんと、とんで行所、袋ねづみにとっくびた
脇詞　〽置けば粕になるものだ
可笑　〽ヤレ〳〵、我等にだまされようか、夏梨の香がら、好姉子達の香がら、ほんがら〳〵とす
脇詞　〽能ぐかんだらよかろふ
可笑　〽我等が云様に、うすほじやらくさい
脇詞　〽づっと念入れてかんだらよかろふ

伊加

幕出
〽立来る波もさっ〳〵と、けたて〳〵、なもはや護神の御神体とあらわれけり
中言立　〽ヲヽ、只今八千に余り、九千近ぐ老人一人出来って、神功皇后、宇佐八幡のことわりかと思へば、彼白雲にさっといらせたもふは、実に〳〵ふしぎとぞんじ候。〽オヽあれは本地八幡大ぼさつの御神体にてましまさば、結跏趺座に坐を組んで、日本六拾六ヶ国唯一目に、えんやさ
中言立　〽二月や〳〵初卯の神楽の面白や、うだへやうだへ日影さす袖の白木綿、かへす〳〵もうとふとかや
中言立　〽実に末世と云ひながら、神の誓はいやましに、斯あらだなる御相好、拝むぞや、たっとかりける此君の御神徳ぞ有難ぎ、鳥類、畜類、鳩、ふぐ松の風までも皆御神体とあらわれたり

鳥舞

幕出
〽あすは祇園のまつり事〳〵、去来さら出で天女舞ふ、いざ〳〵出で天女舞ふ
拍子
〽エンヨァハ、とりら〳〵　〽ソレヤ、とうりら、アヽアアヽヽ　〽ソレヤ、らはらとりら　〽ソレヤとりら、アアハアハヽヽ　〽ソレヤ、いよいよさ
右四本堅
末はくずしにて終り。舞は四本堅

五拍子

〽エンヤァラ、東山、小松かきわけ出る日は、神代の春の始め成る者〳〵、ヤァ
〽ハエサァサ
〽エンヤァラ、松島や男島や、浮世とこぐ舩は
〽池とは小金、遊べ渡の舩〳〵ヤァ「ハエサァサ」
〽エンヤァラ、御鳥海の道辺に登りし国見れば、世界も広し国もおだやか〳〵、ヤァ「ハエサァサ」
〽エンヤァラ、奥山で笛とたいこと急げども、花のや若子、舞をすゞかに〳〵、ヤァ「ハエサァサ」
〽エンヤァラ、伊勢の国、高天が原にはしめはえて、＊申すや祈る神遊ぶ、歌へば　聞く天の磐戸か〳〵　＊申スヤ祈ル、神代ナル者〳〵、ヤァ、ハエサッサ

三人太刀

幕出

〽七日行く〳〵浜の砂(マサゴ)の数よりも、尚も久しき神代御(ミ)代かや、面白や〳〵　〽ソレヤ、ハエサァサ、ソレヤ、ハエサァサ

二人目

〽爰(ココ)も高天が原なれば、集まりたまへや四方の神々、面白や〳〵　〽ソレヤ、ハエサァサ、ソレヤ、ハエサァサ

〽爰も高天が原なれば、集まりたまへそ四方の神々、面白や〳〵　〽ソレヤ、ハエサァサ、ソレヤ、ハエサァサ

三番叟拍子

〽ヤァもたり〳〵、あやのこじからしまでくだろば　〽ハエラヽァラヽ、エンサァサ〳〵〳〵　右三回

三番叟拍子

〽ヤァもたり〳〵、あやのこじからし、までくたろば　〽ハエラヽァラヽ、エンサァサ〳〵〳〵　右三回

〽ヤァもたり〳〵、あやのこじからし、までくだろば　〽ハエラヽァラヽ、エンサァサ〳〵〳〵　右三回

〽ヤァもたり〳〵、あやのこじからし、までくだろば　〽ハエラヽァラヽ、右三回ニテ終り

地神舞

幕出　早三島

〽エンヤァラ、東山小松かきわけ出る日は、神代の春の始めなる者〳〵　〽ヤァ

舞　〽五拍子、早ミしまニテ四本堅

〽エンヤァラ、面白や〳〵、此所のとんの、此庭に、まんだらよんねの世にまれて、足原長者の世になれば、まけども〳〵つきもせず、此庭一時とふむ人は、七千才まで栄へたぞ、八千才まで栄へたぞ　〽ゾレヤ、チン〳〵チクチン、ソレヤ、ハエサァサ〳〵、ソレヤハレヤ〳〵ハレヤァサ、ハエサァ〳〵

〽ヤァラァ、地神のいさみし舞なれば、笛と拍子を揃へつヽ、いさみし神は舞をすゞかに舞をすゞかに、舞をすゞかに　〽ヤァ・・ハエサァサ

右四本堅

後言立　きり拍子にて、武士舞四本堅

末　三番叟拍子にて幕入り、終り

小弓之舞

幕出

エンヤァラ、爰も高天が原なれば、集りたまへや四方の神々、面白や〳〵　〽ソレヤ、ハエサァサ〳〵　右二回

五拍子にて四本堅

はやし

〽エンヤァラ、八幡様は弓矢のじようず、柳の裏葉を的(マト)として　〽ヤァ、向矢先に悪ま来たらず、悪まかよわじ、〽ヤァ、ハエサァサ

舞戻

〽エンヤァラァ、何原逢(アウ)や、明ケ渡(ド)原逢や、向矢先に悪ま来らず、悪まかよわじ、ヤァ、ハエサァサ　右二回

〽エンヤァラ、東(ト)方より来る悪まに、矢先を揃て東に向て射(イ)はらひば、ヤァ向矢先あくま来らず、悪魔かよわじ、ヤァ、ハエサァサ

舞戻

前と同じ、何原あうの歌なり

南方、西方、北方共に同じ、中央も同じ

後　切り拍子にて、武士舞四本堅

末　切合にて幕入り、終り

木曽

幕出

〽木曽義仲の御供に、よふ〳〵急ぎ行く程に、栗から崎の其中に北国の谷に着(ツキ)にけり

早ミしま、四本堅

中言立

〻木曽殿やく、信濃を立せし御時は、拾万余騎にて立せたまいしが、今川方を通らせたまいし御時は、主従七騎にうち亡され、今はたよる者なかりけり

〻ハッテ、御身は何国の僧、木曽の僧　〻ハッテ、御身は何国の女、木曽の女

〻木曽の僧にてましまさば、何をか佐ゞむべし、今は何おかかくすべし。木曽殿の身内に、今井四郎兼平が兄弟に、葵巴山吹とて我等兄弟三人の者なりしが、葵と云し兄弟は、栗柄北国が谷にて討死なし、夫を聞き山吹は行方知れずに失にけり

〻今は早や、巴ばかりの御供なり。心はさめくとせし程に、法華經の提波の本にて兄弟の葵をとむらばやとぞんち候

〻一者不得作、ぼん天王、二者たいしやく、三者魔王、四者でんりんじゅう王、五者仏身、うんが女身速得成仏とは説かれたり。

今田八郎

〻ようく急ぐ行程に北国が谷に着けり。我は是く、巴と云し女武者、七拾五人の力なり。今田八郎を追い取り□、火水なれと責られたり

〻我は是く葵と云し女武者、八拾五人の力なり。今田八郎を追捕□、火水なれと責れたり

末　切合にて幕入り、終り

蕨折

幕出

〻親の為、おがさわらびのく、去年古雪村消て、急ぎ行くこそたのもしやく

〻我も二人の親を持ち、年たちよわい傾けば、岸の額の根なし草も、かぎわとならせたまふに依って、首陽山ニわけ入って、蕨を折りにきたりたり。今は是迄来りたり。おそろしや、四方の山路をほのぐと見渡せば、去年降し白雪も、村消残りてまたらなり。思の数は積り来て、氷の中のかぎ蕨、一筋おるも親のため、二筋折も親の為め子のためと思へば、くる人更になし。子は其親に孝あれば、子に又親は孝をなす

一重越し此小川、蓬莱山に水まして、舟はあれ共船頭なし。船頭ありても櫂棹なし。何とて此小川を越ゆるべき勢は更になし。岩打浪はたゝまれ共、我は何とてあらざらんと身をしづめ、我古郷をほのくと見渡たせば、霞かゝりてはるくと、やらなつかしの古郷や、究になつかしの古郷や

〻ヲヽ、今朝の嵐万戸はげしく候に依て、船場の辺に立よりて、船場の辺をおとふくとながめばやとぞんじ候

〻ヲヽ、首陽山に分け入りて、蕨を折りて戻る女ニテ候。一重越し此小川、蓬莱山に水まして、舟ハあれども船頭なし。船頭ありても櫂棹なし。向のみきさに立せたもうは、祖父翁殿ニテましますか。祖父翁殿ニテましまさば、舟を一棹さし越したびたまへやのう。

祖父翁　〻夫祖父翁とも、年若き時は三寸の花の筏もつみくだし、朝夕舟ニテすきたる祖父翁ニテハ候へ共、今ははや年たちよわいかたむけば、よの若き方をおん頼みそーろへ

女　〻よの若き方を頼むべき方は更になし。此小川の船を一棹さし越したびたまふ程ならば、祖父翁殿の上に召たる麻の衣をすゝいで参せ申べし

ぢ　〻夫ハ女、誠か

女　〻舟を越るの嬉しさよ。兎も角も祖父翁殿の仰せに隨ひ申べくにて候

ぢ　〻夫は誠ニテましまさば、向の渚にしづくと御待ちむかへ申そろへ

舟越　〻八拾ニ余り九拾に近付祖父翁ハ、舟を越すならば、年立船のくきくさ船、なびく嵐にさそはれて、向の渚ニ着にけり

ぢ　〻ヲヽ、船おば難なく越付参らせ候にが、船の中にしづくと御乗り候へ

〻うつゝにあまわし老の身の、末を頼のはかなさよ

舟越　〻八拾ニ余り九拾ニ近付祖父翁は、舟を越すならば、心をしづめて御乗りあれ。水にかげはさしけ者、四海の浪ハよりけ者、なびく嵐ニさそはれて、向の汀に着にけり

ぢ　〻ヲヽ、船おば難なく向の（みきわに）越付参らせ候に依て、見苦しくは候

得共、祖父翁が屋形ニしづ〳〵と御入候へ
女　へ祖父翁殿に申べき事の候
ぢ　へそれはなににて候ぞ
女　へ親の頼をとけたく候に依て、今日より三日三夜のいとまをたびたまへやな
ぢ　へそれ、花人を待ると云ふは、祖父翁ハけっき申そふか。一時、二時、三年、万年送り越すよりも、尚久しく候ニ依テ、今日より三日三夜のいとまは、いや〳〵叶ふ間敷ぐ候
女　へ夫は誠にてましまさば、一日一夜のいとまをたびたまへやな
ぢ　へ実も思は面白や、親の願を念ずる子ニハ、夫天竺ニの大天狗もあゆみをなすと聞ぐ、我は是、今日より一日のひまになんのうろんあるべきや、我は此小川の端にて御待ち中べくにて候
女　へ嬉しやな〳〵、親の願いを得べき事の嬉しさ嬉しさよ。日中の里に着にけり

そっそく

幕出
へヤイヤイ、蓬莱三郎だ、五郎た。松の褶打に行かねか、己又牛子ニくら置ね。その様な小支末の合ねものには、かまひね。己又若へから小拍子で斗りあるぐ男だから、小拍子たのむ
ぢ　へやれ、そっそく、そっそくや〳〵
へや、唯今の者はなんであった
へぢおふ
へぢおふでもあれ、ざおふでもあれ、己が松の（ほた）折りして居た処、片つまとってぶんとひこくられた。己がば、アで者は、此様な運気に部屋の奥にひこまって、ぢい〳〵ぢいと云うた者だ。ば、ア、なにせばやと云ふた処、ぢい〳〵茶焚物取に゛ってくれと云ふ者だ。アレ〳〵、ば、アが云事なれ共、今日ハどごそごに番楽があるはづだ、茶焚物などとりに゛ってられね、いや〳〵と云たれば、晩げの細工などか、れてならねと思って来た処だ。内山よかろふか、外山よかろふか
へやれ〳〵きのふまでも、あさってまでもない、しだら木は、先度さつま川の端に、のろ〳〵のろっとして居た、己が若いから風もよい男であった。未だその風ははなれねて、此木見附た
木おきな　へ木を背負つて〳〵つっこげだ。此様な運気に、天竺ニの沼の田螺さへもいるで事ある。己が荷縄てものは、去年のしなわらの、わらみごでなった荷縄でござる。つっこけだもどふりだ。兎角此様な木にかかっていられねへ。外山にいごろふが、内山にいごろふが
ぢ　へ爰を通らせたまふ人は、なに人ぞ
おがし　へはってな、此あだりにわるいよつねの居たで事ハ咄では聞いてある
ぢ　へ三日先ニ、蕨折の女性ハ通らせたまふ
おかし　へなに、人だら人だといはねへ、道理で木で切て、ひっちょはれた。三日先の蕨折の女性と云ふ者ハ、之より天竺ニの御内裏様の一の后にそなへられ申して、拾弐人の女性達に衣のつまとらせ、拾弐手箱ニ腰ヲ掛ケ、雨の降ニモ、日の照るにも、左扇でばちやり〳〵。先度さづま川の水のました時、舩を越してもろふた。面も赤染だ、ぢおふでら、さをふでら、川の底にとっさがさかさまにさ、て、死ねて事をそっと聞だ事がある
ぢ　へ一夜二夜来るが〳〵と待ち者、今も来ぬぞや、くやしさよ、此世で逢すば来世であふ、来世であわずば、みだのじゆうど逢ふ。后の姫エー

山之神

幕出
へハンヤアラ、山ノ神〳〵、山デ育チ山ノ神、ソレヤ、ハイ〳〵、ソレヤ、ハエサァサ〳〵
右四本堅
末
切拍子ニテ抜刀、四本堅ニテ終り

花ノ御礼

幕間ヲ御拝借シマシテ、一言御花ノ御礼申シ上ゲマス

一金　三千円也
金浦御船主御一同様ヨリ
一金　二千円也
平沢町御船主御一同様ヨリ
未熟ナル我々共ヲ愛シ愛サレマシテ、斯クモ沢山ノ御花頂戴イタシマシテ有り難ふ存じます。今後亦のご縁ある迄も、大いに勉強シテ皆様に御満足与へたい覚悟で御座います

（註　「花ノ御礼」の後にペン書き、鉛筆書きで「空臼からみ」の順や、鳥刺の文句、人名などが記され、その次に「柱堅」が毛筆で記される）

昭和49年6月23日
1. 出だし　2回
2. 臼引　8回
3. 三番叟　5回
4. エレンコ　3回
5. オカメ

昭和49年8月14日
少年番楽団
唐臼舞
1. 出だし
2. 餅搗
3. 三番叟
4. 行つがい
5. チェチョヘロヘロー
6. エレンコ
7. アメウリ

からうす舞
1. 出だし
2. 臼引き
3. 三番叟
4. 行つがい
5. チョヘレトヘロレ〳〵
6. エレンコ
7. ミサエナ節
8. チヤチャカ
9. イセオンド
10. アメウリ節
11. トリサシ
12. チョヘレットロレットロロ

茂木浅吉
茂木光五郎
茂木助次
小沼藤七
茂木房太郎
茂木嘉七
茂木勇太郎
佐藤春造
大工　茂木冨次
昭和五年正月新調　鳥居下一本杉
（註　小太鼓新調の記録。言立本は鉛筆書き。当時の記録が残っており、人名はこれによって訂正した）

からうすからみ
一．奥ノミヤマノヒノ木ノ枝ニ、鳥コ一羽トマタ〳〵
二．ダマレ子供衆〳〵、大人衆ニダマサレ、鳥トッテケルゾ〳〵
三．親ノユズリデ、カサフセヨカロ〳〵
四．アケルハ大事、大事、大事、大事ジヤ
五．上ノ方ノモチオバ、下ノ方ニコキ下ゲ
六．下ノ方ノモチオバ、上ノ方ニコキ下ゲ

柱堅
一　建物ノ中央ノ柱ヲ藁ニテ包ム
一　四方ヲ〆縄ヲ張ル

一　備付：米、水、刷束、薪焼木、刀、扇、手拭、水ホーキ
準(朱)ハ岩戸開キニテ始メ、前立終、五拍子ニテ四本堅始リテ、獅子ニテて刷束、焼木、刀、ホーキ、扇、手拭ノ準(朱)ニテ柱ヲカラム。終ツテ岩戸開キノ後立ニテ全部終ル

大正九年九月改書
坂之下
若者

（高山　茂）

（二）屋敷番楽・熊谷治郎兵衛家所蔵本　明治三十六年

（表紙）

講義教本書
講義教証
所在済
熊谷松□(蔵カ)

覚

一　先晩学　二　とりまへ　三　翁
四　さんバそう　五　みがくら　六　内裏ノ后若子
七　曽我舞　八　可笑　九　忍ノ太郎
十　はだおり　十一　矢嶋小弓　十二　義経公関破
十三　熊谷治郎　十四　鈴木三郎　十五　蕨折
十六　西塔弁慶　十七　ちがらく　十八　日向ノ八ッ日照小弓舞
十九　松向　廿　橋引　二十一　三人立

翁

へち里りらゝりろやらゝりろやくく
夫レなに志よの翁ぞや、是レいちぐの翁ぞよ。翁なが先きにうまれぢや、松か先きにうまれずや、いざさらに出て年シくらべせんのひめこ松よ
へ伊勢神明天照大神のおしめ玉ふそ、ぎんのおもてお取ツて皃(かお)にあて、又かりぎぬのそでおひるかへし、ふりもどしたる翁ナの目出度さよ
へ翁ナのひげのなかぎより、我君ミの御代の久さしさよ。ミ称の松風さつくと、谷のいさごハ連いくと、千代にやくの゛ゑい千代の御万歳(ごまんざへ)にすむよなよ。さて春ルハ来て秋き行ッつばめのとの、とのゝ玉のゆどにすおかけで、十二のかへごうミそだて、さやずるこゑの目出度さよ
さで翁ナハ東シおふしおがんで見だでまづれバ、薬師のぢよどふや月高かく見へます。扨南おふしおがんで見だてまつれハ、くわんのんのふぢよどふや月高く見へます。扨西おふしおんがんで見奉バ、あミたのぢよとふや月高く見へます。扨北タをふしおがんで見奉まつれバ、釈迦仏(ほとけ)のぢよどふや月高ぐ見へます。それ天竺のまづ代川のいげのかミハ、それさんしゆくのほしおいだゞき、四海にハ四海のなミもたどふたよ。そらにハびやかい玉のほし、にしぎのござおぐよたよ

三番

へおふさへこふさへ、きりくきつとまいてもふそふや。きつとまいてのごり志よにハ。よいこどおもふそふや。よい事なりでハ、目出だいこどおまふそふや。

されハ先きにまいたるハ翁ニて候。たゞ今まいたるハ三バさりごふニて候。されバ先きにまいたる翁と申ハ、せい高く色白ク、百ごふ万歳へへだる翁ニて候。只今まいたる三バさりごふは、せい高く色黒く、百ごふ万歳へへたる三バさりこふニて候。されバ先きにまいたる翁と申ハ、大もんかさしぬげ、とくさへりやうのかりきぬて、はりきおつたるや、しきの面ヶ取ッて皃にあて、百だへ百世千代御万歳、このとごろおしつとりど、ふミしづめんか為の翁ニて候。たゞ今まいたるさんばさりごふも、先きにまいたる翁のしよぞくにおとるまへとして、大もんがさしぬげ、とくさへりやうのかりきぬで、はりきおつたるや、しきの面ヶ取ッて皃にあで、百代百世千代御万歳、この処おしつとりど、ふミしづめんが為めの、さんばさりごふニて候。されバ天竺のほつたる川の水上ミお、一ちたん登りて見でやれバ、ふどふの浄土おかミ玉ふ。　二だん登りて見てやれバ　二王の浄土おがミ玉ふ。三段ヶ登りで見てやれバ、釈迦の浄土おかみ玉ふ。

釈迦のめしたるおころもお、つくぐ〳〵と見でやれバ、あへぎやうや、ひづずの毛でおつたるおころもの事なれバ、適や心も言ばもおよばんはがりのおごろもなり。向へ取るてへころももひつちり、われらがびんひげニもひつちりしぎ、しやうじんの人々ハ、ごりよふふしの如くに、東西ひつちりとえふかれで、なにおわらわせ玉ふやら、どう〳〵ともわらわせ玉ふ。われらもおかしさのまヽに、しヽしあはヽつとわらわせ玉ふ

されバわれがひやうしととふするハ、にしまてならつてにしまひやうし、かしまてならつてかしまひやうし、上ミのひやうしもやアひやうし、下のひやうしもやアひやうし、あわせて十六ひやうしおどヽのへで、しつかとはやして玉ふれや

鶏舞

へ夫レ善光寺の如来と申するハ、どう〳〵しな〳〵八ツほんのからおとし、八ツのきたはし、十六本の金柱、通しがにハにるりをのべ、三ヶ光ッの月にくもりなし

へ扨もさへたや、あらかねさへたや、扨も榊やうどうたり。前へハ海ミ、くがハさんのん神ミの地ならハ、うのくにさしてもかんざしたや。それおもへハ、まがはらのやかミまてもうのしにさしても、かんざしたや

へ鳥は天ヶとぶひやうしにつぐ、よる〳〵のどもにごらざるもの〳〵

幕出ニ若子舞

へあすハきおんのまつりごと〳〵、いささらに出て若子舞うだ

へ一　若子ぢや〳〵、おもしろや〳〵

へ三　ほのぐ〳〵と〳〵とあけて見れ、おもしろや

へ四　立ちまわれ〳〵、おもしろや〳〵

へ嶋めぐり〳〵、おもしろや〳〵

へたもと取レ〳〵、おもしろや〳〵

へ八尺おび〳〵、五尺かづらおかげそれて

おぎを見しよバ、からのえお見しよ、おもしろや

すへひろがりの、かへだえを見しよ

へ只ふへと太皷ハいそげ共、花の若子ハまへおしつがに

曽我

ありわらにありし時、小弓と小矢の〳〵、父おバいとこにうたれしや。うたれしとごハとごぐ〳〵に、あおきあをさがミだの山、十や廿になりぬれバ、野にふし山にかぐれ、おやのかたぎおねらへ共、かたぎハ大勢なり、我レら兄弟二人して、ふるさとへ帰りかだりてなぐさまん

かまくらのか□いに、時ならんなつの鹿からんどて、六月の雪をハかの子またらにおかめつヽ、きんごくえんごぐの人々ハ、ゆぎしまがはらのすやぎまで、なひぎもれたるかたもなし。曽我兄弟出たる月ハ、おふぢのヽしそにといそがるヽ

明日ハ〳〵かねでこふれハ候得共、われら将たる所領あれハこそ、われら将たる所領あれハとて、ふぢのヽしそにと、おやのかだぎハ見でも月はやぐ存候

おふせぎの其の中に、おふかしわんぎのひたゞたりに、あぎくさがりのぬかばぎに、烏黒なる駒にのりたる、よそにハ見れハ、見れハかだぎの助つねなり。すつげハ常見るより、心そゞろぎたつて、□とふぎにあふみをはせかけて、ひやぐ駒

引たで丶、ぶかへしにがばどふしゟて、見てのらんとすれバ、はむしやがいげにどはせからまつて、ものまへはるがにのびだりけり
曽我兄弟貳人ゝして、二人の物の申事、さほどすけなぎ親のきうりうとろゟハ、いざや兄弟二人して、さしぢかわんともふせ共 その時弟のすけたかハ、まだしも色あるもみぢ葉の、此秋の夕暮れをまちこへかしなんど丶、ゑつしゆの哥に詠じあり
その夜の夜はんとなりぬれハ、もちたるてんたい、うぢふり〳〵助つねが屋がたにしのびごんて、むほんのたちを、とびだに取つて、せめごんたるや、し丶むゝおとしのちよ戸たゞへて、命のさかへとたゞがたり
しぢよの男をよつたに切つて、名をハ曇井の十郎五郎と名のらせたり

五段終り

わらびおり

幕出テ

へ春のはしめ、かぎわらび〳〵、いざさらに出テわらびおり

我も二人の親もぢ〳〵年シぢよわへにかたむげハ、きの下タの根なし草サ、かぎりとならせ玉ふほどに　しよりうざんの山に出て、わらひおりにきたいだり
おそろしや四方の山なミ来て見れハ、こふずふりしはつ雪に、雪きへ残りてまだ見ゆる、氷の下タのかぎわらび、それをためとて子か又親にかう〳〵あり、親ハ子に又孝行なし。くるしとさらにおもハざる。今朝越し此の川ハ、蓬来山の水まして、舟ハあれ共かへさなし。かへさおあれ共舟頭なし。なにとて此川をこがるゝ勢もなし。いわうつなミハ、よれでやもとれとも、なにとてわれらハ戻らさらんといふいすて丶、わがきし里をほの〴〵となかむれバ、霞ミかゞりてはる〳〵と、なかめのそらにいふわんとや〳〵

祖父翁舞

やら今朝のあらしハ、はつこふにしけぎ嵐のこどにて候得共、舟場の平次も立出テ見ても目はやぐ存候。　やら、むがへにたゞせ玉ふ女郎ハ、あばれやミめうつくしぐ、まんミやうにこミぢこふミやうらつたへあり
あれハふじのかんのふのそふとりのひめにてが候

内ヨリ言

やら、あれハつぐしぶんごふの国、おわりの長者の壱人り姫メにて候得共、親のねがへをはたさんがそのために、しよりよさんの山々出テ、わらひおりの女ナにて候。今朝こへし此川ハ、蓬来山の水まして、舟ハあれ共かへさなし、かへさあれ共せんどなし。なにとて一ト舟子さしわたし玉れやぢおふ殿の、あさにめしたるミ衣、す丶へてまへらすへぐ候
へそれならハ、おがぐのつまにもなろふとかや
へとふもこふも、舟のこへるの内ウしさに、ぢふ殿のぎよゑにもしたごふへし
△うたへ七しよらへしよ〳〵に、ちがよるぢふのさすさをミたれさを、としより舟よ、舟おばミぎわに付けけり〳〵
舟をハよふ〳〵ミぎわにこぎ付ケ申候ほどに、是からすづ〳〵とおんのりやれ候
△うたへ祖翁のこす舟のるならハ、水にかげハ見へにけり。舟ハゆぐやら、心ロハゆぐやら、舟のはやさ、年シより舟よ、舟子おハミぎわに付キにけり
へ祖翁殿に申シたぎことハ候
へそりやなにごどにで候
へ親の願をはたさんがそのために、三ッ日三夜のおんひまをあつがりたく候
へ三日三夜とハ、ことやすぎ事にて候得共、祖翁ハ今花人トをまちるいふわ、一ッ時キハ千ッ日にむかふ。まつ〳〵日をけつけして、しらせもふそひとへ二日、十日、廿日、いや〳〵なりもふさん
へそれなれハ、一日一夜のおんひまをあつかるたく候
へそれならば、親の頼へのありがださに、こんばんハさつま川のはだにまつ居り、はや〳〵やにおが゛ゑり
△うたへそれを思ひハ嬉しさよ。どふも思へハ嬉しさよ。ふかぎ草葉をかぎわけて、ひとしづおるも親のため、ひたしづおるも親のため

△わらびおるうた

へ春のはしめの、こふりの下タのかぎわらひ、おれ共〳〵手にハたまらぬかぎわらひ

忍の太郎景時

へそれもしのぶのゆがりとぎ〳〵

へやら忍の太郎かけとぎなら、さへこのとごろおんまねせよ。やら忍の太郎かけ時ハ、其日のいでたるしやうぞぐには、いつもにすくれし華やかなり。はだに取りてハ、こんぢの錦のひたゞれに、うの花おとしのおんよろへ、五まへかぶとのしころのおふをミんぢと〆、しぢどまきの弓のまん中ミんちと持つて、ゑつかあゆミのはよふの駒にうちのりて、まへのあらしのはけしぎに、うしろのはらを見てやれハ、まつせくらんと、てぎハ寄せる。よせろばよせれ、たんだよせれ。しかもやぐらにありし時、あへのながたち取りてハ、ちかへまつ引〆て、ちよとはなせバ、かの矢もたまらすはつしとあだる。それても矢先ハとまりせす、うふてのあまりていふどめで、やつさしやなものともハ、それてその矢をかへしもせず。馬より下タにがばとふせし、かつけにすゞむつわものを、こてのあまりでゆいとめて、いまはや弓も矢もなけ捨てゞ、なミの打物するりとぬいで、するりハおつかげ、てろりハおつかげ、くそぐのはだがミつかミ取りて、てろりハ二タつになりにけり

機織

身ハならぐ〳〵のそこにすつむとも、のりの舟にうがぶらん。くるはるや、東のそらのはてまでも、おもへたち出るたひころも、うらやまかけてはる〳〵ど、ながめのそらにくもりなく、日もかさなりてゆぐほとに、わかさにはやぐ付にけり

へ是ゟやう〳〵いそぎ行ク程に、わかさが浦三野か池について候。やら、おんそふハなにしやうに、此池のはだにたゞせ玉ふそや。にほんがめいしやうきうせぎどて、ミめぐりでハ候得共、いまだわがさが浦三野が池をハ、しつけんせんほとに、ゑつけせはやと存候。さにあらバ、しばのいおりに一チやとゞまり玉ふかし。池のいわれを、ことねんころにかたつてしらしやうへし

へそれハけとしけるものハ、いつれかゑんよがはなれざよ。此里に年久しく、ふうふの人トのあるゆへに、日もくれんじかたらいふかぐ、やちよこめち、たまつばぎによつてかわん色のたのしミハ、たゝかりそめ、はじめのあぎにとちぎりして、おれはではやと思へしこのはだを、づた〳〵に切りもして、この池にどのそミしや。おそろしや、池水やすミさめてひさまじぐ、身の毛もよだづ目もくさり、ついにうぎ身をなんけし、見るゆめのことくになりにけり、まほろしのよふにうせにけり

機織しゃもん

へとふさへ、しつまって候。たゞいまミめよぎにに人壱人ゝ、まいらせ玉ふ。しんべんふしぎでおぼしめし。やら、あれハはたおりの女ナニて候。てん気能ギ時ハ、二百たんのきぬも織らせ玉ふ。天気あしけれハ、百たんもおらせ玉ふ。時にとのごハ、ミやごにのほり、三年ざへ京なされしが、三年在京其内に、ならひの地頭るすの間男と申して、そつそりとかよわせ玉ふ。され共かの女ナ、元ト ゟぎひ正直の女事なれハ、ついになひぎそふらわす。なひがんがくせ事どて、あるばけ物をたのミ、ちょがいなし、はけ物のちょがいニて なにどわれら金銀米銭かへのぼせるといふ共、とのこハミヤこへ、よぎよにんをつまとして、まつせいのかだらへをなすと、かよふにざんけをなされ玉へば、かの女も元よりたんきの事なれハ、男となりて二でふの弓ミひがさる物、女ナとなりて人々に、はだふれざらんものやどて、今ハはやおるはだもんも、おしぐなやどて、そはなるぎんだぢおつ取り、打切り、かぎ切りて、いそがせ玉ふほとなぐ、わさが浦三野か池について候。やら、此池にしつむ命もおしくなや、国のあるじハおんとめあるとも、よもやとまるまへとて、はやるたもとをふりはなし、そはなる石にこふべをあで、此池にとしづミ玉ふ。とのごハミやより、七日七夜とて、おんけこふあって、我か妻や、いつかだなりとたつね玉ふハ、はけ物のちよがいにて、わかさの池にしつミ玉ふとか

や。此事をぎゝしより、今ハはやたぢもかだなもいらさるもの、すミ染衣もに身やつし、たかぎ所に堂を建、一チたん下タに堂くみ、大川に舟ゞうがべ、小川〳〵に橋を掛、池のはだにハ御寺をたて、ひるハ千ぶ万部供養あれバ、よるハ百万べんのおん念仏をとなへたてまづる。ありがだや、おんそふのおんとむらいのくれきによって、たゞ今三世のすかだどあらわれ玉ふ。おの〳〵様ごらんなされまする通り、ミらへハついぜんのためと、ほゝうやまつてまふす

機織る時うた

きんたのうちおりが、せんびきそへけるハ、はたおりのいけよ。ふれなにくれるハ、これのうちおりか、三世のすがだにあらわれたよ

ミこりのこゑが川の中瀬か、松風のおとよ、あらやさびしのおん事なれバ、ありがだや〳〵おんそふのおんとむらへのくれぎによつて、しやどのくるしミまぬかれたよ。おそろしや、おそろしや、おるはたのうへに立チかゝり、水よにきたつて、はたおりおれとせむれ共、目もくれ、心ロもゑぎきせはどり、さんずの川原にあやはだ、おりはだちよと立てゞ、おる手の下タより、くわゑんどすれバ、あさましや、たぢあがり、三せんとすれハ、うずぐしそめの、きんたのきづまて引キとめられて、げにさま〳〵の事あるを おの〳〵くるしミこらんずる、まつたへぢごぐの中カにも、かゝるくるしミよもあらバ、さゝおんミのありさまハ、ひやんたり〳〵ひやく〳〵のしよとあど取り玉へハ、おんそよいふなミわたつ、かぐけすよふにうせにけり

鈴木三郎重家

やら、おんまへにまがりたつたるしゃもんおば、いがなるしやもんと思召す。あれハ紀州藤城かわづゝのゆへよりも、人目をしのぶ鈴木の三郎重家にで候

まこどやら、今朝通る道者の中ごどおぐハ、おふしゆ秀ひらハ、あまりけいしゆう仕ル。今ハ子供のよになりて、きミにおんこゝろかわりを申さんハ、きミおバおんたてこもると請ケたまわつて候。けさ早々はせも有はやと存候よつて、ミやこに母の老女壱人ンさしおぎ申候得ハ、はしもとのげだんに、しす〳〵たぢあつらへさしおぎ候

やら、おんまへにまがりたつたる女ナおバ、いかなる女ナと思召めす。鈴木の三郎が老母にて候。まことやら、重家ハおく口チに下るよふすを、そつそつとうけたまわつて候。是からしら川までハ、なんぼとふぐへ候。とふぐひとて〳〵、ぎミにほうこふもんさンバ、いかゞめんもぐに候。なに〳〵きぼう壱人ンつぎそへもふさすとて、弟トの亀井六郎、するが、ひたちぼうかへぞん、わしのをうの六郎とて、むねどのつわものうつたるものハ、討そへもふさすとて、弟トの亀井六郎ほうこほおハ、他人のほふこふになろかや。他人ンほこふハ、われらがほうこになろかや、まつ〳〵重家ハこゝにとゞまりて、親ヤ子のゆくゑをよぎに見玉ゑバ、もとよりおばだけ明神ハ、弓ミ矢をあんにふミしつめ、かづらのさとに付キにけり〳〵

重家高館合戦之事

いふべの夜にハ、奥州たかだぢしのびいり、内チ方あんなへととへけれハ、誰ととがむる声ハまた、弟トの亀井六郎が声ト聞クだになつかしや。重家と名のれハ、木戸もあぐ。打物のゝさや打はづし、まつこふミげんととひあがり、てぎをにらむるハ勢まだ、てんにハなり神、地にハひゞだぎぼうぢやぐぶじんとにけれハ、おつかげ打切り、どふ切り、から竹わりに、衣川の中の瀬にて切りふせだ

義経公吾妻下タり

御大将義経公、梶原父子のざんげんによりて、上下十三人ンの人々あづまぢさして、おぢ玉へバ、とかせちよについで候

こゝはせぎ〳〵、くらまそだぢの人トなれバ、山ぶしすがだに姿をかへ、とぎんしづかけほらのかへ、ものうぢ竹おバつへにつぎ、おゑを取りてハかだにかけ、しんせきおバおとりやれ、なんのししへなぐおとやれ

橋引舞しやもん

東西しづまつて候。我レこそ名取り川、六十六ヶ国の御代官のだゑさんにいらミいだされ候

是レ名取川と申ハ、ふかさ四万ゆじゅんあれハ、広さもどふたん、あわせで八万八丁せ川のことなれバ、舟うづでわだすどいへども、たもつといふ事なし。橋切ツて掛るといへども、つゑにぢよぢうならん時キ、此川水上にかけ、十本ン四方ウ七日ぢさがへだる杉壱本ン御座候。かれ木にんげんならづして、夜る切レハ昼るおへ、昼るきれは夜るおへ、つへにぢよぢゆならん時、あるはかせをたのミ占へをなされしが、占へはがせおふせの如クうけ給わて候

六十一のこよミにてをしそらぐ見て、てうどよご手を打チ、是より日光山のふもどにすまへなす、橋元トおとづるごせんが、くまのまへりのなされしが、おんけごふに、こだぢむらさめさらりどふり、駒のたづなをざつくどきらし、一ッ時かの木の下タに、あまばらしをなされしが、かのおどつるごぜんが、一チ夜のちぎりゆかものやどて、一ッしゆのうだにもよまれしが、かの橋壱人ンしてひッかげ、ぢよじゆすならバ目出ださよ

千ン間ン橋ン元ト千ン間ン、二千間の所をけいしよぶんにもまいらしよ。よつて、きん国ク遠国クハ、くまの羽黒の三しよ大ごんげん、きミごはんしよ、四海太平、たミ安全、神護きんじよ、さへはへくく名取川橋引キまへど、ほふうやまつて申

はしひき諷タ

へまんじよさへ、はへくとハうやまってもふす。ちがくハ羽黒の三所ごんげん、とぐゞハくまのの三所ごんげん、ちゝかだ三だい、母かだ三だへ、きやぐのまへかのはし壱チ人ンして引かげ、ぢゆぢゆなすかゝバ目出たさよ

熊谷治郎一ノ谷合戦之事

熊谷やくく、あつもりうどどふとのり出テる。くびをとらんで、たゝもとるくく

△つりのいどまハ、なミの上。あまのお舟ノほのくと、見へて残るハいゆくれの、浦風迄ものとがなる、はるや心ハさそらん

佐藤次信忠信矢嶋団の浦合戦

今日のしゆらの大将たれたそ、なにのどのかミのりつねとかや、やゝ、ものくしや、お手なミもしれす、思ひもよらぬたの浦、その舟ナいくさ、今マハはや、ずいぶにかへすハうぎしずむ、海山ゑずどふに、せめんと舟よりハ時キのこゑくかゆぐにハ、なミをたて月キにしらむハつるぎのひかり、うしろにさすハかふどのほしのかげ、ゑへつやそらゆぐもの、、またまたくるもの、、おんミ打あへ三七五、その舟ナいぐさ、今ニハはやかつげひつげ、うぎしすむとせいしほどにのはるのよのなミよりあけて、かだきとミゆるハ、もれしかごめ時キのこゑとそきこゑたり。うら風なるとハたがまつせ、あさあらくに付けけり

裏矢嶋

それしゆつけのそうだんに、にあわぬそうだんにて候得共、矢嶋たんの浦合戦のよふすを、そつそりとおんものがだり候。こふぐくおんいで候。ころハいづごろなるに、けんりやぐ元年三月十八日のころなるに、佐藤次信、能登殿の矢さぎにかゞりくく、あしたのつゆにとなりにけり

弁慶舞

へさい藤の左門、きたの十郎、内チにてハ、内チにて勝負なさるかや。出テ勝負めさるかや

へ斎藤の左門、きたの十郎、ここにある。またのがしもふさんす。あまたのろふどふ引キつれて、から竹わりに、茄子わりに

松迎舞

幕の内ニテ言

へそれ、ぢおふ殿にしよわせ玉ふ松とのいわれをしつて、しよわせまつたハ、しらんでしよわせ玉ふかや、この松にこたへ候
へやら、この松ど申ハ、われわだぐしの松にでハ候わす。天竺ハしんさんの峯子にそなへ立ツ松にて候

内ニて言

それ東シにさしたるその枝ハ、はるをむがへて華ぞ松よ。それ南にさしたるその枝タは、夏をむがへてす丶し松よ。それ西にさしたるその枝は、秋を迎で葉をそろう。それ北タにさしたるその枝ハ、冬を迎へて雪松よ。中なる枝ハ四せつの枝よ。おふミの国にハせたの長根のすさぎの松とハ、この松の事。あふぎ取ツてハ、一トまへまへましよが、まんさへ楽。へはゑへ

是ハ一ばんニ　神うた

舞台板の四ッなるすまえに、こへ立テて、うたへやまへ風の三神

二はんに

い国より吹き来る風ハ悪ラ風ぜ、中にてかへす伊勢の神かせ

小田八郎きそ舞

きそをどのや、しなのれほ立せたもう御時ハ、十万よきにて増益が、今出川をとほうせ玉う御時ハ、四十七記(騎)に打ちほろぼされ、今は何とてかゞるたよりもなかりけり

御身の内とて、今江の城を金平が青江、友江、山吹と是れ兄弟三人有り。青江と云ひし兄弟は、今此れより北国谷に打死ゆけり

へ一社福徳社社父伝、二社太信、三社真雄、四社天りゆうじをん、五社仏信、福徳。入加入道、となへづ丶く

青江ト云ヒシ女有、八十五人ノ力有。友江ト云ヒシ女アリ、七十五人ノ力アリ。小田ノ八郎、ウ丶トリトタキシメル

（奥書）

明治三十六年旧六月十一日

謄写候也

（裏表紙）

秋田縣由利郡鮎河西沢屋布(敷)於

熊谷松蔵

熊谷松蔵

（高山　茂）

（三）濁川番楽『獅子舞根本記』　元治元年（一八六四）

○十二大天

東北伊舎那天　東方帝釈天
南方焔魔天　西南羅刹天
西方水雨天　西北吹風雲天
北方多門天　上方大梵天
下方持地天　日天照衆闇
月天清涼光　東方火光天

○獅子舞根本記

南嵐シニ北時雨レ、嵐ハ雪ニ誘フラン

○鳥舞

伊勢之国高天原カ原ニ神遊フ、歌謡イバ開ク天之岩戸ハ　二返

○翁舞　幕出

前向　吉利利（キリリ）○ン耶（ヤ）○多囉唎堂堂多羅理欄（リラカン）干堂欠○吾モ何処ノ翁ゾヤ○翁ナヤ先（キニ）生レズヤ○先（キニ）不レ生乎

イザ〳〵出（デ）年（シ）競ベセンヤ姫小松。鶴ノ千歳、亀万却ト諷ウタリヤ、彼ノ翁也

○翁中言立テ

花ノ色（ロ）春咲キ染ムル夏ノ善、秋ハ実成ル冬迄モ、身ハ劣ランス、楽シム声ヒノ目出度サヨ。春ハ来テ秋ハ陸條ノ燕メ鳥リ、彼ノ殿玉ノ湯殿ニ巣ヲ掛テ、十二ノ飼子産ミ育テ、囀ヒヅル音モ目出度サヨ。彼ノ翁ハ、東星ヲ拝ガンテ見奉マツルバ○薬師ノ行堂月高ク見エ在マス○サツテ○南ノ星ヲ拝カンテ見奉ツレバ、観音ノ行堂モ月高ク見エ在マス○サツテ○西ノ星ヲ拝カンテ見奉マツレバ、阿弥陀ノ行堂モ○月高ク○見エ在マス○北ノ星ヲ拝カンテ見奉マツレバ釈迦気○沙門ノ行堂モ○月高ク。空（ラ）ニハ白ツ海玉ノ幡、下ニハ半鐘八重畳ミ、錦ノ○御坐ヲ○シツロウテ○小金ノ蝶ハ舞遊フ○

夫レ天笠ノ跋提河ノ池ノ亀ハ○（ソレ）三宿ノ星を戴キ○見奉マツレハ○額ヒニハ四海之波ヲ湛タリ。峯ノ松風颯颯（サツサツ）ト○谷ノ砂コハ磷磷（リンリン）ト○万ツ代ノ言（コト）ノ葉モ妙伝（タイツト）フタリ歌タリ○サツテ○彼ノ翁ハ髭（ヒ）ゲノ長キ事、我カ君ノ御祝イ（ニ）、千代ヤ千代ト御万歳ニ勝レタリ○サツテ彼ノ翁ハ芽出度事ヲ申ソフヤ、上ニハ天長、下ニハ地久五願円満息災延命ト踏ミ鎮メン

○三番神

吉野ニ〳〵ドンドヽ落ルハ瀧之水、日カ照ルトモ〳〵常ニ大舩、鳴ルハ瀧之水。鶴ト亀トタマフレテ、幸ヒ心ニ任カシタリ

中言立

東方南方西方北方中央ニ向カツテ、キリ〳〵キリツト舞ツテ、去レハ目出度所ニ、目出度イ事ヲ申ソウヤ。久シキ所ロニハ、久シキ事ヲ申ソウヤ。去レバ先キニ参（マイ）ツタル翁ニモ劣（ヲト）ラントデ、只今参ツタル三巴猿子ハ、色モ黒ク勢モ少ク蹋（セツ）タニテハ候エドモ○ヤアラ大紋（ダイモン）ノ差拔（サシヌキ）ニ、徳齊行坊ガ打ツタル式ノ面ヲ取ツテ額（カヲ）ニ当テ、額ヒニハ四海ノ浪ヲ湛（タヽヨ）ヒ置ク

サレハ向ヒ通フラセ玉フ、地蔵菩薩ノ召タル葦（アシ）毛ノ尾ヲ執ツテ、ビンヒゲ杯（ナン）ト拵（コシライ）候。キリ〳〵キリツト舞ツテ候。サレバ此処ニ百世百代之千代御万歳カ間ダ、地ヲシツト〳〵踏ミ鎮メンカ為ニ参テ候。サレバ宿所ノ人々ハ、打鞁ミモ打サズ、吹ク笛モ吹サズ、ドウ〳〵咄ツト笑ハセ玉フ。我ラモ不レ知笑ツテソフロウ。イヤ〳〵笑フ様ハ○シシ丼、ハハア、ホホフト笑ツテ候

是モ時ノ狂言、我ラハ西間生立チノ者ナレバ、上ノ拍子モ八拍子、鹿嶌生立チノ者ナレバ、下ノ拍子モ八拍子、合シテ拾六拍子ノ秋ノ田ノ露ノ靉（ナビ）クゴトクニ、壱ト舞イ舞ツテモトロトモ。五拍子頼ム。イヤイヤ、トウザイ〳〵

打ツタ事モ打チサモ、吹ケタ事モ吹キサセ、堂方院水車マタヤ○ハヤ○サンドハ○申セトモ、四ツ之□葉ニハヤサレテ、壱合程トモ申ソ。上ヲ見タレバ、桂ラ川トテ流レタリ。下タヲ見タレバ、藍染川トテ流レタリ。沖ノ鴎メハ輪ハル様□ニ、千鳥ノ歩行ムヨウニ○ザツト廻レヤ舞モトス〳〵

○念事　幕出

白雲ヤ峯ノ通イ路花散リテ、嵐ハ雪ヲ誘ウラン

○白雲や峯の通ひ路花散りて、嵐は雪を誘ふらん。雪に戻れハ山人の〳〵嵐は雪を誘ふらん

○中言立

抑モ祢ン事重（デ）、楽（ミ）ノ上（イニ）ウイデ遊ベバ、只仏神之誓イ也。向ハ三年カ間タニテ、サレバ女ハ五濁ニ縫イ、仰ケハ守ル誓イバ、イヨ〳〵心カ増ス。夫レ三十三度ノ大願之條々極マル処ニハ、我等住ミシ里之名ハ、門トヲ出ツレバ旭指ス、出羽之右キ浦ラ咲乱レ

上ル　若葉之松ヤ津之国ノヤ、何ニ浦ヤ難波カ浦之長者○トハ、譬バコナタノ事申ソロ○三更四更ノ夜フケテ、五更ノ天モ開ケレバ○エンサ○ドウ○ドウ下向堂

ニ趣テ、古キ人ヲ呼ヒ出シ、和歌ノ遊ビヲ申サバヤト存候

○拍子

酒ハ万事ノ薬ト成ル。憂ヲ忘ル、楽シミニ、只呑酒ニ毒入テ、又呑酒ニ毒去リシ。全クフンカヘテ、毒入テ酒ハ薬ト成シ物、千代ノ世迄モ目出度サヨ

上ル

○拍子

今戒シメテ、又有ニ斯テ其ノ夜モ更行ト御睡眠ナリ。通夜ヲ申取、イカバカリニモ瑞相ヲ象リテハ御入候。八旬ニ余リシ彼ノ祖父王ヲ、三十斗リ成ル人トス。三十斗リノ女ヲバ、二十斗リト成サントス。可様ナル御夢想ヲ蒙リテ候得者、空事ニテハ候マジ。斯テ此事空事ニテ下ラセ玉フ程ノ事ナラバ、我カ朝ニ於テ源氏實方ナルベシ。伊勢小町ソウ言フモ昔シ人

○拍子

立寄リ近付レントスレバ、其モ長者ノ久シサヨ。鶴亀ヤ〳〵アノ松緑トリニテ、浦嶋カ玉手箱開ケバ老ノ山ト成ル。閉レバ跡モ近ク成。人ヨリスギテハ若ク成ル。ヒタヨリ。スギテモ若ク成ル。盛リノ花ヲ見ルニ付テモ、千代ノ世迄モ目出度サヨ

○扇子的　幕出

漸々急キ行程ニ、沖ノ潮屋ニ附ニケリ

○中言立テ

源氏ト平家ト境イ之的建テバヤナンドド存候。陸ニ立テハ珍シカラヌ、沖之潮屋ニ。立ツル的ヲバ浪ミハ。浮キンズ。沈ムゾ程ニ、浪ノ上ニハ立ツベク様モナク。波ノ上ニハ。筏ヲ結ヒ、筏ノ上ニハ立ズルトモ。聞イテ有ル。実ニ々々忘レテ有リ、奈須ノ與市九郎宗高ハ、弓ニハ小兵ナレドモ。テマツ人ト供モ、聞イテ有ル。イザ〳〵。門的程無ク射トラセ申サバヤト存候

○拍子

源氏ト平家ト境イ的、源氏之内神正八幡マンブリ重藤弓ノ真中ユツ引メテ、ヒヨト放セバ、廉的程ナク射トラセ申サバヤト存候。常陸ノ国ニハ八百八町、重子テ酒代ニ給ハル。主人ナルコソ目出度サヨ

○キサラギ　幕出

立チ来ル浪ハ早々ト〳〵二辺蹴立テ〳〵、南無御神体トハ現ラハレタリ

○中言立テ

神宮皇后八幡山之理リハ、有ルカト思イバ、彼ノ白雲ニサツト居合セ候。世ニ世ニ不思儀ト存候。吾レ社八幡大菩薩之御神体ニテ在シマスカ、結跏趺座クンデ、日本六十六ヶ国壱ト目ニヱンヤサ

○拍子

キサラギヤ。初卯之神楽ラ。御面白ヤ。諷イヤ。諷イヤ。神ノ誘ヒヲ、返々モ諷フタリ。　実ニ〳〵忘レテ有リ。末世ト有ナガラ、数ツ有ル玉ノ。イトフノ卯、獣類翎サ松吹風モ。南無御身体ト現レタリ

○一人晩楽　幕出

旅ノ衣モニ露無キ。　露無キ袖ヲシボフルラン

○地神舞　幕出

神々ヤ深キ遊ビシ、遊ソブニハ、笛ト拍子ヲ内打チ揃ロヒ、勇メシ神ハ舞遊ブ

神諷

○暦舞

○舩弁慶　幕出

漸々急キ行程ニ、早ヤ高舘チニ附ニケリ

○中言立テ

斯ウ前ニ。罷リ立ツタル者ハ。如何成ル者ト。思召ス。我コソハ記州ニモ隠レナキ、齊藤之武蔵坊弁慶トハ、サテ某シカ事ニテ候。今度聞ハ、鎌倉殿御兄弟之合中カヲ隔テ申サルニ付、奥州ニ下リ。秀衡ヲ頼ミハヤ、堀川ニテ御立合可レ成トテ、十三人ノ人々ハ、沖ヲサシテソ出ニケリ。早ヤ沖ニモ成ヌレバ、互イニ梶ヲ取直シ、急キ参イテ候。既ニ其日モ夜半斗リニ成リシカバ、乱風海上ヲ覆シ、サット黒雲舞下リシカバ、牛若君、弁慶ヲ近付ケ仰ケルハ。ヤレ〳〵見玉フヤ、是黒雲ノ来ル事、ヤレ〳〵常ノ雲トハ候ハン。御身記州生レノ者ナレバ、祈リ申セト有リケレバ、弁慶対イテサンゾロ、居タル座敷ヲスツト立チ、舟底ニスツト入、笥ノ堅箱ノ蓋タヲ。ハ子、数珠錫杖取リ出シ、舟ノ舳艫キニツヽ立上リ、大音声ニテ祈リ

○拍子言立テ

東方ニハ降三世。南方軍荼利。西方大威徳。北方金剛。中央ニハ大日大悲。伊勢神明天照太神。熊野之三社権現。羽黒山山獄々八天狗。海之上ニハ船玉龍人。只今マ納受タレ玉イ。イカニヤ。申サン我君様。今夜ノ。乱風。八嶌ノ浦ニ而数ク人亡ロボシ、平家ノ亡霊ニ而候。コウ申ス弁慶ハコレニ叶ハン者有ラバ、此太刀チ長刀タニ切拂イ可レ申ニ而候

○番所

ヤア祈ル利生難レ有サヨ。船ハ難無ク後ウ白浪ニ寄伏タリ

○曽我　幕出

曽我ノ反橋打渡リ、冨士裾野ニ出ニケリ

○中言立テ

曽我之十郎。五郎。兄弟二人之者成シガ、其レ成リ平ラニ有シ時、武士中下リツヽ、時ナラン雪ヲバ、カノ斑ラト詠メ宛、夏野之鹿ニカラメントテ。冨士野々。スソニ出テアリ。聞ケバ鎌倉人々ハ、近国連中之者迄モ、雲霞ノ如クニタナビケバ、浮嶌カ原ニ。キサギ迄ナビケ。洩レタル方ハ無シ。ナヒケ洩タル。方ハ有ラバトテ、コヨミト高野之元トスレイヨモ不スレ知レ時、父ヲバイトコニ打タレシ思イノ色ロニ、着シユクニ流ルヽ想、泪タ泪タノ露トモ聞イテ有ル。沈火ヲ受ケテ、甲斐無キ身ヲ持チテ十ヤ。二十ヤ余リシヤ、親ノ本望トゲントテ、野ニ伏シ山ニ伏シ、隠レツヽ、敵キノ通イ見ル時ハ、敵ハ大ウ勢イナリ。古ル郷ノ曽我ニ皈リ、敵キナグサミ大ウカラ壱切リ

。早ヤ七日ノ牧狩リニモ成リヌレバ、男鹿カ二ツ、女鹿カ壱ツ、三頭ヲ連レテ打来リ、見テノサンゲノ其中カニ、大柏シバンカヒノ被垂レニ脇フサガリノヌカバキニ、烏黒ナル駒ニ打乗ツタル両武者

○拍子

尋子テ聞ケバ、見レバ敵キノ祐恒也〳〵、見ルヨリ以来タ嬉シキ心ロニソゾロギダテ、シツチニ鐙ミヲモミ合セ、弓持上ケテ弦カントスレバ、中恩ノ極メカナ、伏シ木ニ駒ヲ走セカケテ、屏風皈イシニハツト戻シ、駒打チ引揚ケ乗ラントスレバ、敵キハ馬武者、物間ヒ遥カニ見エタリケリ

○切

ヲフ。ケ程。スクナギ親ノ中恩ン問ヨリモ、我ラ兄弟貳人シテ、指違カイントハ申セトモ、其時キ武將ノ秀忠一首ノ歌ニモ連字アリ。亦タ附ク色ロ附ク紅葉チ葉ヲ見テ、其ノ日ノ明ケノ暮レヲ待チテ問イ返ヒス、一首ノ歌ニモ連字アリ

○拍子

其ノ日モ夜半ニ成リヌレバ、持ツタル明松打チ振リ〳〵祐恒ガ屋形ニ忍ヒタリ。ヤア頓テ敵ハ打タリシタ、頓テ御所ニト皈リ来ル

○山神舞

○潮扱ミ

塩地ハ鳴海潟、女ハ成ルメガタ、門トハ松風指シ来ル。潮ヲ扱ミ揚テ見レバ、月コソ桶ニアリ。女浪男浪ヲ分ケ除ケテ、指シ来ル潮ヲ扱ミ揚ゲテ見レバ、月コソ桶ニ有リ。ヤア夜ル之車ニ乗セテ後ト引ク波ミ、ユラレナガラ、亦タ来ル浪ニウセニケリ

○三人立チ

○女舞　幕出

親之為メ祈ル早蕨ヒ、去年ノ古ル雪キ群ラ消テ、霞ミ掛リテ春々ト、急キ行程ニ頼ミモシヤ〳〵　二返

○中言立

我モ貳人ノ親ヲ持チ、年闌チ齢イカタムケバ○岸ノ額ヒノ根ナシ草、軽キ大身ノイタワリ頭巾○限リト成ラセ玉フニ依リテ、四方山ニ分ケ行ケバ、蕨ヒ折ニ来タリ、今ハ是マテ来リタリ。恐ロシヤ、四方ノ山路ヲ見ワタセバ、去年ノ古ル雪ムラ消イ残リテ、未ダ見ヌ思イノ氷リノ内ノ釣ギ蕨ビ、一ト筋折モ親ノ為メ、二タ筋折ルモ親ノ為、子ノ為ト思イバ苦シク更ニ無シ。子ハ亦タ親ニ孝行有リ、子ニ亦タ親ハ孝ハ無シ、偏ヒニ此川ヲ蓬莱山ニマシ出テ、船ハ有レトモ舟頭ナシ、舟頭有レトモカイゾ無シ。何トテ此ノ川ヲ漕ル、瀬ハ無シ。岸打浪ハヨリテハ戻レドモ、何ニト我等レハ戻ラザルラント、身ヲ静メ我カ古ル里トヲ、ホノボノト見渡セバ、霞ミ掛リテ春々ルト、ヤアラ、ナツカシヤニハントヤ、実ニナツカシヤ思案トヤ

○祖父翁

今朝之嵐ハ白氷ハゲシク候ニ依テ、舟場ノ舳ニ立チ寄リテ、向ウ歌タナントヽ詠メハヤト存候

向イノ汀ニ立タセ玉フハ祖父翁殿ニテマシマスカ。此ノ小川ヲ舟子壱ト竿、指シタヒ玉ワレヤ

○祖父翁言葉

祖父翁モ年若キ時キハ、三艘ノ花ノ筏タヲ積ミ下シ、今ハ歳シ闌チ齢ヒ。カタムケバ、手膝ヒヂモカイノウ候。余ノ若キ方御頼ミ候ヒ

○女言バ

余ノ若キ方トテ可レ頼方モサラニ無シ。祖父翁殿ハ、此ノ小川ヲ舟壱ト竿指シタヒ玉ワル程ナラバ、祖父殿之上ニ召タル麻ノ衣モ濯イテ申ベクニテ候

其女諶力ヤ

舟ノ越ルノ嬉レシサニ。祖父翁殿ノ仰セニ随ヒ申ベクニ而候

○祖父翁言バ

左右レハ左様。マシマサバ。向イノ汀ハニ、スンズスンスト御乗リ候。祖父翁ハ舟ヲ越ス成ラバ、年立チ舟ニ、年立チ舟子ニ、向イ之汀ハニ附キニケリ。舟ヲハ越附マイラセ候ニ依而、舟ノ内チニスンズスンズト御乗リソロ。ウツツニ余レシ老ノ身ハ、末ノ頼ミモハカナサヨ

ハシニ。アマレシ。クシヨニ。チカヅク。祖父翁ハ舟ヲ越スナラハ、年立チ舟子、年立チ舟ニナビク嵐ニ誘ハレテ、四海ノ浪ハヨリケモノ。年立チ舟ニ、歳立チ舟ハ、向イノ汀ハニ附ケニケリ

舟ハ難ン無ク越附ケソウロフニ依而、見苦敷トモ祖父翁カ家タニ、スンス〳〵ト御寄リ候イ

祖父翁殿ニ申度キ事ハ御座候

左右ハ何事ト

今日三日ノ日間マヲタヒ玉ハレヤ

○祖父翁

ヲヽ人ヲ待チルハ、一時二時三年四タン万事送リ越スヨリモ、未タ久シイ物ニ候。依テ今日三日ノ日間。イヤイヤ叶フマチク候

親ノ願イヲ寝ツル女ニテ候。今日一チ日ノ日間ヲ、タビ玉イヤ

実ニモ案スレバ面白ヤ。夫レ天笠ノ大天狗モ歩行ミトナス。マツタ小天狗モ、今日一日之日間ニハ、何ンノウロンアラ嬉シヤナ、身ヲ持チ兼テ、雨ニ濡レ、日ノ中里ニ帰リケリ

ズンダイサンダイズテ五郎ダマタウシコノ屍モヤツハケナイタイヤゾクソウゾクヤ（この後に記される漢詩は省略した）

○切合　幕出

衆生ハ他人ニ附ク、嵐シ小嵐シ浪之音、天狗ニナヲシテ夥タヾシ

○中言立テ

皈命高林坊　禅海坊ハ内ニマシマスカ。左様成ル

□礼ツンケン坊

□無太郎坊　人ハマシマセス何ニト

□礼智羅坊

南無大乱坊　通ヅ玉モウ声ヲバ聞キ知リヌカ

皈命修徳坊

南無金毘羅坊　シヤ申サン。先ツ天狗之御供

ニハ誰々ヤ。白海ノ三勘坊、筑紫ニテハ愚前坊○伊豆ナノ三郎、藤井太郎ハ父ノ為トテアダコヤニ、衆生ハ他人ニ附ク、嵐シ凩シ浪ノ音、天狗ニナヲシテ夥タヽシ

○木曽　幕出

木曽義仲之御供ニ、漸々急キ行程ニ北国ハ他人ニ附ニケリ

○中言立テ

木曽殿ヤ木曽殿ヤ、信濃ヲ立セ玉ヒシ御時ハ、拾万余騎ニテマシマスガ、今出ツ川ヲ通ラセ玉ヒシ御時ニ、四十七騎ヲ打亡ボサレ、今ハ早ヤ掛ルヽ便リモ無リケリ。サツテ御身ハ何国ノ孫、木曽ノ御内ニテ、木曽ノ孫ニテ在マスカ。今マハ何ヲカ包ムベシ、今ハ何ヲカ隠ス可シ。御身ノ内ニテ、今井ノ四郎兼平カ○葵イ○巴イ○山吹トテ、其兄第三人有リ。葵イト言イシ兄第ハ、暮カラ北国ハ多人ニテ討死ニ合イ、今ハ早ヤ巴イ斗リ御供也。余リニ余リ心ロハ、サメザメトセス程ニ、法華経提婆品、兄第ノ葵イ弔ラバヤト○一者不得作梵天、二者帝釈、三者魔王、四者転輪聖王、五者仏心、福徳雲霞入道ト唱ヒツヽ

○今田八郎　幕出

漸々急行程ニ、北国ハ他ニ附ニケリ

○言立テ

巴イト云イシ女ナリ。七十五人力ナリ

葵イト言イシ女ナリ。八十五人ノ力アリ

今田八郎ヲツトリ巻キ死ニ、ヒミツニ成レトモ戦ヒケリ

○鐘巻　幕出

漸々急キ四方ナラノ葉ニ、南都ノ京ニ附キニケリ

○中言立テ

斯ウ前ニ罷リ立ツタル女ヲバ、何カナル女ト思召ス。我レコソヤ、雨ヤ日ヤ長者ノ壹人リ姫ミテ候。歳ハ当年二十三、凡ソ名所旧跡、堂塔上方ノ巡リハ一見仕ツテ候得共、未タ音ニ聞ク奈良ノ御寺ニ漸々急ク女ニテ候。奈良ノ御寺ト申スルハ、貴キ御山ノ事ナレバ、山ニ七ツ不思儀アリ。七ツニ七ツノ不思儀ニ取リテハ、木ハ雄木立テトモ、女木立タズ。鳥ハ男ン鳥通エトモ、メン鳥リ通ウト言フ例メシナシ。鹿ハ麌参レ共、麌参ラス。エンノ行戒行遊共、ウヒ越立ツルト云ウ例メシナシ。鐘ノ音信レ聞フルト云フ事モナシ。雨降ツテ軒端ノ露ノ落ル音トツルト云フ事モナシ。マツタ庭ニ艸草生ヒズ。是テ七ツニ七ツノ不思儀ニテ候。我等女人ノ身トシテ、トウドウ御皈リ候。男ハ百日ノ行ニテ参ル共、受玉ワリ。我等女人身トシテ、千日万日ノ行ニ何ンノウロンカス。先キ世ニ何ニハ女ニ生ヲ成ス。夫レハ勉モ言ヒ角モ言ヒ、参リテ鐘ヲバ納サントス

○諸行無常　○是生滅法

○諸滅々己　○寂滅為楽

○沙門

只今之女ヲバ何成ル女ト思召。アレ社ハ雨ヤ日ヤ長者ノ壱姫ニテ候。歳ハ当二十三。凡ソ名所旧跡同道、上方ノ巡リ一見仕ツテハ候エ共、未タ音ニ聞奈良ノ御寺ニ参ラント言イシ、御寺ニ参リ御サント言イシ鐘ヲ押シ、鐘ノ緒ニ撞込メラレシ。忽チ鬼神ト成ツテ候。是ヲ祈リ出シタル者有ルナラバ、金銀米銭宝物ニ於テ、相イノゾミノ侭、取シヨトノ高札ヲ此町ニ建テマシヨ

○別当　幕出

熊野参詣之御役僧、泊リハ何国ノ羽黒山

○別当　言葉

天気能ケレバ、道橋海道モ好シ候ロ。急キマシヨ、急クニ程ナク名誉希代ノ高札押テ有ル。書タル事無ケレバ、読ンタルタメシナシ。読ンタル事無レバ、書タルタメシナシ。先ツヲツ執リ指上ケ、拝見申サバヤト存候。誠トヤラ、雨ヤ日ヤ長者ノ壱人リ姫ニテ候。歳ハ当廿三。凡ソ名所旧跡、堂方々ノ巡リ一見仕リテハ候エ共、未タ音ニ聞ク奈良ノ御寺ニ参リ納サント言ヒシ鐘ヲ納メシ、鐘ノ緒ニ突キ込ラレ、忽チ鬼神ニ成テ候。是ヲ祈リ出タシタル者ノ有ルナラバ、金銀米銭宝ラ物ニ於テ、相イ望ミ侭ニ取ラシヨトノ高札ニテ候。我等ト申ハ坂ノ上田村院、扨テ汝チカ事ニテ候カ。全ツタ大峯三十三度、葛城三十三度、合シテ六十六度ノ掛ケ出テノ僧ニテ候。全ツタ法力キニトレバ、大川ヲ逆ニ流シ、枯レ木ニ花ヲ咲セ、石ニ貌ヲツケ、山中ニ舟ヲ浮セ、日中ヲ闇ミトシ、闇ミヲ日中ト行ノウ程ノ御如ニテ候。是ヲ祈リ出テ、上中人之人々ニ御目ニカケバヤ抔ト存候

見我身者○発菩提心○聞我名者

断惑修善○聴我説者○得大智恵

知我心者○即身成仏

不動経偈也

○機織リ　幕出

若狭成ル池ノ汀ハノ八重桜、風ニテ散ルハ恨ラミ無シ。已レト散ルハウラミ有リ

○中言立テ

イヨ奈落ク、ナラクハ底ニ沈ムトモ、御法リノ舟ニ浮ハザルラン。来ル春ヤ東ノ空ノ果テマテモ、思イ旅出シ旅衣モ、浦山掛テ春ルタルト、詠メノ空ニ曇リ無ク、日モ重ナリテ行程ニ若州ニ早ヤ附ニケリ〳〵　二返

ヤアラ是モ早ヤ早ヤヨ急キ行程トニ、若州ガ浦山王ガ池ニ差タトモ存候。嘘ハ何ニシ世ノ此ノ池ニ立セ玉モウヤナ。日本ニハ名社旧跡トテ、皆ナ巡リ巡リテハ候エ共、未タ音ニ聞ク若狭ガ浦山王カ池ニ、一ツ見セン程モ只タ一景詠メハヤト存シ候。立チアスライテ候。其レハ○サンニテ○マシマサバ、我等モ柴ノ庵リニ、一夜泊リ玉エヤ。此池ノ謂ハレ、事懇ンコロニ語リ可レ申ニテ候。夫レ生キ年生ル物ヤ

○上ケル

何ツレカ陰陽離レザルラン。此里ニ夫婦ノ者有リシ故イニ○依而比翼連理ノ語ラヒ深キ夜中ニコメシ玉椿。替ラヌ色ノタノシミ只仮初メノ始メノ秋ノ契リシテ、織リハテバヤト思ヒシ、機絣ヌモ、ズンダ〳〵ト切リムズテ、此池ノゾミシヤ。スメサンメテ、スサマジヤ、身ノ毛モヨダツ目モ苦ルシ。未ニ浮身ハ投シモ、夢ノ如クニ逢イニケリ。マボロシノ様ニ失セニケリ

○沙門

東西々々、ヘ只今ノ女ヲバ、何成女ト思召。アレハ是日本一番ノハタ織リ女郎ニテ候。天気能キ時ハ、日ニ貳百反ンノ蜀江ノ錦ヲ織ラセ玉モウ。天気凶シキ時キハ、日ニ百反ノ金襴ヲ織セ玉ウ。織リ立〳〵殿子ノ御介抱ナサレテ候。殿子ハ京ニ登リ、三年カ間タ在京ヲナサル其内ニ、金テ登セル時モ有、両足テ登セル時モ有リ。織リ立織立テ、殿子之御介抱ナサレテ候。全ツタ并ニ心ロ小身之長者一人リヲワセシニ、雨ノ降ルニモ降ラヌニモ、風之起ルニモ起ヌ夜モ、九拾九夜トヤ申セトモ、ナイシ百夜程モ通ワレテ候。全ツタ心御賢シキノ機織女郎ナレハ、一ト面ノ鏡ヲ、二タ面テト見ルベキヤ。男ト云ツテ、一ト張ノ弓ヲ、二タ張ト引カセル者カヤト云ケレバ、終イニ女贔屓ニテ在シマセバ、是ヲ靡カス癖アラントテ、有ル里ニ下カリ、馬鹿者ヲ頼ミ、生涯イヲ言ワシテ候。何ニト生涯ノヨウソフハ、殿子ハ京ニ登リ、三年之在京ノ其内ニ、我ヨリ身目美シキ女良ヲ持チ、女良トハ人々シ、国ニ下タルマヒトノ様子ハ承玉ハツテ候ト、丁替言ワシテ候。全ツタ彼ノ機織リ女良カ、イシツキカシツギ殿子ノ御介抱成サレテ候。我ヲモツテ人モ思ヌ山桜之花哉、咲テ後チニクヤシ、ナントヾ言フ侭ニ、織ル機絣モ何ニ入ラン、側ナル金太刀○ヲツトツテ○サンハラリント○カリ切ツテ、若州サカ浦山王カ池ニ急カレテ候。若狭カ池ト申スルハ、十四ツ斗リノ、心モコン高シキ小若葉一人候。エシガヤレ、止マレヤ御止マレヤ、留メ申シテハ候得共、国ニテサイ主ルジ探提、止メ

テ留マラヌ機織女良ガ主シ、バツタル小若ツハ壱人候得シ迚、留タテ止マル者ノカヤ、シヤレ。ヤレ。ハナセヤ。此ノ池ニ引コマレンナト有ル程ニ、ヤラウツカナ、其ノ侭ウツ。ハナシ申シ候。飛去ツテ放子、去ツテ壱ト本ト芒キノ其本トニ子リ寄ツテ、壱匁ノ空海ヲ遊ハサル。何ニト空海ノヨフソフハ、此ノ池ニ死ル命ハヲシクハアラ子ドモ、京ノ殿子ハ恨メシヤ。ソコナル石ニハ額ヒヲ当テマチキ。上ニハ波ヲ立マジキ、地ニ身ヲバガツハリト沈ツメタリ

相七日ヶ内ニ、殿子ハ下タリ、我カ妻ヤドラ、我妻ヤ、堪体ナサレテ、我カ妻ハ有里之馬鹿者ニ性替ヲ言レ、丁替ヨフソフニ、若州カ浦山王カ池ニ、身ヲバ投ケラレタト聞テ有ル。ヤラ無慚ヤト言侭ニ、守リ太刀ヲスルトヌキ、タブサヲ切、夫ヨリ西ノ方京ニ登リ、黒谷法印上人ノ御弟子トナリ、山門法師ト現レテ、高キ所ニ堂ヲ建テ、低キ所ロニ塔ヲクミ、沼ノアタリニ御寺ヲ建テ、大川ニハ舟子浮ヒ、小ウ川ニハ橋ヲ掛、昼ルハ壱部ノ経ヲ読ミ、夜ルハ夜ルトテ、六万遍ノ念仏ヲ唱ヒ、念仏宝珠ノ功書キヲ以テ、機織り女郎ノ在所、懺悔ノ姿タニ現レ可クニテ候。上中人之人々ハ御静マレヤ、シズマレヤ。能ク々御聴聞ナサレテ候エ

黒サンメデスサマシヤ、身ノ毛モヨダツ目モクヽル。末ノ浮身ハ投シ身ノ、夢ノ如ニ合イニケリ。マボロシノ様ニ失セニケリ。難レ有ヤナ〳〵頼母シヤ〳〵、ヤア御法リノ声ガ松風ノ音トカ、川ノ鳴ル機織リノ池カ、紅ナイノクレンノ氷ノ内ヨ、在所懺悔ノ姿タニ現ハレタリ

○織掛ノ言立テ

有難ヤ有難ヤ、怖ロシノ水海ニ来ツテ、織ルハタ絢ンモ上ニ掛リシヤ

十六ノ角ヲ振リ立テ、紅ナイノ舌ヲ巻キ出シ、機織レ織レト責メラレテ、目モクルヽ、心ハ絢ン機織ヨ、アヽラアサマシヤ。機織ノ時ハ、思ヒ思ヒハ積リテ山ト成ル。氷リハ積リテ霧トナル。泪タハ積リテ淵トナル。三途川。川原錦ン機、文機、京都織ハヲル手ノ品ナ能ク、火煙トスレバアサマシヤ。立チ上ツテ逃ントスレバ、緑果ノ千草サニ引止メラレシ。己ノ苦シミ御覧ズレ。有レ難ヤ々々、恐ロシノ御弔イノ功力ニ依テ、邪道ノ苦患免カレタリ。実ニ〳〵様マ〳〵ノ理ハリヤ。末代地獄之中ニモ、斯ル苦ルシミヨモアラジ。アヽラハンミノ有様ニ、尚ヲシヲ〳〵ト、在所懺悔ノ姿タニ現ハレ、各々苦シミ御ランズレ

○信夫　幕出

忍ブ隠レノ山姿タ、信夫ノ里ニ差キニ付ケリ

○中言出テ

信夫ノ太郎景時ハ、マドロノ草ノ蔭ヨリモ、ハツシヨウニ鎧ヒスビキヲタヲスハ、信夫ノ空ヨカトキシ。明日ハ前高舘ニ籠リ、八千ノ装ウイヲ事懇ロニ語リ可申ニテ候

○拍子

信夫之太郎駈ケ来リ、其日ノ出立チ装束ニハ、肌ニトリテハ紺地錦キノ被垂レ、卯ノ花縅シノ御鎧ヒ、五牧兜トノシコロノ緒ヲシンズトメテ、重藤弓ノ真中ユイメテ、兵ト放セバ角的程ナク射取レバ、今マハ早ヤ進ミ出タル兵者、後ロノ草摺スルリト脱イテ、遥カノ浜辺ニアブ鞍メテ立ツタリケリ。今ハ早ヤ矢倉ヨリ飛下リテ、一文ノ鞘打ハズス。北カラ南ニ一ト当リ、西カラ東ニ一ト当リ、雲ニカクナハ十文字、八ツ幡刀テ切リ払イケリ

○岩戸開　幕出

東ニ松影分ケ出ル、日モ神世春ノ始メ也。朝姫ノ照リ始ル国土ニハ四方ノ神々舞遊ブ〳〵

○中言立テ　沙門

請フ前ニ罷リ立ツタル者ハ、何カ成ル者ト思召ス。我社ソハ、伊勢神明天照太神宮之御子ニ而候。伊弉諾伊弉冊ノ尊、伊弉諾ニハ日月ノ想ヲ持タセ、伊弉冊ニハ神ノ想ヲ持セ玉フ。神ノ想ヲ持ベキ者ノ無ハ迚、月日ノ想ヲ持ベキ者ノ世ノ中ニ、伊勢ノ国高天カ原龍長森ニ日月トモ引籠リ、此世ハ常夜ノ闇ト成ツテ候。其時キ七カラノフキヲ集メ、閻浮檀金ノ金子ヲ用ツテ、厚ミ四寸ニ巡リ、八尺ノ唐ノ鏡ヲ鋳立見奉レトモ共、其ノ甲斐ヒ更ニナシ。其時キ八人之花ノ八乙女、五人ノ神楽男、青銅鈴ノ諸声ニ、七日七夜ヲ打拍子、天之岩戸ヲ少シ開キ玉ヒハ、此ノ

世ヲ東シシランテ見イ玉フ。其時キ花之乙女、五人之神楽男、青銅鈴之諸声ヨリ上ケ引上ケ、七日七夜打ハヤシ。世ノ中ニ何ヤラ迚、天ノ岩ヲ少シ開キシ其ノ時キ、戸隠ノ明神、中カノ間三間推開キ、昨日迄モ今日迄モ常夜ノ闇ミト成ツテ候。今日ハ偏ノ白妙之日ト成リ、上中人之人々ハ、御ナレヤ御シズマレヤ、能キ様ニ御聞レ聴ナサレ

○鳥舞　諷祈リ

天ノ岩戸ニ神遊ブ、現ハレ玉イヤ天照太神〳〵

○桜子　幕出

春来レバ梅桜も咲乱レ、花ニ付テモ我心ロ、見ルニ附テモナツカシヤ〳〵

○中言立テ

ヲヽ斯ウ御前ニ羅立ツタル女ヲハ、如何ナル女トハ思召ス。我ハ是桜ノ宮ノ氏子也シガ、去年三月十三日、筑紫ノ国、人商人ニ我カ子壱人盗取ラレ桜川ニ戻ル。桜ノ花ヲスクヒ集メテ、我カ子ノ桜子ト見ハヤ存候。サクラ花〳〵、スクヒ集メテ揚テミタレバ、我子ノ桜子ハ未タ見エン。桜花〳〵スクヒ上ケテ、ユスリ集メテ見タレトモ、我子ハ桜子ハマダ見エン。ヤアラ情ケナヤ、悲シヤナ、情ケナヤ行コト知ラヌ春水ニ誘ウラン。桜川ヤ瀬ニ白浪ニケムレバ、霞ノ幕ノ花サクラ霞ミヲ流スシナノ浮嶌、瀬イ〳〵ノ水之花、浮身ヲ流ス川瀬カナ〳〵

○後之幕出

漸〳〵急キ行程ニ、桜宮ニ差ニケリ。ヲヽ斯ウ前ニ罷立ツタル兵ヲバ、トノ国住人如何ナル者ト思召ス。我ハ是桜ノ宮ノ氏子也シカ、去年三月十三日筑紫ノ人商ヒ、我ヲ商キナハレ、母ノ恩ヲ送レテ候。桜川ニ戻リ、母ニ対面申サバヤト存ジ候。イカニ

不思議ヤナ、若モ筑紫ノ人ヤラン。筑紫ノ人トノ玉フハ、何ニノ子細デ問玉フ。我子ナリケル桜子ヲ、彼本桜子ト御覧ツレ。サクラ子ヤ〳〵、見レバ中カ〳〵泪タナリケル桜子哉

○仰敬テ白ス奉ル。獅子舞之由来ヲ尋子、先初ニハ地神五代之末ェ御ハシ坐。伊弉諾伊弉冊尊御子ニテ天照皇大神宮此之世ヲ開セ玉フ其ノ時キ、天ヤ之岩戸閉ヂ籠ラセ玉エハ常闇ミト也、其時戸隠大明神現レ玉ヒ而朧之夜ヲ明カニシ玉フ之時、御神楽ヲ申シテ八人之八乙女五人之神男笛太鼓鳴シ、御湯奉ル捧ケ事未イ万歳之祭式ト成リ、今ノ世迄モ獅子舞ト申ス者是レ也。舞之数拾二番、崩シテ四拾八番也。拍子ハ本開ィ五拍子也。依而獅子舞之根元ト申者是也ト爾云フ

（この後に記される易占の解説は省略した）

乍恐奉申上獅子舞乃事

抑獅子舞といつハ、天神七代地神五代の後に始里、社人衆神うた乃宮祭り相勤申候御事ニ御座候。伊弉諾伊弉冊乃尊よ里、天照太神宮、岩戸に引籠らせ玉ふと、此世常夜乃闇とならせたまへ、其時八人乃花の八乙女、五人乃神楽男、テイトウサツサ〳〵鈴之声諸共に、岩戸の前にて打はやさせ給ひハ、天照太神宮国土に面白事有やらんとて、妻戸少シ明させ玉ふ。其時、戸隠大明神、天乃妻戸三間取りて推開き、日月共に出させ玉ひハ、国土安全、今乃世迄も治り候事、其祭相学ひ候獅子舞也

一　上ツ様方惣若様方、万座之見物、百性中の祭り事ニ茂成者也。此祭習立、相勤免申候様にと被申付候得ハ、本海坊と申者、獅子舞の心掛ケ有者故に、社人方江奉願候得者、早速御許し被下候而、偏に難有奉存候。本海坊一々習ひ浮へ、百性の若者の師匠と成て、右之趣逸々教へ申候。

此獅子舞の祈里事、天下泰平、国土安穏、五穀成就、何かなる天魔厄神も相怒かれ候此御事ニ御座候

此獅子舞習ひ始メに於てハ、不精進に不被成、随分身を清め、天照太神宮、八幡大菩薩、春日大明神、此三神に祈誓を懸、相勤可申候様に本海坊申伝へ被置候事也

維時。元治元甲子星
仲秋日　写書之
㊞

（髙山　茂）

（四）伊勢居地番楽『伊勢居地獅子舞神歌』　昭和五十八年

（表紙）

昭和五十八年正月吉日
伊勢居地獅子舞神歌
伊勢居地番楽保存會

記

伊勢居地獅子舞、今ではその名を本海番楽とも伊勢居地番楽とも云ふ。本海番楽を習得したことは、荒沢部落にある石碑に記されている。荒沢番楽、本荘荒屋敷番楽、伊勢居地番楽は共に本海流番楽の直系ともされている。

部落の鎮守、延命地蔵尊も矢島の殿様より戴いたものとされており、その地蔵の森に四百年もの間、八月二十六日の六夜祭には、打てば鳴る打たねば鳴らぬやと獅子舞の拍子が鳴り渡り、夜の更けるまで舞ひ続けられてきたことは、今でも部落では欠せない楽しみの行事とされている。参加している人達のことは獅子舞連中と記されている。

舞の種別を大別すると、獅子の舞、扇の舞、刀の舞、餅搗き舞となっている。芸能にたづさわる人は男子のみにて年令には制限なく、その人の特技によって三拍子と舞子に別れている。舞の種目は現在十八種目あり、その中に物語りの舞として、わらび折りの舞があり、この舞は会話のあるのが特徴とされている。

現代文化の中に古来文化の民俗芸能を新たに認識することにより、獅子舞の真髄を会得することに志し、現行の連中を同志に募り、昭和二十四年七月、獅子舞保存会を構成創立したのである。

古来獅子舞は娯楽を勿論のこと、仏様の供養に悪魔払ひ、厄払ひ、五穀豊穣祈願、大漁祈願、神仏の供養として広く庶民に信仰されて現代に至つた芸能であることは云ふまでもない。会員一同はこの尊い芸能を、舞に神歌と生きた獅子舞を舞うことを目途とし、練習に努力を重ねたのである。

昭和四十八年六月、秋田県指定無形民俗文化財の指定を受け、是に於いて名実共に公認された。茲に呼名も伊勢居地番楽保存会と改名された。会員一同は今后の抱負に活気と明るさも見えた。

社会は文化も経済も急速に変動し、農村にも工業化が進み、会員の職業も多種多様に亘り、勤務時間も昼夜の差別さえなくなり、保存会の運営にも色々な困難の事態が起り、それを解決する名案の術も見当たらず、困り果てたのが実態であった。折しも教育社会に於いて、子供に古代芸能を普及されている事を知り、色々と会員一同で検討した結果、番楽は宥和性にして伝統性に富む郷土芸能なるが故に、学芸分野の中に教える事が、教育文化を妨げるものではない合議の一致を見た。

早速、学校教育の御意見を伺ひ、諒解は余議なくされた。夏休みの期間中に教える事を計画、先輩の熱心なる指導と父兄の厚意的なる協力により、昭和五十四年八月二十六日、初舞台の晴姿に萬員の観客から、感嘆の拍手が送られたのであります。昭和五十四年八月、伊勢居地少年番楽が誕生。少年番楽には、純真な真情が舞を神聖なるものにして真善美そのものゝ姿であり、また頼もしくも見えた。

延命地蔵尊は、古代より安産の神様としてあまりにも有名にして、御堂に献納された三十三番の観音様をはじめ、貴重なる納物はその数々百点に及び、遠く他県よりの名前も見受けられ、神霊の御利益と信仰の厚さを物語つている。部落の先祖代々子供達は地蔵堂で学びの場として、また遊びの場として成長し、その人達は鎮守を崇拝し、平和にして豊かな部落が永遠と栄えてきたのである。この地蔵堂に少年番楽が誕生されたことは意義深く目出度いとも思える。

延命地蔵尊は伊勢居地部落の象徴であり、その御堂にて四百有余年舞続いた番楽も部落の象徴でもある。獅子舞の神歌は舞の意義を解読せるものにして、観る人自から舞に愛着心を生み、喜びと楽しみの中に、和気藹藹の民情に潤を齎す事を目的とする。併せて現代文化と共に古代番楽も、保存に努力し活躍することを祈念す。

昭和五十八年正月吉日

伊勢居地番楽保存会

獅子舞神歌目次

通り節	一、二	舞順	三
神舞	四	よしなど	五～九
ばんがく	十	鳥舞	十一～十三
翁	十四～十八	ばんがくたろう	十九
三人立		小弓の舞	二十
熊谷次郎	二十一	三人餅搗き	二十二
うれしき舞	二十三～二十七	蕨折の舞	二十八～三十七
やさぎ獅子	三十八	空臼舞	三十九～四十三

村を通る時のうたい

一、打てば鳴る、打たねば鳴らぬやこのつづみに、調べの糸、心しめたり、心しめたり

二、あのやめらし、めめも形もよけれども、背中のこぶ、たまにきずあり、たまにきずあり

三、のがみ川、あなたこなたに呼ぶ声は、土砂の声、川のなるせや、川のなるせや

四、へへしまら、夜風に吹かれて寒かろう、へへの綿帽子、へへのわたぼうし

神社の庭に入ったときの歌

一、舞に来て、此処のお庭に振りこめば、黄金のつる、足にからまる、足にからまる、やあー、足にからまる、足にからまる、やあ

二、この庭や、神のならしたお庭なる、悪魔なる悪魔の払い、福はとどまる、福はとどまる

舞順

1	神舞	2	よしなど
3	ばんがく	4	鳥舞
5	翁	6	ばんがくたろう
7	三人太刀	8	小弓の舞
9	熊谷次郎	10	三人餅つき
11	ゆらしやら	12	一人餅つき
13	地神舞	14	うれしき舞
15	ばくち舞	16	蕨折舞
17	やさぎ獅子	18	空臼舞

一　神舞

一、舞に来て、此処のお庭に振りこめば、黄金の蔓、足にからまる、足にからまる、足にからまる、ヤア、やれ面白、足にからまる、足にからまる、ヤア

二、拝めや、拝めや、四方浄土を拝むれば、いかなる神、おがさなるもの、おがさなるもの、ヤア

三、扇とる、さむさのいかりを、とりたてて、歌えば開く、天の岩戸じゃ、天の岩戸じゃ、ヤア

四、毘沙門様、左脇差、やせ男、やれ恐し、かついでぬげや、ぬいでさらしよか、ぬいでさらしようか、ヤア

五、十七、八、若いたなをば誰を待つ、今のはやりの、そめあげのたな、そめあげのたな、ヤア

二　よしなど（三番叟）

前歌

あかいし田面で稲苅れば、稲も苅らねで、三番叟手招ぐ、三番叟手招ぐ

幕出る

よしなどや、よしなどや、鶴と亀とかんまくれば、才才祭こそ目出度さよ、アエサアサ

中歌

ソレ、長調と御獅子舞なれや、御祭や、祈禱舞いて候。祈禱舞いての御利生には、それ、目出度い事を申そうか、久しい事を申そうか

ソレ、目出度い事に通りましては、先に舞いたるは背も高く色も白き翁と申すもの、只今参つたるは三番叟と申して、色も黒く背も小さく候へども、先に舞ひたる大装俗には、いかでか劣らんとして候。大衣紋に木賊色の狩衣、波利塞刑部が打つたる式の面をとつて顔にひき当て、額には四海の浪を畳み置く。されば向ひ通らせ給ふ地蔵菩薩の召したる葦毛馬にはおつつかないが、このあたり跳ね歩く貂くろうなどの尾をとり、鬢髭なんどにひつつくり、きりきりきつと舞つて候。

それ、此所を百世、百代、千代、御万才、道を深沈と踏み鎮める三番叟にて候。

それ、天竺の本舘かわらに登り登りて見てやれば、一段登れば不動の浄土、二段登れば仁王の浄土、三段登れば釈伽の浄土、釈伽の上に召したる麻の衣をつくづく見てやれば、愛嬌は羊の毛にて織つたる錦のことなれば、法華経の坊主ばかり心も言葉も及ばんとして候

されば式諸人の人々の打つ鼓も打ちさし、吹く笛も吹きさし、何をか笑せ給ふやな

我もおかしさにアハヽヽとおも笑い候。いやいや之も狂言

ソレ、我等が拍子は三島で習ふたや三島拍子、下の拍子も八拍子、鹿島で習ふたや鹿島拍子、上みの拍子も八拍子、合して十六拍子、大鼓の拍子で、すととんとんと御舞候

後歌

浜の浜松、花の松、才才祭こそ目出度さよ

沖に鴎のまわるように、渚に千鳥の羽ように、ざつと舞ひて舞ひ戻し、ざつと舞ひては舞ひ戻し

三　ばんがく（番楽）

前歌

迎舞台の、四つなる隅に、御幣立てヽ、歌えや舞えや、神のさぶろうや、神のさぶろうや、やおぎに面白や、神のさぶろうや、神のさぶろうや

四　鳥舞

前歌

トリラ、トリラ、ヨホヤ、トリラ、アヨヨヨエ、アノヨ、コノヨ

中歌
日本の神々は、善光寺の如来の塔のその庭に、中にも優れし諏訪の明神は、らんかと明けて御堂たりや、高天ヶ原に神遊ぶやあらしかも後番は、舞星は明星、夜星、光星、御番にあたつて舞さぶろうや、明星、夜星、光星、御番なら取整えて、拍子をそろえ、ヤアー
後歌
さつて、ささらば、ひにさんどの、しやくじようきたらば、てんまてんじよう、かんざしたり、それをおもえば、たかまがはらに、かみあそぶ、ヤアー

古典には次の様に記されている

天女

明日は祇園の祭事、いざさらば出て丶天女舞、いざさらば出てゝ天女舞、らら、らりら、ららとりら、らんらんとりら
日本の神々は、善光寺如来堂に集りて、如来を慰むるは、山王中にも勝りし。諏訪の明神は、歳は積もりて老の波、昔雨門久しき事により、宝殿の庭に瑠璃を述べ、三更の月に曇りなく、からかみ、催馬楽うたにつれ、哈々とあげて諷ぶべし。高天ヶ原に神遊ぶ、ハテ今夜の舞殿は、どなたの御番ならば取り調べて拍子すべし。ハツテ鼓は祇園、笛は熱田の明神、さて、鉦ささらは左近拍子、さても榊は神の木なれば、この鳥とてかざしたり

右の文面は古典より寫せるもの

五　翁

前歌
此処は何処、ここはいづこの雲の下。天飛ぶ鳥は羽根を成すような、羽根を成すような、底哩々耶や、哆囉哩囉や、翁や先にと生まれつゝ、松は先に生まれつや、いざいざ出てて、年比べせんや姫子松、ヨイヨイヤナア

翁幕出る　拍子で舞う

中歌
翁や髭の長きよを、わがきみのごようの久しさよ
ソオレ、東の星を伏し拝んで見奉れば、観音の浄土や月高く見えましまあす
ソオレ、南の星を伏し拝んで見奉れば、薬師の浄土や月高く見えましまあす
ソオレ、西の星を伏し拝んで見奉れば、阿弥陀の浄土や月高く見えます
ソオレ、北の星を伏し拝んで見奉れば、釈伽の浄土や毘沙門の浄土も月高く見えます
ソレ、天竺の跡堤ケ原の池の亀は、甲に三玉の星を頂き、額には四海の波をたたんだり。空には爛花玉の幡、下には繁盛八重畳、錦の御座をしつらふて、黄金の蝶は舞遊ぶ。春に来て秋行く燕鳥、殿の玉の湯殿に巣をかけて、十二の飼児を産み育て、囀る声の目出度さよ
我も孔雀の翁殿や、ソレ、御万歳に栄えたり、神の御前に畏り

拍子に入る
翁祝の蓬莱壽郎、貴方も壽郎、此方も壽郎、壽郎、才郎、才郎、壽郎、高峰山にて代々久しき翁なり。ヨヨヨヨイサア、ヨヨヨヨイサア、ヨイサア、ヨイサア、ヨヨヨヨイ

古典には左記の様に記されている
底哩々耶、哆囉哩囉、吨囉哩阿雅唎、羅々唎、鼕々、婆囉波囉、哆囉哩囉、哆囉哩阿雅唎羅々唎、鼕々
峰の松、沢辺の鶴亀や、翁は先に生まれつや、松は先に生まれつや、いざいでて年くらべせんや姫子松、鶴の千才、亀万刧、諷うたり、花の色、春咲くそむる夏のよし、秋になる冬までも、身は衰へし、楽しむ声のめでたさよ、云々と

六　ばんがくたらう

たらう〳〵、たらう〳〵、ヤアー、ばんがくたらう、しなごきたらう、ヤアー
ヨイソラ、ソラソ、ハイソラソラソラ、シテテンシコ、シテテン、ヨイソラソラ
ソラ、ハイソラソラソラ、ソソラシテテン、ソラソラシテテン

七　三人立

きんめてばしめておがくれば、さい〳〵まつりこそ、めでたさよ。ありあさ、あらーさ、よい〳〵と、でんすくでん

八　小弓舞

エンヤラヤアノ、エンヤラヤ、
八幡様は弓が上手で、東に向つて射払へば、向ふ矢先に悪魔来らず、悪魔通はじ、
八幡様は弓が上手で、南に向つて射払へば、向ふ矢先に悪魔来らず、悪魔通はじ、
八幡様は弓が上手で、西に向つて射払へば、向ふ矢先に悪魔来らず、悪魔通はじ、
八幡様は弓が上手で、北に向つて射払へば、向ふ矢先に悪魔来らず、悪魔通はじ

九　熊谷次郎

舞歌
くまがいじろうや、なおざねや、あつもりどのと、まいてみれ、ヨヨヨヨイサア、
サア
中歌
くまがいは、くまがいは、みかたにゆみを、ひくとみる、せんやつゞいて、のをてでるやら、いたましや。あつもりを、くまがいどのの、てにかかり、あしたのつゆと、おせにけり、あしたのつゆと、おせにけり

十　三人餅つき

舞歌
一、あのやめらし、めめも、かたちもよけれども、そら、よけれども
二、山武士や、腰に下げたるほら貝の、そら、ほらの貝
三、あの家から、なじよだ大工が建てたやら、そら、建てたやら

十四　うれしき舞

ヤツトコ、トコトコ、トコトコト、乞人の使いは馳せ来たり。あまり苦沢遺瀬なく、実なし毛なし赤猿穀潰しの背負肥篦とは、儂がこと。これより新町に通つてみませう。新町に通りましては、前なる酒屋に一寸目がつきました。酒屋女将さんなる者が、ヒヨコ、ヒヨコ、ヒヨコと出てきました
猿若さん〳〵、ようこそお出で下さいました。サアサア、マアマア、上がつて休まつしやい
ハイ、ハイ、ハイ、そんなら一寸休みませう
猿若さん〳〵、澄んだる酒の方がようございますか、濁りの酒の方がようございますか
ハイ、ハイ、ハイ、この猿若のことなれば、もとより濁り酒の方がようございます。とて、一杯、二杯、三杯、八杯、ノウノウ、九杯も呑んだら悉く良い氣嫌になりました
猿若さん〳〵、この頃、良い芸を覚えたと言ふ事で御座います。サアサア、舞つて見せらつしやい
ハイ、ハイ、ハイ、その芸と申しましても、表八番、裏八番、合せて十六番のその中で、うれしき舞が良かろうか、ずるつとさす方が良かろうか。うれしき舞の方が良かろうとて

舞に入る

今度は魚屋に通つて見ませう。魚屋にある魚は、大鯛、小鯛、クルクルクルツト捲鯛のその脇の、ピヨンと跳ねたるその側のその脇に、大きな口を開いて、フクラア、フクラア、として居りました。これは何と言う魚で御座いますか

これはアンコオと云ふ魚で御座います
ハハア、俺や隣りのメロハチアバ、七月子を孕んで仰むけ寝そべて、フクラア、フクラアとしていました。ようまあ、この魚に似て御座います

舞に入る

今度はうれしき事に通つて見せませう。うれしき事に通りましては、大判小判をすつてらてんと据え置きまして、儂の女房になる者は、横座にちやんと据え置きまして、私のような者は、一向下座に伏下つて、ガザの木シンバなど、ポッチ、ヤッチと折ながら、平目にかけてジロジロジロと見た。心持何より以つてうれしいな

舞に入る

今度は目出度い事に通つて見ませう。目出度い事に通りましては、あれ欲し、これ欲し、下から持ち上げて上から押せば、毛無し赤猿、ヒヨロ、ヒヨロ、ヒヨロと出て来ました。アワワにベロベロ膝などにでんじやあげ、後こんどさ、ふ背負つて、ねんねろ、ねんねろ、ねんねろや。千秋、万秋、他にはやらずと、ここのお庭にすつてらてんと納めた

うれしき舞は、自分で台詞を唱えながら舞ふのが特徴とされている。台詞の原稿は佐々木敏郎氏が書いたものにして、今まで書いたものはなかった

十六　蕨折り

萌え処漕げや、裸足で行く女娘、袖かけなるも、なにがなるもの、浮世過ぎ、幾る輪の如く。幕出はれ、幕出はれ、面白よ、ほや、面白や

女藹（あねこ）幕出る

我も二人の親をもち、年より弱く年経ち齢傾けば、岸のひたへの根なし草。軽き御身のいた己りづきも、限りとならせ給ふには、四方の山々分けいりて、蕨折りにと来たりしや、今はこれまで来たりしや

恐ろしや、四方の山路にお出見れば、去年に降りし初雪も、雪消え残りし、まだ見ゆる

般若え島めぐり、島巡り、面白よほや、面白や
般若え月がさす、月がさす、面白よほや、面白や
般若え袪とれ、袪とれ、面白よほや、面白や
ほのぼのと、我が故郷を見渡せば、霞かゝりて遥々と、眺めの空に曇りなき、くもりなき

尉（ぢおう）幕出る

オオ、今朝の嵐、万戸風烈しく、向ふの様子を静かに眺ばやくも存じ候
向ひに立ちます女藹や、眉目美しく、天晴や。こめじり、こめわけて、魔貌の姿と伝えあり。久慈の漢王か、惣統理姫にて候か。いや、そうとは存じ候か

上藹（あねこ）

ヤーラ、筑紫の国、鄙長者の一人姫にてことなれども、親の願ひを果さんがその為、首陽山の山分けて蕨折りにと来たりしや。今朝越えしこの川、蓬莱山に水増して、船はあれども櫂棹なし、櫂棹あれども船頭なし。なにとてこの川漕がれる思案なし
向ひに立たせ給ふは、尉殿にましますか。尉殿にますまさば、一棹さし越したび給わらんかや、尉殿

尉（じおう）

尉も若き時は、さんずんの花の筏も積み下し、朝から晩まで船にて過ぎたる尉の事なれども、今ははや、肩、腰、肘肩、両手それならず、他所の若き方、御頼み候へ

上藹（あねこ）

若きとて頼む方は更になし。向ひに立ちます尉殿や、この川、一船さし越したび給わらんならば、恥しながら尉殿の上に召したる、麻の衣を濯いで申し上げたく、願ひ上げ申そうや

尉（じおう）

それならば、万障繰合せの上、三日三夜の妻とも定め申そうや

上﨟（あねこ）
一時越ゆる嬉しさに、尉殿の仰せに随い、三日三夜の妻とも定め申そうや
幕の内　船さし歌
尉は竿さす、さし竿乱れ竿、船は行くやら、心静めて御乗りやあれ
尉（じおう）
おー、船おば難なくさし着け候。船の内へしんず静とお入り候へ
幕の内　船さし歌
七十に余りし、八十に手をかけ、乱れ竿。船はゆくやら、心静めて御乗りやあれ
尉（じおう）
難なく船をさし着け候。これから尉の屋形にしづしづと御入り候へ
上﨟（あねこ）
尉殿に申し度き事御座候
尉（じおう）
それそお何事や
上﨟（あねこ）
親の願ひを果さんがその為、三日三夜のいとまをたび給わらんかや、尉殿や
尉（じおう）
尉も今は年経つて、花人待つと云う嬉しさは、一日は千日に向ひあり、千日は万日に向ひあり。それなら日を追つて数え知らせ申そうや。一日二日三日、やあ〳〵そう〳〵相成り申さん
上﨟（あねこ）
三日ならざら、一日一夜のいとまをたび給わらんかや、尉殿や
尉（じおう）
親の願ひを果さんと云ふの有難さに、一日一夜のお暇をとらせろう程に、我はこの小川の端にお待申するに、そう〳〵御帰り候
幕の内
嬉しやな、嬉しやな、親の願果す嬉しさに、鄙の里に立帰る

十七　やさぎ獅子

一、獅子の仔は、生まれて落ちると頭振り々、頭振り々、ヤーヨイヨイヨイ〳〵〳〵
二、天晴拍子、拍子を揃え歌のかけ初め々々々々、ヤーヨイヨイヨイ〳〵〳〵
三、沖のかもめは、ふわりしやなり、波をまくらに〳〵　ヤーヨイヨイ〳〵〳〵

十八　空臼舞

前歌
伊勢はなあ、津でもつ、津は伊勢でもつ、アヨイヨイ、尾張名古屋は、やんさ、城でもつ、セツチヤヤトコ、セイエヤナ、ホラ、アレモランラン、コレワノセ、ササ、ナンデモセ
一、イヤサカサッサ
二、トホロホロ
三、デテンコ
四、はと
鳩は何処さ行く、鳩と鶏と遊びに出たば、鳩は豆喰ふし、鶏米喰ふ、イヤサカサッサ
其処にちよっこらやと銭が百落ちた、鳩が拾つたとて、あつちの方に引張るやら、鶏拾つたとて、こつちの方に引張るやら。其処にもつそらやと、蟻こどんが出たば、ア、イヤサカサッサ
我だ何をする喧嘩をするな、喧嘩するなら、儂が分けつける。鳩は八文、鶏二文、あとのさえ、あとのありきり、蟻こどんの儲だえ
五、おけさ

おけさ、おけさなにをする行燈の陰で、オヤオヤ、可愛い、可愛い、あんさまの帯くける、オヤオヤ

六、臼引き

一、臼引き頼んだば、婆どご頼んだ、婆も若い時、なんぼよかつたえ、アー
ゴンゴト、ゴンゴト

二、臼の轆轤さ、小豆餅上げて、廻す度に一齧り、アーゴンゴト、ゴンゴト
みつさいな

アー、みつさいな、みつさいな、とりさしまいとは、みつさいな、とりさしまいとは、はやしたり

おくのやまの、やまの、やまの、ひの木のえだに、とりこ一ぱとまた、あのとりにくいな、あのとりにくいな、ひだりのはねか、みぎりのはねか、はねことつてくうように、はねことつてくうように、うらのもちおば、もとにこきあげ、うらのもちおば、うらにこきさげ、かさひさよかろ、かさひさよかろだいぢ、だいぢ、だいぢよ、わけるばだいぢよく、せんしゆう、ばんしゆう、よそえはやらぢと、ここのおにわに、すてらてんとおさめた

伊勢居地番楽獅子舞構成人員名簿

神歌唄手	須藤恒男	熊谷次郎	金子　潔
	斎藤国男	三人餅つき	池田稼志男
	大場照雄		齋藤金夫
	大場　聡	蕨折り	齋藤晴利
笛	菊地一郎		金子鉄也
	金子　暁		大場　聡
大鼓	市橋治三		奥山進一郎
鉦	伊東鋼太郎	よらしやら	渡辺　幸
	奥山進一郎	やさぎ獅子	佐々木祐介
神舞	佐々木祐介		奥山進一郎
よしなど	伊東鋼太郎	空臼舞	齋藤晴利
ばんがく	金子　潔		池田稼志男
鳥舞	齋藤晴利		齋藤金夫
	池田稼志男		金子　暁
翁	菊池一郎	地神舞	金子　充
ばんがくたろう	齋藤義一	ばんがく	齋藤和寛

伊勢居地少年番楽獅子舞人名簿

鳥舞	渡部道雄	三人餅搗き	荘司巨樹
	齋藤　勉		齋藤和洋
三人立	鈴木　直		鈴木　直
	荘司巨樹		鈴木　孝
	齋藤和洋		
空臼舞	池田和志		
	齋藤　司		
	大場久志		
	兼松裕貴		

結語

本海獅子舞、それは能または歌舞伎に見ることの出来ない、庶民的な農村娯楽芸能としては優れている事を認識し、こゝに昔の神歌を元に掘い筆を執り書綴りました。

資料構成にあたり会員各位の協力、厚く感謝申し上げる次第で御座います。

筆者　菊地一郎

（裏表紙　奥山進一郎）

（髙山　茂）

（五）釜ヶ台番楽『釜ヶ台の獅子舞』　昭和四十三年

（表紙）

郷土芸能

釜ヶ台の獅子舞

釜ヶ台獅子舞保存会

＝はじめに＝

釜ヶ台獅子舞は今から数百年前より伝統としてつたわってきた郷土芸能で、その期限、由来はつまびらかではありませんが、先祖代々、毎年釜ヶ台の年中行事として三回、神社に神を尊敬する神楽として奉納してきた伝統的な芸能であります。

戦前はきわめてさかんにおこなわれましたが、終戦後（昭和二十年以後）、世の様の移り変わるに従い、人々の心にも大きな変化をもたらし神仏を尊敬する気持がうすれ、神社、仏閣も荒廃するにまかせ、神と共に生きてきた伝統ある郷土芸能獅子舞も衰退の一途をたどるようになりました。このまま放置しておけば、この伝統ある芸能も数年後には消滅してしまうことを憂慮し、郷土を愛しこの芸能の再興をはかろうとする有志の方々と相計り、「獅子舞」をいついつまでも昔日の姿に保持しようと決意した次第であります。

これが保存のため「獅子舞保存会」を結成すべく、昭和四十一年九月趣※意書を配布したところ、部落ぐるみの御賛同を得て保存会が結成されました。

今後は、スライド撮影・録音吹き込み、文書保存等の方法も考えてゆきたいと思っております。更に演技者の養成にも力を尽してゆきたいと考えております。

昭和四十三年五月

釜ヶ台獅子舞保存会長　笹木直治

（※　趣意書を記録としてとどめるため列記します。）

獅子舞保存会結成趣意書

戦後二十年を顧みて伝統あるわが郷土芸術「獅子舞」の現状を見る時、年月を経るごとに衰えの一歩をたどりつつあることは、誰でも認めることだろうと思います。

今さら申し上げるまでもなく、この郷土芸能「獅子舞」は次のような点を考えて引き継がれて来ました。

一、神を崇拝するとこその神楽である。

二、郷土が引き継いだ伝統ある芸能である。

しかしながら終戦後、わが国は混迷の中に全く人心は落ち着きを失ない、古来よりの神仏崇拝の念はすっかりうすれ　この獅子舞ですら見すてられがちになってきているのであります。敬神・崇祖があるところに国の栄え、郷土の繁栄があるともいわれる時に、この釜ヶ台の歴史と歩んで来た獅子舞が、仮に消滅することは非常に残念なことであります。神と強い結びつきのある獅子舞が消滅することは敬神につながる唯一の姿がきえることにもなるのです。ここに郷土を愛し、その繁栄を願う有志に訴え、この郷土芸能「獅子舞」を永遠に保存することを念願して趣意とするものであります。

昭和四十一年九月五日

釜ヶ台獅子舞保存会結成発起人　笹木直治

各位殿

釜ヶ台の神社について

神社境内には杉の木が植えられてあり、それも大木であったそうである。薬師様と御獅子様の間にマッカ杉の大木が残っていて、その木に実った実を採り、それを播種して苗木を育て植林したのであると、茂右エ門（何代目にあたるか不明）のお婆さん（八十三才）が言っている。（現在そのヤサ児に当る阿部知勝氏（明43・4・5生）がより詳細を伝聞している。）その植林した杉の木は大木となって風倒木が多く、神社にも被害が大きく受けるようになり、いわゆる危険木となったため、秋田神社庁に願い出て　許可を得て　売買したのであるが　樹令は四〇〇年と推定された。これは昭和三十五年十二月のことである。

―◇―

この薬師様は焼けて、その後江戸時代の宝暦九年に再建したが、それが現在の神社である。当時屋根は「カヤ」ぶきであったが、その後　瓦に改造した。（年代は不明）

お獅子様も焼けて新しく建てたが、その建物も古くなり、昭和二年に改築したのが現在の瓦ぶきの建物である。

獅子舞について

お獅子様の御神体は鳥海山より、シャレコウベに変化して流れ下って釜ヶ台に着いたとの言い伝えがある。その場所は非常によい森であるというので、辿りついたのが今の神社境内であったという。この地に住もうと思ったが、薬師如来の安住の地であり、両者話し合いの上、結局お獅子様は薬師様から借地することにして住むことになったという。

〔お祭り〕＝旧四月八日は薬師様の祭りの日である。またお獅子様の祭りは二十五日である。

〔神の信仰について〕＝お獅子様のごりやくはあらたな神で、願いごとの叶わないことがないというぐらいで、人間社会に必要なことは何でも叶えられたということである。例をあげると、「病気」・「悪魔退散」・「商売繁昌」・「五穀豊穣」等。部落全般については、「神のお告げ」をする等。参詣者が二千人を上廻った年のあるのをみてもうなずけると思う。当時は今と違って交通の便がわるく、人馬がようやく通れるような山坂道であり、四方の山々は、実に海抜五三〇Mもあり、往来に要する時間は、近いところで早朝から夜にかかり、遠いところからは、二、三日がかりであった。戦後、神仏尊敬の念が薄れ、以前の姿が一時消え去ってあったが、年月の経るに従い、参詣者も一段と多くなってきた。神の「ごりやく」は昔も今も少しも変っていない。今春の春祭でも一千人を越している状況である。

薬師祭は四月八日の鎮守のであるが実際は、お獅子様の祭りとなってにぎわっている。この日は、お獅子様の御神体が部落に下り、各家に座をする。それが終ると神社に納まるという部落を挙げての行事となる。獅子舞というのは、お獅子様の神楽であり、郷土の芸術（能）として親から子へ、子から孫へと、先祖代々綿々として続けられている。

獅子舞の師匠は言い伝えで、その名もいつ頃消えたかわからない。釜ヶ台、冬師、今の由利町屋敷の三つは同じ人であったという。拍子は冬師、屋敷が三拍子、釜ヶ台は五拍子であり、釜ヶ台に教えた頃は師匠の若い時であり、冬師、屋敷に教えた頃は中年、あるいは高齢に近い頃といわれる。□□は三拍子は非常に楽であり、五拍子は念入りの拍子で難儀であるという。従って釜ヶ台に教えた頃は、早い時期（若い）であり、冬師・屋敷へ教えた頃は□□「新らしい」ということになるという。

舞順

○小路わたり
○悪魔はらい

一　神舞　　十　若子舞
二　獅子　　十一　さかさま番楽
三　拝舞　　十二　やしま

四　翁　　十三　根子切り舞
五　さんば　　十四　二人舞
六　番楽　　十五　能谷次郎
七　鳥舞　　十六　牛若弁慶
八　餅搗き　　十七　やっちゃぎ獅子
九　三人達　　十八　四人空白

＝以下うたう文句のまま記す。

小路わたり

一、薬師堂の宮に登りしその時は、先先をたてて、悪魔通わず〳〵
一、日が暮れて、茂右エ門林に近よれば、木の葉をござにしばを枕に〳〵
一、お鳥海の駒の拝殿、万草万草は、薬なるもの〳〵〳〵
一、祓川、何処か何処かと呼ぶ声は、道者の声か川のなるせか〳〵
一、針ケ岡、鶴田堤に来た時は、鶴なく声、うれしかるもの〳〵
一、日が暮れて、舟の速さの最上川、拝まず通れば白糸の滝〳〵

悪魔はらい

一、この堂々のこなん座敷にあや立て、あやではないす錦なるもの〳〵

（一）神舞

一、まえてきえて、此処の御庭を見渡せば、まなごもこいし、黄金なるもの〳〵
　黄金のつるは足にからまる〳〵
一、扇取り、寒さの枝には取り置いて、及ばぬ枝に風のさぶろか〳〵
　及ばぬ枝に風のさぶろか〳〵
一、おがめや〳〵城をとうどうに拝むれば、拝むる神はごりそうあるもの〳〵
　拝むる神はごりそうあるもの〳〵
一、びしゃもんの、左わきざしとり置いて、及ばぬ枝に風のさぶろか〳〵
　及ばぬ枝に風のさぶろか〳〵
一、天下するなや恐ろしや、及ばぬ太刀をぬいてとらそか〳〵
　及ばぬ太刀はぬいてとらそか〳〵
一、あのメラシ、赤いたんなをどれをもつ、かぶってはよいし、花ぞめのたな〳〵〳〵
　かぶってはよいし、花ぞめのタナ〳〵

（二）獅子唄

一　まえてきえて、ここの御庭を見渡せば、まなごもこいし、黄金なるもの〳〵
　黄金のつるは足にからまる〳〵
一．まよりまよりと、このまきは、たかしろの神、ごりそうあるもの〳〵
　たかしろの神は、ごりしようあるもの〳〵

（三）拝舞

一．ハイラソハラ、ソハラソハラ、ハイラソハラ、ソハラハラ、ハイラソハラ、エヤー

（四）翁（おきな）

すりりやらりどうや、らうりりりんやらりどうや
こりや天じくのおぎなぞよ、そりやえんしくのおぎなぞよ。おぎなが先に生れつつ、松ケ崎にも生れつつ、えざさらいでで、年くらべせんにや姫子松。伊勢神明大神の御姫たもう、ソギンのおもてを取り顔にあて、またかりぎんの袖をひるがえし、ひろもどし、もたるおぎなの目出度さよ、おぎなのひげの長きよ、どはがとのの御用のひさしよ

春は来て、秋ゆくつばめし、此のとどの玉のゆどうにすをかけて、十二のかりごそ、ふりそだて、さえずる声のめでたさよ。こりや天じくの松だいかわらの池の亀よ、そりやさんきょくの星を戴き、しかいには四海の波もたどたや。空にはびゃこ玉の星、錦のござもすぐるたどたや

はて、かのおぎなは東の星をぐうで見たてますれば、観音の浄土や月高く見えます。はて南の星をぐうで見たてますれば、薬師の浄土や月高く見えます。はて西の星をぐうで見たてますれば、アミダの浄土や月高く見えます。はて北の星をぐうで見たてますれば、釈迦、仏の浄土や月高く見えます

（五）さんば

上しまんどうの鶴と亀が舞い遊び、さいごの祭ごさ目出度さよ。おさえご〳〵、づとう参てもうそうや。づっとう参てもそうには、よいよい事を申そうや。よいよい事のついでには、されば先に参たるおぎなり。只今参たるさんばさるごうにて候。されば先に参たるおぎなと申するは、背い大きく色白く百万ざいへいたるは、おぎなにて候

やあら只今参たるさんばさるごうと申するは、せいちっちゃく色黒く、百万ざいへいたるは、さんばさるごうにて候。されば先に参たるおぎなと申するは、大門がさしのきて、とくさいりょうのかりゆきに、あいきょうは、せきの目もおっとり顔にあて、百大百用強よう五万ざえ、此の処をすいとりと踏みしずめるが為のおぎなにて候。

やあら只今参たるさんばさるごうと申するは、先に参たるおぎながそうぞくにおとるまずようとて、大門がさしのきて、とくさいりようのかりゆぎに、あいきょうは目におったる、せきの目もおっとり顔にあて、百大百用強よう五万才、此の処をすいとりと踏みしずめるか為のさんばさるごうにて候

やあら、あれば天竺のほったり川の川上に、一段登って見てやれば、不動の浄土を拝みたもう。二段登って見てやれば、仁王の浄土を拝み給う。三段登って見てやれば、釈迦の浄土を拝み給う。釈迦の上にもめしたる御衣をつくづく見てやれば、あえぎょうは羊の毛で織ったる御衣の事なれば、あっぱれや心もわれらが言葉も及ばんばかりの御衣なり。向え通らせ人々は、天衣をひっきり、びんげしなどしてしっそくす。せきそい人の人々は、五郎法師の如く東西やしっすりとよえ流れて申そうや。何を笑わせたもう。どうどうと笑わせたもう。我等もおかしいそのまま、あはははと笑わせたもう

やあら久しい事を申そうよ。久しき事のちいぜには、ばんじゃくが岩のこげいにも白（しろ）うはがおえ、右郎、太郎、古峰大々久しくさんばさるごうにて候

やあら我等が拍子と申するは、西まで習ては西まびょうし　かしまで習てはかしま拍子、上のひょうしも八拍子、下の拍子も八拍子、合して十六拍子、この処を一舞舞ってもどろう。上を見たれし、桜川とで流したや、下を見たれし、あやとり川とて流したや。あやとり川原の、いもとり川原の、あんまちどりの歩まよに、なぐさみちどりて流したや

（六）番楽

番楽タロ、そーら、そーら

（七）鳥舞

鳥らあららはら、らら鳥らはら、らはら、鳥らはら、鳥らはら、らは、よいやそうりゃ、らはえささ〳〵〳〵

これ善光寺の由来と申するは、とうどう品々八方八つのからうど、十六本の銀柱、童子は庭に百合をのべ、さんこうの月に暇もなし。さても咲いたや、あら神、さしてもおとなる神は、たかまがはらや、おんのりさしても、かんざしたんや、鳥はてにくむひょうしにつき、夜昼くねる、めくらざるもの〳〵

（八）餅搗き

ヤーラー、十五、七、チャーヤ、小豆ふけたか、ふかし、ネタカ

（九）三人達

キメヨはじめて大髪振れば、サイゴの祭ごさ、目出とさんよ

（十）若子舞

あすは　ぎおんのまつりごと〳〵、えざさらいでて若子舞う
ハァーエー、まくではれ〳〵、面白ろや〳〵、ヨーエーヤソーレハイサーサ
月はさす〳〵面白ろや〳〵、ターンダシおれ〳〵面白ろや〳〵
〈ハァーエヤーハ　伊勢の宮、たかまが原えや神遊ぶ、うたえば開く天の岩戸か〳〵、エヤーサァーサーサ
〈あのめらし、めめもかたちもよけども、背中のこぶは玉に傷ある〳〵
〈七ツ子は八ツ子の処へ文をやる、文やる思って大人恥ずかし〳〵、エヤー
〈伊勢の宮、たかまが原へや神遊ぶ、うたえば開く天の岩戸か〳〵、エヤ、うたえは開く天の岩戸か〳〵
〈おく山で笛と太鼓は急げども、ナラノや若子、舞を静かに〳〵
〈男〉俺こごさ何しに来ただろ
〈楽屋〉来た人わからぬもの誰わかるか。
〈男〉それでは若い衆の拍子を借りてアジツケロが、（拍子）
〈楽屋〉おやじ〳〵、なったこタ〳〵
〈男〉なんと〳〵、若い衆の拍子というものは、ありがたいもんだ。トータイもんで、ふっくりあんじ出した。今此処デンツク、バンツク〳〵〳〵したのが何にもんだもんだ
〈楽屋〉トータイ神の若子、トータイ花の若子
〈男〉トータイ神の若子であれ、花の若子であれ、このおやじとりたいもんだ
〈楽屋〉やや、おやじ〳〵、トータイ神の若子、花の若子というものは、コトド〳〵歌ずきなもんで、ドッコイと休んで、若い時の恋時の歌というものをやらねばないもんだ
〈男〉此のおやじ、休みとうまいものは何より好きだ、ドッコイショ
〈楽屋〉ヤヤヤ、おやじ〳〵、休むにつけてもしかたがあるもんだ。猫の背中にトコドコト、カモの背中のなか高と
〈男〉ヤレヤレヤレ、若い衆、若い衆、休みだ、休みだというども、仕事よりコワイ
〈楽屋〉〈カイシシはナー、岩のガンケの下で、マタギナーいたかと夢を見た（拍子）
〈男〉ヤレヤレ若い衆、若い衆、若い衆の拍子というものは、ありがたいもんで、ドッコイと休んで、若い時の恋時の歌というものをやるんだといわれ、やったところでヒョットした沢深い岩がんけのサラサラ水流れかげんのとこに、こういう毛の生えたものがあった。こりあいいものだ　こっちのものふったくって来た
〈楽屋〉ヤーヤーおやじ、そういう毛の生えたものは、はやくクサミのつくもんで、今年あたりは特に暑かったので、クサミがつくから早くなげたらよかろう
〈男〉ヤレヤレ若い衆〳〵、このヂどごだましてとろうとしたて、とられるもんでない。ウマイコトは、かん草根子のハネゴッパ、砂糖ガメの中で三年も年とったようなもんだ
〈楽屋〉ヤーヤおやじおやじ、自分ばかりうまいと思ったってだめだから、そのあたりのアネコだちにもかんでもらえ
（男は観衆にかませる）
〈楽屋〉ソラみんなだクサイという。よくそのビッチョ鼻、よくきっぱらっで、よくかんでみれ
〈男〉若い衆にくされつけられたのが、なんつけられたのが、なんだかホホラクサイかんじがする　それであ、若い衆の拍子をかりて投げでしまう
（ヒョーシ）

（十一）さかさま番楽

番楽タローや〳〵、イワレテコワレて、番楽しからず、勝負はならぬ

（十二）やしま

これしゅっけいのぞうだんにて、みやわん〳〵ぞうだんにて、屋島壇ノ浦合戦の様子を一寸御物語

こうこうどうこう、ころはいつぞの頃なるに、延ろく元年うる三月十八日の頃なるに、佐藤継信のどうどうの矢先に倒れし、あした露となりにけり

（十三）ねっこ切り舞

我（われ）も二人の親をもち、俺も二人の親を持ち、老より弱い肩むけば　けしの下えの根無し草、限りとならせ給うぞや

しゅうりょう山の山いでて、わらび折りにと来たれしや、恐ろしや

よもの山ずんと出てみれば、こずふれ初雪にゆき消え残れし又見ゆる間に、親の思いに積りでて、氷の下へのかぎわらび、ひとすじ折るも親のため、二すじ折るも親のため　それをためとて思いしほどに、又来る日と更に思われん。子は又親に孝行あれども、親は又子に孝行なし。今朝越えし此の川、ほうらい山に水まして、舟はあれどもかいはなし、かいさあれども船頭なし。何とてこがれる勢もなし。よは打つ波も、よりてはもどれども、何とて我等もどらざるらん。ゆいしてて、別れし里にほのほのと出て見れば、かすみかかれしはるばると、眺めし空にゆわんとや〳〵

〈爺翁（じおう）〉今朝の嵐はハッコウにしげき嵐の事なれば、じおうは舟場のへりにも立寄り、目早やと存じ候程、天晴れや、目々美わしくまめようにコメズ、コメヨウテ、我れにも伝えあり、冨士の観音の総とりが姫にて候程

〈楽屋〉やあら　じおう殿の御前にまかり立ったる女よば、如何なる女とおぼしめし。我はつくし、ぶんごの国りょう山の山いでて、わらび折にと来たりしや。今朝、来よし此の川、ホウライ山に水まして、舟はあれどもかいはなし、かいはあれども、船頭なし。何とてごがれる勢もなし。向いに立たせたもうじおう殿、何とて此の川、一竿差し越したびたまわれや、じおう殿

〈じおう〉じおうも年若き時は、三丈の舟の伐も乗りこなし、今年よわいかたむけば、固くしようてそれならん。りようの若き方を頼むべくにて候程

〈楽屋〉やあら若き方とて更になし。じおう殿の上に召したる、麻の衣をすすいで申すべし、一日一夜の妻にもなろうかや

〈じおう〉さんならば末代の妻にもなろうべし

〈楽屋〉舟で越えるの嬉しさに、じおう殿の御意に従うべし

〈七十に余りし八十に近よる、じおうの差し竿、乱れ竿、年寄り舟に、年寄り舟に

〈じおう〉これよりじおうが舟に、しんずしんじと御乗り候程

〈がくや〉じおうが舟に乗るなれば、心を定めて御乗りやれ。心は行くやら、舟の速さに水に影は水鏡、年より舟に、としより舟に

〈じおう〉じおうも何なくみぎわに、こぎつき由候。これよりじおうが屋形に、しんずしんずと御入り候程

〈がくや〉やあら、じおう殿に申したき事あり

〈じおう〉じおうも女に御用あり

〈楽屋〉親の願いのかぎわらび、果さんがために、三日三夜の御暇をあずかるべくにて候

〈じおう〉今は花人を待つるというは、一時千日に当り、千日は万日に当ると云うたとえあり。先ずその日もけっき数えて知らせ申そうかや。ひとえ二十日、九日　七日、いや〳〵なり申さん

〈楽屋〉三日三夜ならずんば、一日一夜のおいとまを預るべくにて候

〈じおう〉親の願いというは有難さよ、御観音の里さつま川にて、しんずしんずと御待ち居り候

〈楽屋〉それも思えば今悔やし、それを思えば嬉しさに、深き草をかきわけて、春の日和のかぎわらび、一筋折るも親のため。二ずじ折るも親のため、昔は今に至るまで、親がいうも子がいうにも、女に心を許すまじ。今が早や、かいも竿も

投げすてて、今世で逢わねば末世の港で逢おうぞや

（十四）二人舞

二人の勇士、舞え、舞え、笛と拍子をそろえつつ、勇みし神舞を静かに、舞を静かに
この堂々の此の庭に、小路は一路と住人は、アシガラコーヤのヨネフリデ、負けども負けども尻もせず

（十五）熊谷次郎

熊谷や〳〵、敦盛討とうと乗って出ろ。首もとらんで戻ろうかや、首もとらんで戻ろうかや
熊谷次郎や直実や〳〵〳〵、敦盛討とうと乗って出ろ

（十六）牛若弁慶

これ弁慶の武蔵坊、斉藤太右ェ門、北の十郎、これにてか。内にて勝負を召さるるか、外にて勝負をなさるるか、まったとしばらく待たせもうや

（十七）やっちやぎ獅子

一　やっちやぎ獅子、生れて落ちると頭振れ振れ、頭ら振れ振れ
二　アッパレ調子、調子をそろえて、歌のかけぞめ〳〵
三　沖のカモメはブラリサラリと波をのり越し、波をのり越し

（十八）四人空白

伊勢はな津でもち、津は伊勢でもち、尾張名古屋はヤンサ城で持ち、ササヤトコセイ、よいな、あれわいな、これわいなと、とこなんでもセイ
一．オケサ踊らば板の間で踊れ、板の拍子で太鼓、三味いらぬ
二．今年豊作だよ田の稲見ればェ　丈は六尺穂は二尺
　臼引きたのだば、バヽとど頼のだえ、バヽも若い時ナボよかろう
三．今年初めてナゾミコ持たば、盆にかぶれどてサラシ三尺もらた。一にアヤメコ、二にかけつばた、三に下り藤、四に獅子ボタン、五ツ石山ガンケの椿、六ツムラサキ、キキョウの花よ、七ツ南天、八ツハ八重桜、九ツ米の花色よく咲いたぇ
奥の深山の一本杉の空枝に、鳥子一羽止またな、羽根をさしてくれるぞ〳〵
ダマレ子供衆、左の花よいか、右の花よいか、花をさしてくれるぞ〳〵
元の持ちよば、うらにこぎ上げ、ウラの持ちよば、本にこぎ下げ、その文句にカマエタ〳〵、オサエタ〳〵、笠をもってオサエタ、親のゆずりの笠を持てオサエタ、あとは大事〳〵

花・読み

東西〳〵、多忙はござりますれども　チットなりもの、芸当とめ置きまして、おはなの御礼を申し上げます
さてはや、今晩粗芸・番楽を取り仕込みましたるところに　御宿様には多額の見事なお花をいただきまして、ひとえにありがとう存じます。次には、、、、、
さてこの花の色を申そうなら、春は万作、梅桜　夏は橘（たちばな）、秋は菊、天竺ではボタン、カラ獅子、わが郷では桜花、一重桜や八重桜
当年の稲は万作で　クロを枕にゆるゆると、皆様よろこぶ稲の花、これに勝（まさ）たる花もなし、花よ花よとお花の御礼は、これに頂戴つかまつります

（高山　茂）

（六）冬師番楽『冬師獅子舞謡』

昭和六十三年六月補正

（表紙）

冬師獅子舞謡

冬師番楽保存会

—目次—

一　わらび折舞　1
二　屋島合戦武士舞　3
三　神舞　4
四　地神舞　6
五　鳥舞　8
六　牛若　10
七　弁慶　11
八　山の神舞　12
九　三人立舞　14
十　三番叟　14
十一　翁　19
十二　空臼舞　23
十三　獅子の舞　26
十四　御神楽　27
十五　忍ふ太郎　29
十六　源頼光　32
十七　御花銭の読み方　34

わらび折舞

我も二人の親を持つ、衛も二重の根無草よ、これ限とならせたも程に、蓬莱山の山出でに、わらび折りにぞ来りしや、今はこれまで来りしや。恐ろしや、四方の山に出で見れば、霞かかりて初雪に、雪けりて登りて股による、師走の氷の下への鈎わらび、一升づ折るも親の為、二升づ折るも親の為、これ為と思いし程用意して、今朝越えしこの川に、蓬莱山に水増して、船はあれども、櫂はあれども船頭なし、何とてこの川を越ゆる思案なし。親が子に請れども、子がまた親に請はんなし、岩打つ波も寄りては戻る、これ一更に思われず。我が故里をほのかに出で見れば、霞かかりて遥々と眺めの空も見離し

屋島合戦の武士舞　佐藤継信殿

疾う〳〵お寄り給へや、崇敬の冗談には、云わんものの申すことにては候へども、屋島何度、屋島浦々合戦の良将を、殊懇に語って知らせ申そうや。それ寿永四年（一一八五）閏三月十八日の頃なるに、佐藤継信殿は能登殿の矢先に中って朝の露となりにけり。ここは屋島の浦となり、浜の夜船の数程も洩れてはよそに伝えたり。雪降りて、いさりたてて浦上迄も長閑なる、春は心にさそわるる〳〵

神舞

扇とり、さむの枝にも声かげて、及ばぬおいやー、かかる白波〳〵
打てばなる、打たねば鳴らぬやこの鼓で、心は唸るし、心知ら舞ひで〳〵
毘沙門の、左脇差杖つごうや、杖にはお持つ神刀柄手に持つ〳〵
十七、八、若い淡濃道理思うし、今流行の花染の手拭〳〵
打てば鳴る、打たねば鳴らぬやこの鼓で、心は唸るし、心知ら舞いで〳〵や
拝めや〳〵、社を尊く拝むれば、遺憾なくうかぶ吾が盛り、まうの〳〵
舞うた〳〵しなやかにまうた〳〵

地神舞

地神の諌めし舞なれば、ちょいと拍子を揃えて、諌めし神舞を、静かに〳〵
打てば鳴る、打たねば鳴らぬやこの鼓で、心は唸るし、心知ら舞ひで〳〵
舞台壇の、よすみの隅にも声かげて、歌えや舞えや、風のさぶらうと〳〵
あれ見ろや、あれから淡濃道理思うし、今流行の花染めの手拭〳〵
王朝が衛の賑やかに、建てれや国見ろや、世界は広い国は穏やか〳〵
面白や〳〵このお堂のこの庭に、柱長座の余念降りて、万更容赦の余年なれば、
あら設けだも〳〵数々設けた、この世一時とつぐ人は、七千歳迄栄ゆくぞ、万年
歳迄栄えたぞー

鳥舞

鳥鳥礼拝、鳥礼拝、礼拝、鳥礼拝、礼拝、鳥礼拝、礼拝、鳥礼拝、よーりや、そー
りや
踏々四方八方、八つの唐糸、十六本の銀柱、堂の庭には遺留述べ、三更の月に曇
りなし
唐紙山容、雲乗りさしてかざしたんよう、高天が原への鳥は、天飛ぶ拍子、道は
ゆりころりなり、めぐらざるもの〳〵
打てば鳴る、打たねばならぬやこの鼓で、心は唸るし、心知ら舞ひで〳〵
舞台壇の、よすみの隅にも声かけて、歌えや舞えや、風のさぶらうと〳〵
あれ見ろや、あれから淡濃道理思うし、今流行の花染めの手拭〳〵
王朝が衛の賑やかに、建てれや国見ろや、世界は広い国は穏か〳〵

牛若

向御前に罷り立ちたる者をば、如何なる者をと思し召す
やーら、我こそはこの国の住人、今の牛若と申す者にては候へども、弁慶はうち
にて討死召しやるか、野に出て勝負召しやるか、待った逃しや申すまい

弁慶

東西、向御前に罷り立ちたる者をば、如何なる者をと思し召す
やーら、我こそは斎藤実盛、能登守教経無念なり、常識実知在り、早討する時に
すれば、秋の日のならいとて、おどろ暮れて候か。能々これにて一切心得、はえ
〳〵

山の神舞

山野ー、山の神、一隅で育ちや、山野ー〳〵
山野ー、打てば鳴る、打たねば鳴らぬや、山野ー
山野ー、今朝見れば、千代丘寺のや、山野ー〳〵
山野ー、王朝が衛の賑やかに、建てれや、山野ー
打てば鳴る、打たねば鳴らぬやこの鼓で、心は唸るし、心知ら舞ひで〳〵
舞台壇の、よすみの隅にも声かけて、歌えや舞えや、風のさぶらうと〳〵
あれ見ろや　あれから淡濃道理思うし、今流行の花染めの手拭〳〵
王朝が衛の賑やかに、建てれや国見ろや、世界は広い国は穏やか〳〵

三人立舞

君を始めて拝むれば、最高の松のこさ、おめでとう、さんよう

三番叟

吉田の鬼〳〵、たんと落ちれば滝の水、さっせえ通り河原とて流したんよう、さー
さ
東西、このところの喜びあれや、扶身やれや大再興〳〵。きりっと舞ひて候よ、
それ、きりっと舞ひてのついでには、そーれ、さー、いこと申そうや。さー、い

ことにとりては目出度い事を申そうや
やーら、只今舞ひたる三番参籠は、先に舞いたる翁に似て候よ。先に舞ひたる翁の目出度さは、大紋かざしの身に息災祥び、遐齢に愛敬はおちたる頻並みもおとり顔にあり。そーれ、この世、百世百代千代億万歳、天中地中五海円満息災安穏にたいし、平らかにしっとりと踏みしめるがための翁にて候よ
やーら、只今舞ひたる三番参籠は、前に舞ひたる翁が装束にも劣るまじとて、大紋かざしの身に息災祥び、遐齢に愛敬はおちたる頻並みもおとり顔にあり。そーれ、この世、百世百代千代億万歳、天中地中五海円満息災安穏にたいし、平らかにしっとりと踏みしめるが為とし、三番参籠にて候よ
そーれ、天竺の堀立伽藍の南側を一段昇って見てやれば、不動の浄土よ。二段昇って見てやれば、仁王の浄土よ。三段昇って見てやれば、釈迦の浄土よ。釈迦の前で満ちたる御供養を、つくづくと見てやれば、行脚は聖の行をもって、ゆったりと歩むことなれば、法華経は凡智ばかりにて、心も言葉も及ばんとして。そーれ、迎えとる源九郎殿の我が善知識と接し、空理きりきり早朝と御拝し、御前の聞く精進の人々は、九郎法師の如く東西接するに、いな、かりまして、なんは同行笑わせ給い、ちっとも知らぬさっぱりでは候得共
やーら、我等もおかしやそのままに、やーら、我等拍子と申すれば、鹿島で習ったも八拍子、三島で習ったも八拍子、合して十六拍子のところ、一舞まって踊ろう。上を見たれば、かづら川原とて流したんよ、下を見たれば、鶴と亀との目出度さんよう

翁　空海（弘法大師）

聖や高野、御影堂や、尚ほ練行や御影堂や。これや難症の翁ぞよう、慧忸の翁ぞよう。翁は先に生まれづづ、松や前に生まれづづ、今更出でて歳比べしいの姫小松。千代に八千代にや、御漫才に勝れ出しや、翁の鬚の長きようは、若黍の模様にししやししやよう
東の星を能で見たりますれば、薬師の浄土や月高く見えます
西の星を能で見たりますれば、阿弥陀の浄土や月高く見えます
南の星を能で見たりますれば、釈迦の浄土や月高く見えます
北の星を能で見たりますれば、毘沙門の浄土や月高く見えます
これや天竺の跡堤河原の池の亀よう、さて、三公の星を戴き、四海には四海の波をたたせたよう。空には、三界万霊は、錦旗の五座を招ずるに、下には発祥の八咫之鏡、鼓鉦の拍子で舞い遊び
春や来て、秋ゆくつばめはこのところ、天の下の祠堂に巣をかげて、十二のかり子を生み育て、さえづる声の目出たさよう。あれもぐにやく、これもぐにやく、翁なりく。貴方もどうだね、そなたもどうだね、翁は今は十代踊りく、弘法大師の大大師の翁なり

空臼舞

伊勢はなー津で持つ、津は伊勢で持つ、ドッコイドッコイ、尾張名古屋は、ヤンサ城で持つ、せっちやとこせえ、はいよいやな、これやのせ、ありやのおせ、ささなんでもせえ、はあ御祈祷く
越後ならしの手拭いもらた、あまり広くてかぶなことならぬ、何と染めたと染屋に聞けば、一にあやめこ、二にかきつばた、三に下り藤、四はしし牡丹、五つ石山の岩けのつつじ、六つ紫、御紺で染めて、七つ南天、八つ八重桜、九つこごり梅、十は殿様のかぶるような手拭い
おけさ、何をする行燈屋のかげで、おけさ見るとて、臼で目をつついた
甚句踊らば板の間で踊れ、板の響で三味いらぬ
奥の深山の桧の枝に、鳥子一羽くったね、あいつは憎い鳥だねく、黙れ子供衆く、羽をとってけろかなく、親のゆずりは察せよかろうく、げうは大事だ、げうは大事だ、大事く
あっちの方にかまえて、こっちの方にもかまえた、うらの持ちよば本にこき下げ、本の持ちよば、うらにこぎあげ、千秋万才、納めてよかろう

獅子の舞（地祇・地の神）

打てば鳴る、打たねばならぬやこの鼓で、心は唸るし、心知ら舞ひで〳〵
この館繁昌、大興伊達だやら、けた梁鋳物す黄金のいもの、黄金のいもの、やー
左より右へ廻れや、地祇利生地祇りや、うかぶ利生を早くあり〳〵
拝めや〳〵、社を尊く拝むれば、遺憾なくうかむ吾がさかり、舞うの〳〵やー、
舞うた〳〵、しなやかに舞うた〳〵や
舞ひにきて、この家のお庭を見渡せば、黄金やらかる、足にからまる〳〵

御神楽

打てば鳴る、打たねばならぬやこの鼓〳〵、舞台壇のよすみの隅にも声かけて、
さ声かけて
あれ見ろや、あれから淡濃道理思うさ、道理思う
王朝が衛の賑やかに建てれや、国見ろや、さ国見ろや
打てば鳴る、打たねば鳴らぬやこの鼓で、心は唸るし、心知ら舞ひで〳〵
舞台壇のよすまの隅にも声かけて、歌えや舞えや、風のさぶらうと〳〵
あれ見ろや、あれから淡濃道理思うし、今流行の花染めの手拭〳〵
王朝が衛の賑やかに建てれや、国見ろや、世界は広い国は穏やか〳〵

忍ふ太郎

和田義盛
梶原景時
三浦義宗の子、相模国和田に住すによりて氏となす
正治二年正月（一二〇〇年）、駿河国狐崎で討死す

ああ不思議、あな〳〵、まどろむの枕のおんよりも、大将鎧具足と感ずる人はたれ、
多生、これは忍のゆかりとて、お丶忍のふ太郎景時ならば、最後の手にも招き候
忍のふ太郎景時と聞いて、その日の出立装束は、煩多にといては、梵字の錦をひたたらい、卯の花縅の御鎧、五枚かぶとのしころの緒をむんずと締め、いかにも早き駒に打乗りて、前の原を見渡せば、敵は寄せ来る乱戦なり。寄せらば寄せれ、大敵寄せれ、しかもよごれずなれ。心肝も敏捷どうさ、弓の中をむんずと手に握って、ひょうと放てば鏑矢も止まいぬ、具足の鞅はづすといらい方々には、必死の強者きそうて、その矢も止りもせず、今はやにわにと荒げ起ちて、弓を投げ捨て汝を討つもの、するりと抜いて、北から南へ山を渡り、西から東に一と渡り、四方四角くも手でかくのは十文字、八割刀で衣河原へ斬り捨てたり

源頼光

蛇生だつだつ、酒呑童子のありさまは、岩にかたのせ昼寝して、両眼月月の如くなり、見ても身の毛のよだつなり。茨木童子や、どらくま童子や、勇んで勇んで、しいかかれ

御花銭の読み方

今晩、粗忽なる番楽に対し、お宿よりは美事の御花を戴きまして、ありがたく存じ奉り。天竺には牡丹、芍薬、桔梗、桜、梅、桃の花、春は万作、梅、桜、秋には皆さん喜ぶ稲の花、花よ花よと花の御礼を申しあげ奉り、ご存じのとおり私一人ばかり粗忽者、これにて頂戴仕ります。

（注）末尾に別筆で次のように記されている。
八平氏
三浦　土肥　秩父　大庭
梶原　長尾　千葉　上総

（裏表紙）

昭和六十三年六月補正
責任者　佐藤専之助
（髙山　茂）

（七）鳥海山小滝番楽『鳥海山小瀧番楽舞』　昭和十六年

（表紙）

昭和拾六年八月
鳥海山小瀧番楽舞
篠原作左衛エ門
持用

阿部貞臣述

鳥海山小滝村番楽舞之事

小滝村番楽舞ハ古来鳥海山神事行事トシテ厳修シ、演奏シ来リシモノガ、有職具眼ノ士ナク、近来其ノ祭事行事ガ頽タレ、為ニ屢々之ガ復興ニ努メタルモ、維持保存ノ力乏シク、今ヤ滅亡ニ瀕スルノ状態ニアリマス、

今ニ保存ノ道ヲ計ラズバ、千載ニ悔イヲ残シマス、抑モ此ノ行事ハ我ガ村ニ於ケル、重要ナル祭事デアリ、故実デアリ、神聖ナル思想的芸術デアリ、慰安娯楽ノ機関デアリ、祖先ヨリ伝統サレシ貴キ宝物デアリマス、

以テ敬神ニ、以テ崇祖ニ、以テ民情ノ融和ニ、以テ公衆ノ観楽ニ、老幼業者ノ慰安ニ、又芸術價値ノ上ヨリ実ニ国宝トシテ保存スベキモノアルト聞キマス、

我ガ小滝村ハ明治維新マデハ、鳥海山中口別当トテ鳥海山ノ玄関口デアッテ、村ノ名ヲ今モ坊中村ト云ヒ、山伏修験ノ村デ、三百余坊ノ衆徒、百余人ノ祢宜社職アリテ、一山ヲ就シタル、即チ地方ノ本山デアリマシタ、シテ別当神主ヲ小滝大院主龍頭寺ト申シマシタ、

而シテ此ノ舞ハ、鳥海山ノ御神事トシテ奉仕セシ天下泰平、国家安穏、武運長久、五穀豊饒ヲ祈ル神楽デアリマス、

鳥海山上ニハ六月朔日ヨリ八月朔日マデ神主ガ上ボッテ、御祈禱ヲナシ、又道者ヲ案内シテ居リマス、

サレバ此ノ舞モ、六月ヨリ于蘭盆ヲカケテ舞ヒ、八朔ニハ神送リトテ御宮ニ舞ヒ納ムルノデアリマス、其ノ後ニ舞ヒマスト、稲ニ霜枯レノ害ヲ受クルト云ッテ、作祭リノ御神事トシテ尊バレテ居リマス、

偖、此ノ舞ハ我ガ国ノ最モ古イ歌舞デアリ、美術デアリ、芸術デアッテ、散楽ト称シテ、三代実録ノ貞觀三年六月廿八日ノ條ニモ見エ、又源氏物語ニモサルガウ（申楽）ト訓ンデアリマス、

番楽ト申シマスノハ、能楽十六番謡ヒ物ノ番組ヨリシテ、後チニ名付ケシモノト云ハレマス、所謂神事能デ天ノ岩戸開キ以来ノ神楽ヨリ伝ハリテ御神事ニ用ヒラレタノデアリマス、サレバ此ノ舞ニ用ヒル謡ヒヲ総テ神歌ト云ヒマス、

此ノ舞今小滝村ニ現存スルノハ、番楽、翁、吉田、若子、松迎ヒ、日山（トンボウ）、猩々、鎧揃ヘ、幡揃ヘ、修験舞、大江山、曽我、田村、清重、堀川、鈴木、猿番楽、御神楽、蕨折リ、等デアリマス、此内若子ヲ太神宮様ト崇メ、翁ヲ春日様ト、吉田ヲ八幡様ト崇メテ居リマス、（京都府吉田神社ハ春日神社ト同体ナリ）

舞ハ陰陽五行ニ組立テ地拍子ヲナシ、即チ天ノ宇豆売命ガ天ノ岩戸ノ前ニテ桶ヲ伏セ、其ノ上ニテ足ヲ踏ミ鳴ラシテ舞ッタル風（フリ）ヨリ出デタル、四方固メノ格ノ正シイ古雅優美ノ舞ニテ、各々舞ニ由ッテ、拍子モ変リ、変化ガアリマス、総テ面ヲ被ッテ舞ヒマス、

音楽ハ、太鼓、横笛、摺金ノ三ツニテ合拍子ト称シマス、神歌ニハ、通リノ拍子ト、振込ミノ拍子ト、楽屋ノ拍子ト又舞ノ謡トニナッテ居リマス、

○通リ（渡御）ノ神歌、

△ハア大鳥海ノ水ノ流レニ御幣立テヽ、世界ハ広ク国ハオダヤカ、国ハ穏カ、ヤー
ヤレ面白、国ハオダヤカ、国ハ穏カ、ヤー

△ハア打テバナル、打タヌバ鳴ラヌヤ此ノ皷ミ、調ベノ糸心シメタリ、心締メタリ　ヤー　ヤレ面白、心シメタリ、心シメタリ、ヤー

△ハア祓ヒ川アナタ此方ト呼ブ声ハ、道者ノ声、カヽル白雪、カヽル白雪、ヤー
ヤレ面白、カヽル白雪、カヽル白雪、ヤー

△ハア山伏ノ肩ニカケタル法螺ノ貝、一ト吹キ吹ケバ国ハ鎮マル、国ハシヅマル、
ヤー　ヤレ面白、国ハシヅマル、国ハ鎮マル、ヤー

○笛ノ音調

トハェロハェ　ロハェラェー　トハェロハェラェ
トハェロハェ　ロハェラェー　トハェロハェラェ
トハェラヘハェ　ラェハェラェー　トハラェハェラェ
トハェロハェ　ロハェロー　トハヘロハヘロ
トロラヘー　トハヘラハヘ　トロローロロローロロロ

○太鼓ノ音

ダゴスコ　スコダン　スコダンダン
ダゴスコ　スコダン　スコダンダン
ダゴスコ　スコダ　ダゴスコダ
ダゴダゴ　スコダ　ダゴスコダ
ダゴダゴ　スコダゴ　スコダン　スコダン　スコダンダン

○振リ込ミノ歌

△ハア此処ノ御庭ニフリ込メバ、黄金ノツル、オシメカラマリ、御注連絡マリ、ヤー
ヤレ面白、オシメカラマリ、オシメカラマリ、ヤー

△ハア此処ノヤカタハ、ドンナ大工ガ建テタヤラ、桁梁貫シカリナルモノ、シカリ成ルモノ、ヤー
ヤレ面白、シカリ成ルモノ、シカリナルモノ、ヤー

△ハアヲガメヤ拝メヤ、四方丁度デ拝ガムレバ、如何ナル神モ、御イデヨロコビ、
御出テ喜ビ、ヤー
ヤレ面白、御出デヨロコビ、御イデ喜ビ、ヤー

△ハア榊葉ニ、ヌサトリカケテ神ノ舞、歌ヘバ開ク天ノ岩戸ジヤ、天ノ岩戸ジヤ、
ヤー
ヤレ面白、天ノ岩戸ジヤ、天ノ岩戸ジヤ、ヤー

○笛ノ調子

チャェラヘラヘロオラヘラヘ　チャヘラヘラヘロ　オラヘラヘ
チャヘロチャヘロオラヘラヘ　チャヘロラヘロ　オラヘラヘー

○太鼓

ダラスコダンゴ　スッタカダ
ダラスコダンゴ　スッタカダ
ダンゴ　ダンゴ　スッタカタ
ダラスコダンゴ　スッタカタカ
ダダダ　ダダダダト続ク

○楽屋ノ歌

△ハア越シモセズ、越サセモヤラヌ陸奥（ミチノク）ノ、トヤ〳〵森ノウヤムヤノ関、ウヤムヤノ関、ヤー
舞フタ、マフタ品ヤカニマフタ、品和（ヤカ）ニ舞フタ、ヤー

△ハア合図山、フモトノ狭霧（サギリ）ヤ過（ス）キスギ、狭霧（サキリ）ヤ過キ、橋モトノ関、橋モトノセキ、ヤー
マフタ、舞フタ品ヤカニ舞フタ、品柔（ヤカ）ニモフタ、ヤー

△ハア鳥ノ海、クスシキ神ノチカヒゾヤ、天ノ鳥船カヨヒマスラン、通ヒマスラン、ヤー

舞フタ、マフタ品ヤカニ舞フタ、品優(ヤカ)ニ舞フタ、ヤー
△ハアアノ女郎子(メラシ)、紅イタンナヲ誰レモ思フタ、冠(カブ)テモ見ロヤ、ハナゾメノタナ
花染ノタナ、ヤー
モフタ、舞フタ品ヤカニ舞フタ、品ヤカニマフタ、ヤー
笛　ラェラェラェラェ　トラェート　ラェトロロ
○越シモセズ　越サセモ　ヤラヌ
○ダンゴダンゴ々々　ドダンヅク　ダンヅクヅ
笛　ラェエトロロロ　オラェロ　オローロ　オロロ
○みちの　くーの　とや〳〵　もりの
○ダンヅクヅンヅク　ドダダ　ドダダヅク　ドダダ
笛　ラェトロロロ　オラェーロ　オラェーロ　ラェトロロ
○うやむやの　せーき　うや　むやの
○ダンヅクヅンヅク　ドダダヅク　ドダダヅク　ダヅクヅ
笛　ラェトロロロ　オラェロー
○せき　ヤー
○ダンヅクヅンヅク　ドダダー

○幕出ノ歌（ラエギ禮義ハ五常楽）

△ラエギラエギ、大鳥海ノミタラセ川ノ底見レバ（舌ニテアレレエ）、マナゴ石
黄金花咲クコガネ花サク、ヤー　エツソレホ
或ハ
△ラエギラエギ、関川ヲ上ボノリテ見レバ滝モアル、アレレエ、松杉サヲノアカ
ノ白滝、阿迦ノ白滝　エツソレホ
或ハ
△ラエギラエギ、大鳥海ノ御垂瀬川ノ水汲ミテ、アレエ、心モ身ヲモ祓ヒキヨム
ル、ハラヒ清ムル　エツソレホ
ト幕ヨリ半身ヲ現ハシ扇ヲアヲリツ、
△君代初メテ拝(ヲガ)ムレバ、栄ウト益スコト目出度ケレ、エー
ト幕ヨリ出デ舞フ
太鼓　ダンドンダン　ダンドダン、ト静ニ

一　番楽

面ヲアテ兜ヲ冠リ、羽織、袴ニ刀ヲ帯シ、扇ニテ、一人ニテ舞フ、優雅ニシテ
気品高キ威儀アル舞ナリ、
エーエーエーサ、デヾヾデヾヾヾ、デゴデッゴ、デゴテッコ、デヾヾデヾンノョ
ヤサトサ、デヾンノデンサ、デヾンノデンサ、デヾンノデンサ、デヾンノデンサ、デヾ
ンノデンサ、デコ〳〵デゴ〳〵デゴ〳〵デゴデヾン、ヨヤサト
ハエンヤサ、エンヤサ、スタンスタンスタタン、スタン〳〵スタン〳〵スタタン
〳〵エンヤサ〳〵エンヤサノ、カヽラカノカヽラカ、エンサノカカラカ、エンヤ
サノカヽヽヽカヽヽヽ、デヾノデンサ、デヾンノデンサ、デヾンノデンサ、デヾ
ノデンサ　デゴ〳〵デゴデゴデヾンノ、エンヤサ〳〵、スタン〳〵スタン〳〵ス
タン〳〵スタタン〳〵ハ、エンヤサ〳〵エンヤサノ、カヽラカノカヽラカサ、エ
ンヤサノカヽラカサ、エンヤサノ、カヽカヽカヽカヽ（此ノ様ニ四方固メテ）
デヾヾデヾンノ、ヨエサー、ハエサー（ト二歩出ル）
スタン〳〵スタタン〳〵スタン〳〵スタン〳〵エンヤサ、エンヤサ、エンヤサ、エンヤサノ
カヽラカノカヽラカ、エンヤサノ、カヽラカハ、エンヤサノカヽカヽカヽカヽ、
ヨンエ〳〵ヨンエ〳〵、ヨエソリヤ、デヾノデンサ、デヾンノデンサ、デヾンノ
デンサ、デゴ〳〵デゴ〳〵デゴデヾンノ、ヨヤサトサ、デヾンノデンサ、デヾン
ノデンサ、デヾンノデンサ、ソハラヒ〳〵ヤー

二　翁（三社様ノ内）

立烏帽子ニ狩衣、面ヲ被リ扇ニテ舞ヒ、流暢古雅ノ舞ナリ、

△謡　チリリヤドウヤ、タラリドヤ、チリリヤドウヤ、ドウドウーヤ　ハアエ
笛　トウラェートホロホローロー、トウラェートホロホロロー
　トウラェートホロホロロロー　（謡ノアトニハ皆カ、ル）
太鼓　デン〳〵デゴスコデンデン、デンデンデコスコデデン、デン〳〵デゴスコデデンー
△翁ハ先キニ生マレシヨ、松ハ先キニ生レシヨ、イザサラ出デテ年クラベシヨ姫小松　ソーレ
（イザサラニテ翁出ル。楽ニ和シ中腰ニテ舞ヒ一週スル）
笛　トウロートホロホロロー、トウロートホロホロロー、トウロートホロホロロー、チェヘロホ〳〵ロロー、チェヘロホ〳〵ロロー、チェヘロホ〳〵レレエー
△翁ノヒゲノ長キヨニ、我ガ君ノ御代ノ久シサヨ　オーイ
△伊勢神明、天照太神ノおしめ給フホドニ、そうりんノ面ヲ取ツテ顔ニアテ、又狩ギンノ袖ヲヒル返シ、ヒロ戻シ、舞フタル翁ノ目出度サヨ　オーイ
△峯ノ松風サア〳〵ト、谷ノレイシャゴハレイ〳〵ト、千代ニ八千代ドウ、百五万歳ニスクレタリ　オーイ
△春来テ秋往ク燕ノ、玉ノ斎殿ニ巣ヲカケテ、十二ノカヒコ産ミ育テ、サイヅル声ノニギヤカサ　オーイ
△先ヅ東ヲオシヲガンデ見奉レバ、薬師ノ常燈ヤ月高ク見エマシマス
△南ヲオシ拝ンデ見奉レバ、観音ノ常燈ヤ月高ク見エマシマス
△西ヲオシヲガンデ見奉レバ、阿ミダノ常燈ヤ月高ク見エマシマス
△北ヲオシ拝ンデ見奉レバ、釈迦毘沙門ノ常燈ヤ月高ク見エマシマス
△ソラニハ白金ノ玉ノハダ、錦ノ御座所広ウタリ　オーイ
（音楽三遍ノ後ニ）
チェヘロヘ、チェヘロヘロロ。チェヘロホ、チェヘロホ、ロロ。チェーレイ、チェヘロホ、ロロー　ハ
ハエチャ、ハハエチヤ　ハハエチヤ　ハハエチヤ
△言立　翁ノイハレハこうらんニ、サイ〳〵〳〵トハ急ガレタリ、ソハラヒ〳〵ヤー

三　吉田（三社様ノ内）

高兜ニ狩衣、扇ト鈴ニテ腰ヲ屈シテ舞フ
△唄　吉田殿ハ桜ハ波ニ埋モリテ、又来ル春ノ染ニ咲クヤ、墨染ニ咲クヤー
（腰ヲ屈シ両袖ヲイダキ、片足ツヽ爪先ヲ揚ゲ、尻ヲ引キツヽ、四方固メニ廻リテ休ム）
△言立　オーサイヤ〳〵、祈禱舞デ候、祈祷舞デノ御馳走ニハ、目出度イ事ヲ申サウヤ。イヤ〳〵目出度イ事ニ取出テヽハ、久シイ事ヲ申サウヤ。久シイ事ニ取出デテハ、先キニ参ツタル翁ハ色モ白ク背モ高ク、百五万歳経タル翁ノ事ニテ候。只今マ井ツタル三番叟ハ、色モ黒ク背モ低ク、百五万歳経タル三番サルガフノ事ニテ候。イヤ〳〵
先キニ参ツタル翁ノ装束ニ劣ラズトテ、トクサ色ノカリギン、ハリびようぐガウツタル式ノ面トツテ顔ニアテ、百世百代長却五万歳、天長地久御勧進、此処シッカリト踏ミ鎮メ、能ウ固メノ三番申楽ノ事ニテ候。　イヤ〳〵
我レ等ガ拍子ト申スルハ、鹿島デ習ウハ鹿島拍子、三嶋デ習フハ三島拍子、上ミノ拍子モヤ八ア拍子、下モノ拍子モ八拍子、合シテ十六拍子、ストン々々々
（鈴ト扇ヲフリツヽ、舞フ）
△唄　吉田殿ハ鶴ト亀トカンマクレテ、サイ々々心ニ任シタリ
△沖ノカモメト、ナギサノ千鳥トアユムヨニ、サラ〳〵サラトテ流シタリ
△上ミヲ見タレバ、相染川トテ舞カシタリ、下モヲ見タレバ桜川トテ流シタリ、ヲサ々々デゴ〳〵デン

四　若子（三社様ノ内）

若子舞ハ、天照大神ヲ芸術化シタル最モ尊キ舞ニテ、盆ノ七月十七日別当小滝院主ニテト、又八朔ノ神送リニ御宮ニテトヨリ外ニ奏セヌ掟ナリ。女面ヲ当テ宝冠ヲ頂キ、緋ノ袴ニ舞衣ヲ着シ、扇車ヲ使ヒ優美ナル舞ナリ

△神歌　花ノ若子舞ヲ一ト舞ヒ云々

都ノ月ノ小車ヨ　○ハ車ノ輪ノ如ク

五　松迎ヒ

高烏帽子ニ爺翁ノ面ヲ被リ、狩衣ニテ青竹ニ幣ヲ掛ケタルヲ担ギ、扇ニテ舞フ優雅ノ舞ナリ、

△謡　松ヲ便リニ生ヘ藤ノ、松ヲタヨリニ生ヘ藤ノ、二タ葉ノ松ニ付キニケリ

△言立　アラ爺翁殿ニ背ヲワセ給フ松ノおん事ヲ知ッテ、背負ハセ給フカヤ。又知ランデ背負ハセ給フカヤ。此松ハ天軸ノ神山殿ノ御前ニソナヘタル松ノ御事ニテ候。先ヅハ、本ノイワレヲ語ッテ知ラサウベシ

△謡　先ヅ東ニサシタル其ノ枝ヨ、春ヲ迎ヘテ花ヨ松

△南ニ指シタル其ノ枝ヨ、夏ヲ迎ヘテ葉ヲシゲル

△西ニサシタル其ノ枝ヨ、秋ヲ迎ヘテ霜木暮（シモコグレ）

△北ニサシタル其ノ枝ヨ、冬ヲ迎ヘテ雪夜松

△中ナル枝ヨ、四節ノ枝ヨ、淡海（アウミ）ノ国ノ勢多（セタ）ノ長峯（ナガネ）ノ洲嵜（スザキ）ノ松トハ、此ノ松ノおん事ヨ

△松ノ千歳ハ栄（サカ）ウルモンノ、松ノ千歳ハ繁ユクモンノ

△ハヤシ　此ノ扇オッ取リおん直し、舞ヲ一ト舞ヒ舞フヤ、万歳楽ヤ

六　トンボウ（日山）

二人雌雄ノ鳥兜ヲ被リ、弓ト矢ヲ持チ相対シテ舞フ

△謡　カササギノハエー、渡セル橋ニハエー、おく霜ノハエー、白キヲ見レバハエー、夜ゾフケニケルハエー

△奥山ニハエー、モミチ踏ミワケハエー、ナク鹿ノハエー、声キク時ゾハエー、秋ハ悲シキハエー

（弓引キ合フテ四方固メニ）

△ハヤシ　トンボウヤ日山ノ弓、本山ノ弦（ツル）、ツルカケ給ヘ、ソヤ射給ヘヤ

△イカキノ弓、モト山ノ弦、ツルカケ玉ヘ、征矢（ソヤイ）射玉ヘヤ

△トンボウハ日山ノ弓、本ヤマノツル、弦カケ玉ヘ　征矢（ソヤイ）射玉ヘヤ

△テンヤ弓、向フ矢先キニ悪魔来ラズ、悪魔来ラズ、エンヤ

七　猩々

酒ヲ讃美シ一人ニテ転ガリツヽ舞フ

△是レ猩々ノ申セシヨウハ、大人ノおん事ナレバ、七合入ノおん杯でヒキカヘくホス程ニ、猩々ニ三度ホサレケリ

△ハイラーララ、マフタリ舞タリヤ、品ヤカニ舞フタリヤ、テヘヘロロロロロッヘロロ

八　鎧揃へ

甲冑ノ武士二人出デ、前ニ扇ノ舞アリ。休ンデ鎧ズリヲナス、後ニ刀ヲ抜キテ舞フ

△謡　次信殿モ忠信モ、此ノ度ビ鎧ヲ揃フルニ、先ヅ一番ニ、黄金サネノ腹巻ニ、錦ノホロヲカケタルハ、義経殿ノ鎧ナリ

△二番ニ、重忠殿ノ鎧ニハ、紫スソノ物ノ具モ、是モ劣ラヌ鎧ナリ

△三番ニ、佐々木殿ノ鎧ニハ、小桜威（オドシ）ノ物ノ具モ、是レモ劣ラヌ鎧ナリ

△四番ニ、次信殿ノ鎧ニハ、アカイト威ノ物ノ具モ、是モ劣ラヌ鎧ナリ

△五番ニ、忠信殿ノ鎧ニハ、卯ノ花威ノ物具モ、之レモ劣ラヌ鎧ナリ

△此ノ人々アリ様ハ、モノニヨク〳〵タトフルニ、将門カ、スミトモカ、ゲニヨリケカガ勢ハ、コレニハイカデ勝ルベキ、之レニハイカデマサルベキ

九　幡揃へ

△謡　ヨシ信殿モ義高モ、味方ノ勢ヲ立テタルハ、先ヅ一番ニ、イレゴカタニ、スソクロノ、金ノ幣ヲ立テタルハ、大山ノ判官時行ヨ

△二番ニ、フタツカシハニ三ツ巴、銀ノヘイヲ立テタルハ、右近ノ大夫時正ヨ

△三番ニ、三ツ輪チガヒノ帆カケ舟、百ナリ瓢箪付ケタルハ、佐々木ノ四郎高綱ヨ

△四番ニ、四ツナルスミノおんハタヨ、上ニ三日月付ケタルハ、柴田ノ三郎景政ヨ

△五番ニ、月ニ星ノおんハタヨ、下ニ立ツ波付ケタルハ、新田ノ四郎ツネウジヨ

△コノ人々ノ勢ハ、メンボクタイジヤ、百ダンダ、アリツナ金時ノ勢ハ、是レニハ如何デ勝ルマイ、々々々々々々

十　大江山

山伏姿ノ武士（振リ崩ヅシニ甲冑ニ帯刀、船烏帽）二人出デ、又一人ノ姫出テ、舞ス。姫退キテ、鬼人二頭出デ斧ヲ揮ヒ、大格闘シテ鬼ヲ退治スル所

△言立　アラ御前ニ罷リ立ツタルツハモノハ、如何ナル者ト思召。我ハ都ニカクレナキ源ノ頼光渡辺ノ綱ニテ候。然ルニ君ノ詮議ニテ、大江山酒呑童子ヲ平ラゲントシ、安全ニナスベシトノ宣旨ヲ蒙リテ、只今大江山指シテ急ガバヤト存ジ候

姫出デ舞フ

△言立　アラ御前ニ罷リ立ツタル女ヲバ、如何ナル者ト思召。吾ハ都ニカクレナキ、池田中納言花園ノ姫ニテ候、アル時鬼人ニサソハレ、是レマデ来リ候。如何ニ夫レナル客僧ダチ、何人ニテ候。我ハ都ニカクレナキ、源ノ頼光渡辺ノ綱ニテ候。或時君ノ詮議ニテ、都ヨリ鬼人ニサソハレシ姫ドモヲ、都ニ帰サン其ノ為ニ、今ハ是マデ来リ候

△謡　アリガタヤ有リガタヤナー、夫レハ誠カ嬉シヤナー

其ノ儀ナラバ語ルベシ。此ノ川上ミニノボリ給ヒテ御覧ゼヨ。イラカヲナラベ、タテヲツキ、黒金ニテヤカタ建テ、鉄ノ御所ト名ヲツケテ、四節ノセツヲ学ビツヽ、ルリノ宮殿玉スダレ、其内ヨク〳〵見給ヘバ、酒呑童子ノ有様ハ、色ウス赤ク背ヲ高ク、髪ハ冠リテ乱レ髪、髪ノ生ヘサニ角生ヘテ、見レバナカ〳〵恐ロシヤナ。能ク〳〵忍ビ入リ給ヘ、イトマヲ申スゾサラバトテ、奥ヲサシテゾ皈ヘラルヽ、奥ヲサシテゾ帰ヘラルヽ

酒呑童子ガ幕出ノ時

△言立　茨木夫レト聞クヨリハ、余スマイカト云フ侭ニ、勇ンデ〳〵カヽリケリ

十一　曽我

船烏帽子ノ武者二人ニテ舞フ

△言立　有ッテアラン有リシ時、コヨミトコヨヤノ事スイヨモ知ラヌ時、父ヲバ何処ニ討タレシヤ。ウタレシドコハトコ〳〵ヤ、青木青山、弥陀ノ山

△唄　十ヤ廿ニナリヌレバ、野ニ伏シ山ニ伏シ、親ノカタキヲネラヘドモ、敵ハ大勢ナリ、吾等兄弟二人ナリ、フル郷エ故郷エ

鎌倉勢ノ方々ハ時ヨモ知ラヌカラントテ、六月雪ヲバカノコマダラニ眺メツヽ、近国大勢ノ人々ハ、浮島ガ原ノ野サキマデ、ナビキムレタルカタモナシ

△曽我兄弟モ出テ立チシガ、富士ノ裾野ト急カレタリ。マッタ明日ハ不二ノ裾野ノ巻狩トテ、カネテ御触レハ候ヘド、カホドスゲ（情）ナキ親ノ敵、見テモ見バヤト思ヒシニ、大センキノ其ノ中ニ、大柏木ノ直衣ニ、ハキクサカリノネカハキトテ、カラス黒ノ駒ニ乗ッタル容子

見レバカタキノ祐経ナリ。祐経カ見ルヨリ心ハソヽロキ立ッテ、ソヽロキカ、伏木ニ駒ヲハセカケ、ソレビヨブ返ヘシニカッパト伏シ、又寄テ駒引キ寄テ乗ランストスレバ、敵ハ桜ガ池ニト急カレタリ

△言立　曽我兄弟ハ人ノ申ス事、カホドスゲナキ親ノ敵ヲネウフヨリ、イザヤ兄弟二人シテ、指チガヘント思ヘトモ、其時ヲヂノ重忠ハ、一首ノ歌ニテ仰セ有リ。色ツク山ノ紅葉葉ノ、夕暮待テ見ヨカシナンド、遊バセ給フカシ

△抑モ夜モ夜半ニナリヌレバ、持ッタル手ンタイ（手松明）打フリ打チフリ、祐経ガ屋形ニ忍ビ、弐本ノ太刀ヲ鋭キダニ取ッテ、シ、ムラ柝カウト戰フタリ。四十二ノ男ヲ四ツダニ斬ッテ、名ヲバくかへノ五郎十郎と名のられタリ

十二　田村

△言立　アラ御前ニ罷リ立ッタル若武者ハ、イカナル者ト思召。我ハ都ニカクレナキ、稲瀬ノ太郎トシヒトノ其ノ嫡子（チャクシ）稲セノ田村時宗トハ、サテ其ガ事ニテ候。コノ度君ノセンギニテ、勢州鈴鹿山ヘスマヒナス、立エボウシト申セシ鬼人ヲ討手ニ差ツカハサレ候。鬼人ハ、ヘイキノモノナラバ、日頃祈リシ清水ノ利生ヲアラタニ蒙リテ、鬼人討タバヤト存シ候

△謡　南無ヤ大慈ノ観世音、日頃ハ利生ヲアヤマタズ、今度ハ利生ヲタビ給へ。衆生サイドノ願ナレバ、トテモカナハヌモノナラバ、鬼人ノ手ニ付ケ給ヘカシ、大慈大悲ノ観世音

△言立　ハヤ、シノノメト見エ候ヘバ、勢州鈴鹿山サシテ急ガバヤト存ジ候

△トウ〳〵急ギ候ヘバ、勢州鈴カ山、岩屋ニ着イタト存ジ候。イカニ汝キ、タマヘ、汝等如キニハ名乗ルデハアラネドモ、平生天王起シ奉ル、稲瀬ノ田村時宗トハ、サテ某ガ事ニテ候。然ルニ君ノセン議ニテ、鈴鹿山スマヒナス、鬼人ヲ討手ニ差ツカハサレ、トウ〳〵腹ヲ切ルベキカ、腕アヒ勝負ヲナスベキカ、命ヲ取ラント云フマ、ニ、勇ンデ〳〵カカリケリ

十三　清重

△謡　高ダテ御所デ某ハ、有リ無シナンドヾ、ぢんぼいにすてきみにはアラネドモ、我君様ト某ハ、我君様ト某ハ、御運ノ末カト今一トタビト、拝ガミ申スモノナレバ、カホドニナゴリ惜シカラン、様ヲカヘタル甲斐モナク、アラワレケルモ我君ノ、ヨンモ一トヨモ葛ノ葉ノ、恨ミベキニハアラネドモ、サシモイタケキ清重ハ、涙クミニテ立チニケリ、涙クミニテ立チニケリ

△言立　アラ御前ニ罷リ立ッタルツハモノハ、イカナル者ト思召。我ハ都ニカクレナキ、義経ノ御身内、スルガノ次郎清重ト申ス者ニテ候。目ヲ忍ブトハ申セドモ、梶原源太景季ニ、見ラレ入ルコソ不運ナレ。鎌倉勢ノ方々ハ、清重ヲ討取り、其ノ名ヲアゲヨト存ジ候

△源太出ル、ハヤシ　源太ソレヲ聞クヨリモ、余スマイカト云フマ、ニ、勇ンデ、勇ンデ、カカリケリ

十四　堀川

△謡　静ガ姿ヲ花ト見テ、イマダ秋ニハアラネドモ、卯月二十日ノコトナレバ、色々草ノ花ノカズ、中ニ松ニト咲キカ、ル、女郎花カト疑フニ、らいてんシケル有様ハ、錦ヲサラスガ如クナリ、錦ヲ晒スガ如クナリ

△言立　アラ御前ニ罷リ立ッタル女ヲバ、如何ナル物ト思召。我ハ都ニカクレナキ、いそのせんしガ娘、サテ静トハ自ラガコトニテ候。鎌倉勢ノ方々ハ、獅子象ノ牙ヲハミ、はんくわいキウリウノ勢ナストハ申セドモ、アマスマイカト存ジ候。ミツヨシソレカ

十五　鈴木ノ三郎重家

△言立　アラ御前ニ罷リ立ッタルツハ者ハ、イカナルイ者ト思召。我ハ都ニ隠レナキ、紀州フジシロ、川ツラノ、母メヲ忍ブ、鈴木ノ三郎重家ト申者ニテ候。ケサ馳セバヤト存ジ候

△言立　アラ御前ニ罷リ立ッタル女ヲバ、如何ナル者ト思召。我ハ都ニカクレナキ、紀州フジシロ、川ツラノ上ヨリ忍ブ、鈴木ノ三郎重家ガ母ニテ候。今朝ノ道者ノ申セシヨウハ、重家ハ、奥口ニ下ル容子ト承レバ、奥州秀衡ハアマリ啓

上仕候、君我一人参ラヌトテ、亀井、片岡、伊セ、駿河、常陸坊ノかいぞん、鷲ノ尾ノ六郎トテ、宗黨（ムネドウ）ノツハ者八人付添ヒ、我等ガ奉公ハ、他人ノ奉公ニナラフカヤ、他人ノ奉公ハ、我等ガ奉公ニナラフカヤ、さん候

△謡　先ヅ〳〵重家ハコヽニトドマレヨ。親子ノ行末ハ元ヨリウバダケノ明神ナ、親子ノ行末ハオキニシケタ神ナレバ、弓矢ヲ安ノンニ踏ミ鎮メ、桂ガ里ニ着キニケリ、桂ガ里ニツキニケリ

△重家名ノレバ、木戸モ明キ、夜ハホノボノト明ケニケリ。天ニハ鳴神、地ニハノカニワカニ、ソレ櫓ヨリ飛ンデハ下リ、大キイ物ノ鞘（サヤ）ウチハヅシ、逃ゲレバ追ツカケ、転ベハノツツメ、迫（セマ）レバモロ〳〵、瓜切リ、胴切リ、唐竹割ニ波ヲ漂（タヽ）ヘテ衣川ニト切捨テタリ

十六　蕨折り

△ハア、イウユウヨウヤ、面白ノウヤ、アヨウイサ

△女言　吾レモ二人ノ親ヲモチ、年寄リ弱キシヽ（肉）モ、次第ニカタムケド、首陽山ノ山ニ出デ、蕨折ニゾ出タルナリ。今ハ是マデ来タルナリ

△唄　四方ノ山路ニ出テ見レバ、カスミカヽリテハルバルト、雪消エ残ル、雪ノ下タエ（萠）ノカギ蕨、一ト筋折ルモ親ノタメ、二タ筋折ルモ親ノタメ。夫レヲ思ヒシ程モナク、ホンノボンノト出テ見レバ、吾ガ来シ里ハマダ見エズ。蓬莱山ニ水マシテ、岩ウツ浪ハ寄セテハモドレドモ、何トテ吾等ガ戻ラザルラント、今朝越エシ此ノ川ヲ、舟ハアレドモ船人（センド）ナシ、眺メノ空ニ思案ドコ

△爺翁云フ　今朝越エシ、ケサコエシ、今朝ノ嵐ノハツコハゲシキ嵐ニテ、船場ノ上ニ立チ出デヽ一見センホドニ、アラヤ向ウニ立タセタマフ女郎ハ、ミメ美クシク、こみぢこみやハ逢ツテマ見ヨウ、ツタエ聞ク、富士ノかんのう草取リノ姫ニテ候カヤ

△吾ハ筑紫豊後ガ郡、難波（ナニハ）ガ長者ノ一人姫ニテ候。親ノ願ヲ果タシタク、蕨折リニト出テ見レバ、此ノ川ノかつちう、蓬莱山ニ水増シテ、舟ハアレドモ櫂サ無シ、櫂サハアレドモ船人（センド）ナシ。何卒一ト越シ指シ越シタビ給ハランカヤ、爺翁殿

△アアラ爺翁モ年若キ時ハ、花ノ筏（イカダ）モツミ下ダシ、船ニテ年ヲ送リタル爺翁ナレド、今ハ指シコス甲斐モナシ。余所ノ若キ方ヲ頼ムベキ事ニテ候

△余所ノ若キ方トテ頼ムベキ者更ニナシ。何卒一ト越シサシ越シタビ給ハラバ、爺翁殿ノ上ニ召シタル麻ノ衣モ、スヽンデ進上スベシ。サアラバ長クノ妻ニモナラウカヤ。越エルハウレシサノマヽニ、爺翁殿ノ目ニモ従フベシ

△七十ニアマリ、八十ニ近キ爺翁ガ船ヲバ越スナラバ、共ニ棹サス乱レザヲ

△向フノミギワニ着キニケリ。水ニハ限リトナラセ給フ

△トウトウ船ヲバ、難ナク指シツケ候程ニ、爺翁殿ノ目ニモ従フベシ

△アアラ爺翁ニ願ヒ度ク候

△サテ如何様ウナル事ニテ候

△親ノ願ヲ果タシタク、三日三夜ノ暇ヲダヒ給ハランカヤ爺翁殿

△アアラ爺翁ガ此ノ年ニ、花人待ツト云フハ、一ト時二タ時サエモ千日万日ニ向フベシ。先ヅ日ヲ操ツテ語ツテ知ラサウベシ。ヒヒテ、二日、三日、イヤ〳〵ナリ申サン

△三日三夜ナラズバ、一日一夜ノイトマヲタビ給ハランカヤ爺翁殿

△一日一夜ノイトマヲバ、取ラスル程ニ

△アリガタヤ〳〵先ヅおいとまヲ申スゾ、サラバ、サラバト急カル、

十七　修験舞

此ノ舞ハ別当小滝院主ニテノミ舞フモノ

姫出テ舞ヒ休ム

法螺貝ヲブウブウ吹キ修験出ル、錫杖ヲツグ

△言立　アーラ御前ニ罷リ立ツタル女ヲバ、如何ナル者ト思召。吾ハ筑紫豊後ガ郡、難波ノ長者一人姫ニテ候。今度鬼人ニ誘ハレ、此山入ニ迷ヒ候。イカニ夫

レナル客僧殿、何地ノ方ニ候カヤ
△サン候、某ハコレ此ノ山寺ニ住ヒナス、山伏修験ニテ候。麓ノ長者ガ高札ニツキ、悪魔降伏、衆生済渡ノ本願ニテ、山姫ヲ救ハン其ノ為メニ、此ノ山奥ニ参リ候。ブウー〳〵ジャク〳〵
△此ノ女元ノ女ニ返シテヤラウ。是ヨリ祈リ奉ル。ザンゲサンギ六根清浄、センニヤクニヤ、ホツツボ大師、悪念悪相一時ニ消メツ、悪業ヲ積メバ美人皆是レ鬼トナル。善行ヲ施サバ、衆生皆快楽、オンバサラ〳〵ソワカ、元ノ女ニ返シテ玉フゾ
女退リ鬼出ル
ダダダチキ々々々々、ヨエサアハエサー、ブウぐ〳〵ジャクぐ〳〵
△南無帰命礼、悪魔降ブク、三世一体、金剛蔵王大権現。ブウブウジャクぐ〳〵鬼倒ル、修験一服休ム
姫出ル、鬼面ヲ受ケ取リ、一週(ママ)シテ共ニ入ル
ソハライ〳〵　ヤー

十八　御神楽

△謡　ミソマヒソメシ立チソメシ、神ノミカグラ、神ノミカグラ　ヤー
△カナメ石、鹿島ノ神、神ノミカグラ、カミノ御神楽　ヤー
△鳥ノ海クスシキ神ノチカヒゾヤ、天ノ鳥船通ヒマスラン、通ヒマスラン　ヤー
△御神楽ヤ、イチ立チソメシ立チソメテ、神ノ御神楽、神ノ御神楽　ヤー
△榊葉ニ、ヌサトリカケテ神ノ舞、歌ヘバ開ク天ノ岩戸ジヤ、天ノ岩戸ジヤ　ヤー

十九　猿番楽

（註）詞章の記載なし

（高山　茂）

（八）鳥海山日立舞（横岡番楽）『郷土藝術　日立舞』

（表紙）

郷土藝術
日立舞
横岡芸能保存会

○口上わたり

一、打てばなる、打たねばならぬや、このつゝみ、心でならす、心しらべて、心しらべてや
一、しゝまひの、笛と太鼓は急げども、花のや舞、舞はしずかに、舞はしずかにや
一、山ぶしの、こしにさげたるほらの貝、ひと吹き吹けば、国をゆるがす、国をゆるがすや
一、御鳥海の、みたらせ川のやそこみれば、石のやまさご、黄金花咲く、黄金花咲くや
一、この村に、泊まるとすればや日も高く、やらずの雨、七日ふるもの、七日ふるものや
一、日はくれる、舟は急ぎし最上川、男鹿までとほす、白糸の滝、白糸の滝
一、ふだらくや、岸打つ波のや、みくまの、、なちのを山に、ひゞく滝ぢせ、ひゞ

く滝ぢせや
一、けさ見れば、つゆ岡寺のやにわのこけ、さながらるりの光なりけり、光なりけりや
一、横岡めらし、め丶もきりよをも良けれども、せ中のこぶ、玉にきずなる、玉にきずなるや
一、おまら様、かみはあれどもくしいらぬ、まなくもないども、穴をみつける、穴を見つけるや
一、横岡めらし、め丶も形も良けれども、しよぱくてこまる、しよぱみなをしやれ、しよぱみなをしやれや
一、まんこは舟、さねはほ柱おしたて丶、七つの海、天の岩戸を開け、開けや、や

○ふりこみ

一、まいて来て、これのおにわにふりこめば、黄金のつる、おしめからまき、おしめからまきやー、やりやおもしろ、足にからまき、足にからまき、やー
一、扇とる、たぶさのいなにわとり立て丶、及ばぬ枝、たつの白波、たつの白波、やー
一、十七、八、赤いたんなわ、だれももつ、今はやりの、そめわけのたな、そめわけのたな、やー
一、おがめやおがめ、四方ちようらいおがむれば、いかなる神、神も静かに、神も静かに、やー
一、びしやもんや、左わきざし、ぜいにしろや、やいばの太刀、ぬいでさ丶しよをや、ぬいでさ丶しよをや、やー

○五拍子幕合

一、からかみさんちよや、鳥は天どぶ、ちよをせとぶ、空とぶ鳥、羽をのすよに、羽をのすように、やー、モータ〳〵すのやかにもたや、ハーエンヤサ
一、うたへや、だんのよつだのすみには、ごへい立て丶、うたへやまえ、風おさむろや、風おさむろや、ヤー
一、し丶まひの笛と太鼓は急げども、花のや舞、舞は静かに、舞は静かに、やー、ヤリヤおもしろ、まいはしづかに

○神舞

一、おがめや、おがめ、四方ちようらいおがむれば、いかなる神、神も静かに、神も静かに
一、扇とる、たぶさのいなにわとりたて丶、及ばぬ枝、たつの白波、たつの白波
一、びしやもんや、左わぎざし、ぜいにしろや、やいばの太刀、ぬいでさ丶しよや、ぬいでさ丶しよや

○番楽

そうりや〳〵そうりやの調子でまひ、五拍子の唄で舞い終る

○おぎな（翁ノ舞）

一、ちりりんやろや、ららりろや、なをりんやろや、ららりろや
一、おりやいづくのおきなぞや、おりやなよそのおきなぞや、おきなが先に生れつ丶、まづは先に生れつ丶、いざさらいで丶、年くらべせんよ、ひめ小松
一、ほんておきなが東の星をこんで見たてまつれば、あみだのじようどや、月高く見へまします
一、ほんておきなは南の星をこんで見たてまつれば、やくしのじようどや、月高く見へまします

一、ほんておきなは西の星をこんで見たてまつれば、かんおんのじようどや、月高く見へまします
一、ほんておきなは北の星をこんで見たてまつれば、しやかのじようどや、月高く見へまします
一、それ天じくの松代川の池のかめは、それさんじやくの星をいたゞいて、世界には四海の波をたゞしたり
一、おきながひげの長きよりも、我が君の御代の松のひさしさよ
一、空にはばんかい玉のはと、ゆのとの丶玉の湯殿にすをかけて、十二のかいこを生み育て、さやずる声の目出度さよ
一、春は来て秋行くつばめし祝い来て、にしきのほざを、をしよじろて、下にははんじよの八重たゝみ、黄金のじようどへまいらしよや
一、我等のくじやくのおきなれば、神の御前まいらしようや
一、はーよへ〳〵〳〵、おきなは、いわ〳〵、こうらいじようろ、あなたもよへろ、こなたもよへろ、よへろさへろ、どん〳〵山まで、さいだい久しくおきなの、ソラヨエ、〳〵、トウゞク

○吉田

一、吉田のんのと、つるとかめと、かんまくれいて、さい〳〵心でまかしたり、よへさつさおささ
一、つるとかめと、かんまくれて、さい〳〵心でまかしたり、よへさっさおささ
（四本カタメ）
次二口上
一、おうさいや、おうさいや、きとうまいて候、イヤイヤ
一、きとうまいてのごりしようには、きとうまいてのごりしようには、久しいことを申そうや
一、久しい事にとうりては、久しい事にとうりては、目出度いことを申そうや
一、目出度ことにとうりては、先に舞たは、おきなり、只今舞たわ、さんばさりごうにて候
一、先に舞たるおきなと申すは、背も高く、色も白く、百五万才へいたる、おきだにて候
一、只今舞たるさんばそうと申すわ、背もひく丶、色も黒けれども、先に舞たるおきだのしようぞくにも、おとらずとして
一、それはりげんにはりびようぶ、おつとり式のめんをとつて、かをにおしあて
一、それ百大百代、天ま式五かい、えんめいあんをんそくさい、この所をしつぽりとふみしづめろうがための、さんばさりごうにて候
一、それ天じくのほん立川みなかみを、のぼりて見れば、まづ一段の表は、不動のじようどうなり
一、二段のおもてをのぼりてみれば、仁王のじようどうなり。
一、三段のおもてをのぼりてみれば、しやかのじようどうなり。しやかの上に召したる、あさの衣をつく〳〵とみてやれば
一、あいきようわ、すゞの毛でおつたる、あやにしきの事なれば、ほけきようのぼんじばかりで、心も言葉も及ばずとして
一、それ向えとるつっ衣ひつきり、我等がびんひげなどにむしっつくり
一、きりきり、ちよう〳〵ともんばやし、御前の式諸人の人は、打つつゞみを打ちさせ、吹く笛も吹きさせ、とうどうと笑ひけり
一、その時、我等もおかしさに、ははは と笑ひけり
一、我等ひようしと申すは、かしまでならたば、かしまんびようし、にしまでならたば、にしまんひようし
一、上のひようも八ひようし、下（シモ）のひようしも八ひようし、合して十六ひようしの総ひようしで、とう〳〵ともんばやし
一、上をみたれば、あいそりや川とて流れくる、さい〳〵心でまかしたり
ヨイサ〳〵、ヨイサッサ、オササの拍子で舞
一、下をみたれば桜川とて流れ行く、さい〳〵心でまかした
一、浜に浜松、なぎさに千鳥しあいそでおる、さい〳〵心でまかしたり
一、つるとかめとかんまくれて、さい〳〵心でまかしたり

○やしまぢ

一、てきはむかいの舟ばなれ、てきわむかいの舟ばなれ、向の岸までいそいでれ

一、斎藤佐エ門の別当つねもとなるが、まつたけだの十郎、うちでなし、まつたかどまがえにて候が、うちでおんぱらなされようか、野に出て勝負みつせるか、何とていやはやのがしわ申すまい

○くまがい

一、くまがい二郎や、なをざねや、あつもりうたんとのつてみれ、ヨエ〳〵〳〵〳〵、サアエ〳〵〳〵〳〵、ヨエ

一、くまがいや、くまがいや、味方に弓をひくのかや、「ハエ」千人つゞいて追いかける。あらいたわしや厚盛を、くまがい殿が手にかゝる。くまがい殿と名をのこす、あしたのつゆとなりにけり、あしたのつゆとなりにけり

○ほりかわ

一、南あらしの北しぐれ、南あらしの北しぐれ、はいそりやそりやとも、いそがれたり

一、静かのすがたを花として、今だ秋にはあらねども、う月廿日の事なるに、天下が祭とさきかゝる、「ハエ」色々の草花を、らいげんしげるばかりなり。「ハエ」にしきをさらす如くなり、「ハエ」にしきをさらす如くなり

一、御前にまかり立たるつわものわ、いかなるものと思らん。かたぢけなくも、伊せの国、せんじがむすめ、すゞがとは、みづからまこと、はんかいのいきおいを、はらすともあますまいと存じ候

一、鬼人は、そのよきくよりも、にっくきわっぱのよいことかんで、きんばをかんで、こぶしをにぎつて、いさみにいさんで、かゝりけり。

一、鬼人も打ちほろぼし、心にかゝる事もなし、もろやに花を咲かせたり。我家をさしてかへりけり

○田村

一、南あらしの北しぐれ、南あらしの北しぐれ、はいそりやそりやともいそがれたり

一、御前にまかり立たるつわ者は、いかなる者と思ふらん。かたぢけなくも、世治天皇がひごし奉る、いなしの太郎年秀がこのちやくし、いなしの田村時宗と申す者にて候が、或時、君の世治にて、せいしゆうしづか山の立えぼしと言ふ鬼人を平げし年、安全になすべきとの君の政治なれば、鬼人はへんげの者なれば、日頃祈りし清水に、いしようあらたにこうむりて、鬼人打たばやと存じ候

一、なむやだいしの観世音、だいしだいしの観世音、日頃ありにし早ばたの、こんどりしようやたんでたまへ、ハアー。しゆうじよう再度のたねならば、鬼人を打たせしたんまへかし、とてもかなわぬ事なれば、鬼人を手に入れたんまへかし、南無やだいしの観世音

一、そうそうにも、いそぎ候へば、せいしゆうしづか山にもいそぎ早と存じ候

一、そうそうにも、いそぎ候へば、せいしゆうしづか山にもついて候が、いかに鬼人聞きたまへ。汝落すべきにはあらねども、かたぢけなくも、政治天皇がしゆごし奉る、いなしの太郎年秀がこのちやくし、いなしの田村時宗と申す者にて候が、ある時、君の政治にて、汝を打たんと打つてに差むけられし君の政治なれば、内でおんぱらなされようか、野に出て勝負めつするか、なにとていやはや、のがしは申すまい

一、エー、鬼人はその夜きくよりも、にっくきわっぱのこわっぱめと、きんばをかんで、こぶしをにぎつて、いさみにいさんでかかりけり

○とり舞

一、みかぐらや、いつたつそめしや、かみのみかぐらや、おもしろや

（同じ事、四回となへる）

○一人もちつき

一、ありやすっさい、ありやすっさい（四本カタメ）

唄　何処からきた、何処からきた

まい　地頭様から、もちつきたのまれてきた。大台所ほんだか、小台所ほんだか

唄　大台所もほんだし、小台所もほんだ

まい　小豆ふけたか、もちねたか

唄　小豆もふけたし、もちもねた、こわいても一うす、たのみます

一、ありやすっさいの調子で、四本カタメで舞

○たろたろ

一、たろたろ〳〵、やー、ばんがくたろ、すなごきたろ、やー

はよへそりや、はいそりや、よへそりや、そりや、と笛と太鼓の調子で舞

○三人立

一、きんめにはしめて、おんがむれば、さいごのまつりこそ、めんでたけれ

一、はありやすっさ、よへわすっさ、ありやすさ、よへわすっさ、よへ〳〵と三回

一、最後はふりこみの唄で舞

○やしま

一、ここわ、やしまのうらとなり。ここわ、やしまのうらとなり。はえ、そりや、そりや、ともいそがれたり

一、ここわ、やしまのうらとかや。すえのいとまも波の上、浜の小舟のかず〳〵に、のりてはよそにしらすまい。雪ふりて、きりはれて、うら風までものどかなり、はるや心をさそうらん、「ハエ」はるや心をさそうらん

一、表のやぐらにはせあがり、表のやぐらにはせあがり、我身をつぐ〳〵見たんまへば、え、おばおらんと見たりけり

○影清

一、きめいにはしめておがむれば、きめいにはしめておがむれば、はい、そりや、そりや、ともいそがれたり

一、影清や、影清や、妻のあこやにたばかられ、我妻をお寺参りをもせんども、寺には行かず、かたきの中に影清や、居たる座敷をゆらとたち、表の門に出て見れば、敵は大勢によせ来たり。元の座敷になをりつゝ、兄のいやえし近づけて、これに参れとごじよもなし。弟のいや若近づけて、これに参れとごじよもなし。いやえしも、いや若もひざの上にといだきあげ、おくれのかみをなでなであげて、明日は庭の小石も起すまえ。色ある花もつみもせず、びようぶにすみ絵もかきもせず、たゝみのへりもよごすまい。あこやばかりのさいごなり、あこやばかりのさいごなり

○重藤

一、きめいにはしめておがむれば、きめいにはしめておがむれば、はい、そりや、そりや、ともいそがれたり

一、お前にまかり立ったる者ようばいかなる者と思召し。それこの国の住人、伊波の重藤と申す者にて候が、影清や、影清や、内でおんばらなされようか、

野に出て勝負めっするか、何とて、いやはやのがすは申すまい

一、まつたしばらくたゝせたもうや、まつたしばらくたゝせたもうや、なにとてのがしは申すまえぞ

○ゆらゆら

一、よら、〱〱〱〱〱〱、やー、さあへ〱〱よへ、よへ、よへ〱〱よへさっさの拍子で四本カタメ

○さるばんがく

一、ばんがく太郎や、ばんがく太郎や、いわやにこもつてばんがくつねこそ、めんでたけれ

○団七

一、敵は向の舟場なり、敵は向の舟場なり、向の岸まで急いで出れ

一、姉のみやげに妹のしのぶ、父の与太郎が団七に切り殺されし無念さに、忘れ兼ね親の仇を打たんとて、花の東にのぼられて、由井正雪が弟子となり、「ハエ」姉のみやげは、じんがまよ、妹のしのぶは、なぎなたよ、五ヶ年間習練して、今は早、仇に出合ても不足なし。花の東をまかり立ち、「ハエ」仇のやしきにいそがるる、「ハエ」仇のやしきにいそがるる

一、急げば程なく兄弟は、仇の屋敷になりぬれば、汝がために打たれたる与太郎が娘、姉のみやげに妹のしのぶ、出で合ひ勝負なされよと、大音声にてよばわったり

一、えゝ、団七その夜聞くよりも、こしゃくな女の子わっぱめいと、刀をぬいで出かけたり

○さつま

一、さつま〱や、ありやさつま、さつまや

まい　さつま、さつまでば、だれだはや

唄　だんなの庄屋や

まい　だんなの庄屋、またなにしにきたなや

唄　最上の新庄さ、馬喰労しや

まい　やれ〱、馬喰労などやめてくれ。おれも若い時、馬喰労して、おかもないかまどぺろ〱すつぽりなくしてしまつた。

唄　今日おら方で、盆の十三日でしゝまいまった所だ。ぼ様、若い時、大そう物語上手であったそうだ、一つきかせてくれ

まい　物語　めゝより美人に、しやくをとらせ、のんだり食ったり、ふうき万ぷく、さかへたるの物語

唄　大そう上手だもんた、もう一つきかせてくれ

まい　物語　わらにをのかげからへへ下手な事を申し出た、かのさねもりが様々にわんびしたれども、かのきんたまがききいれずうてや、たゝけや、おしこめれや、へしこめれや、えんちやほんかんの物語

唄　上手だもんだ、ぼう様、若い時うたも大そう上手であつたそうた。若い時の元気出して、一つきかせてくれ

まい　得意のうた、二つ、三つきかせる

唄　秋の日、長い〱といふても、大ぶん日かたかたえだ、帰へる支度にしたらよかろや

一、さつまさつまの拍子で帰へる

このまひの中に、うばまい、といふのがあったが、今はなく文句だけのこっているので、かいておく

むすめ三人もつたれば、山方のむすめから、うばにやこえとのことづけだ。おてや〱とて、ふるしきつつみぶっしよて、きりきりじようりにまつたいぶり、すつぱりやつぱり行つたれば、おうばきたかとて、横座にちやんとなをさ

れて、山方のならいだとて、しよぶきめしちやかして、おくばでかんでももく〳〵、前ばでかんでももく〳〵、ごしやばらしや〳〵げてごえり立つてきたれば、浜方のむすめから、うばにやこえとのことづけだ。おてや〳〵〳〵とてふるしきつつみぶっしよて、きりきりじようりにまつたぶり、ずっぱりやっぱり行つたれば、おううばきたかとて、横座にちやんとなをされて、浜方のならいだとて、去年のたらのたらかしら、今年のたらのたらかしら、おくばでかんでもがき〳〵、前ばでかんでもがきがき、ごしやばらしや〳〵げてごえり立つてきたれば、里方のむすめから、うばにやこえとのことづけだ。おてや〳〵〳〵とてふろしくつゝみふしよって、きり〳〵じようりにまつたいぶり、すつぱりやつぱり行つたれば、おううばきたかと、横座にちやんとなをされて、里方のならいだとて、えものこしるに小豆めし、一杯食つてもたらわない、二杯食ってもたらわない、三杯食つてもたらわない。四、五、六、七杯もおくらつて、こばらつらくて、はたごたてゝねったれば、あーかい、ちやかいちや〳〵やたてゝかけばすぼまる、よこでかけばはだかる、あー、かいちや〳〵〳〵や

○やさぎじし

一、やさぎじし、生まれておちる、かしらふるもの、かしらふるもの、やー、はよえ〳〵〳〵

一、あつぱれしようは、ひようしをそろへ、うたのかけそめ、うたのかけそめや

○わらびおりの女郎

はしまる前に唱へ事あり

熊野三社大権現、こんたい両部の大日大りよう権現、鳥海山るりこう薬師如来（トナエテ以下九字ヲ切ル）

おんころころせんなりまとおぎやそわか、みかぐらや、いでたちそめしあさぼらけ、かみのみかぐら、かみのみかぐら

これより、まひにうつる

一、あすわ、ぎをんのまつりごと、いざさら出でゝ、わらびおり

一、さんにえ、あげてみれ、あげてみれ、おもしろや、おもしろや「イエイエ、よさ」

一、さんにえ、かゞみみれ、かゞみみれ、おもしろや、おもしろやな、は、いえ〳〵よさ

一、さんにえ、たゞしおれども、たゞしおれども、おもしろや、おもしろや、いえ〳〵よさ

唄　われも二人のおやをもち、年より弱くかたむけば、しゝのひたいのねなしぐさには、ちぎりとならせたのむぞや、しよう山の山にわらびおりにと出たりしや、いまわこれまで出たりしや

翁　あらこうむこうのきしわにたちきたる、ようぼうめゝ美しく、こめじろこまめにたつしたるは、伊勢の神路か、そとおりひめのことにて候や

女郎　われつくしぶんごの国、なにわや長者のひとりひめの事にて候が、ある時おやのねがひにて、しよう山の山にわらびおりにと、けさ出てこひしこの川、おうらいさんに水まして、舟はあれ共かいさな、かいさあれ共船頭なし、なにとぞこの川一時（トキ）にさしこして、たびたまあらんかや、じおうらんどの

翁　あらじおうらも年若き時、花のいかだもつみくだし、舟にすぎさりじおうなれど、今、年よりて、かたこしよわく候ほどに、余の若き方をばたのむべし

女郎　余の若き方とて、たのみ方はさらになし。なにとぞこの川、一時にさしこえるのうれしさに、じおうらが上に召したるあさの衣を、そゝいで申すべし、又、一日一夜のつまとも定めるおかや

川コシ　七十に余りし八十に近よる、ぢおうのさすさを、心は行くやら、舟の早さよ。心しづめてほんのりやろ、月のかげさす、くもとなる、水には影うつれ共、年より舟なら舟もまんぞく、まんぞくに、むかいの岸わにさしつけ候ほどに、これよりぢおうらが、うらのやかたにて、しんず〳〵と、おんのりなされ候

女郎　あゝら、ぢおうらにねがひこと御座候

翁　それは又いかなるねがひことにて御座候や
女郎　あゝら、おやのねがひをとゞけたいとのうれしさに、三日三夜のおいとま、たびたまあらんかや、ぢおうどの
翁　あゝら、ぢおうらも、今、年よりて、一日は千日に向ふべし、又日もけっけいとしらするに、ひいて一日二日三日、いやはやなれや申さん
女郎　さらば一日一夜のおいとま、たびたまあらんかや、ぢおうどの
翁　あゝら、おやのねがひをとゞけたいとのうれしさに、一日一夜のひまをばとうらせうほどに、これよりしんずしんずと、おんもどりなされ候
唄　ありがたさやら、うれしやら、なみだをあげてかへりけり、なみだをあげてかへりけり
まい　ほーい〳〵、ほゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
唄　どこからきた、どこからきた
まい　こったい山からきた、こったい山からきた。こったい山で、ばゞ一人もったれば、そのばゞと申すはゞわ、おうぢやくらいのたかぢやくらい、年中一匁二匁の茶ばからまくらって、あっちの人来ても袖ひっぱり、こっちの人来ても袖ひっぱり、ぢやぢやでばやゝのや、今日あたりのよい空にや、山に木切り行け〳〵と、木を切るばおく山〳〵、かやを刈るば、前山〳〵、前山のはたでかさもさかさもさとたづねてみたれば、大きたいつきの木の白枯めろ〳〵〳〵とつったてた、こればゞさもつて行つたら、なぼかよろこぶでら
唄　それよくしらべてみたらよかろ
まい　頭と申す所は、いぼしなりして、まなぐだと申す所は、うろうろ〳〵とわして、はなだと申す所は、ふが〳〵〳〵とわして、口だと申す所わ、十七、八の穴ばちあげだてのように、ぽっかりしたもんだ
唄　それよかつた、まさかりの支度して来たが
まい　そのまさかりと申すまさかりは、このあたりのかぢうったまさかりではいかないと思て、酒田の寺町の、左かぢのびつこかぢの、めっこかぢのさもじろかぢのうつたまさかりもつて来た。これで切つたら、たまろまい
唄　それでも秋の日、長い〳〵たて、ひるげにしたらなへだ
まい　ほゝ、おらへのばゞめしよがざめしさかてかけて、こうの物など、びっきのすゝづけ、みゝずのくきづけ、こんたもの食われろば、山がらす、山がらす、ほゝ、年よりひるめしも食はねで、ろくだ仕事もならないたて切ってみる。若い者、太鼓のひようしで切つてみる、ほゝいく〳〵、ほういく〳〵
唄　切るにや切ったども、荷なわの支度
まい　おれ荷なわと申す荷なわは、まめだぢやなわないで、せやみだばゞさいわらのがさ〳〵でなでかさもさ〳〵となつて、馬屋のませさふわりかけておいたば、出戸この浜からべごこ出て来てぺろ〳〵、すっぽりなめてしまつて、ふつかたがてみたれば、ばゞ切れふんどしのいわごやらぢや切れ、こしまきの下でやら、ゆっつけ合わしてきたなだ、これでしよつたらたまろまい。若い者大鼓のひようしで、ほういく〳〵〳〵。ぼんのくびと申す所からすぺ〳〵〳〵〳〵とこけてきた
唄　それまさかり切れないだからよくさがしてみれ。それごぼねもあるでろ、さがしてみれ
まい　ある〳〵、ごぼねもある。あっちや一本めろりん、こっちや一本めろりん、中のごぼねなどうわばみながまたえだ、めろ〳〵〳〵〳〵としたもんだ
唄　これまさかり切れないだとの支度
まい　おれと、申すとは、あたりたかくて、中ひくゝ、とげばとぐほど中から白水どぶやどぶと出るとだ。若い者、太鼓のひようしで
唄　ありや、といだ〳〵や、こりや、といだ〳〵や
まい　こんどてこんど、あみだまつ代、しやかまつ代、からすのあたま白くなろば白くなれ、だをのあたまくろくなろばくろくなれ、石地蔵のけっつくさろばくされ、としよったら一つはなさない
翁　しんず〳〵と通らせ人は、何人にて御座候
まい　木切り
翁　木切りとは
まい　しば刈り、やれ〳〵、しば刈るつびもしらないもの、どうりて天のひるま中、二度、三度、おれにやしよわれた、それにつけてもことづけだ。おとといのあ

さま川ごししてもらて、なたぢけなくて、かたぢけなくてなへでもない。くえ
三本ふっちがえて、ぼたわら三ば、ばっち合わして、川の中からめろ〳〵くっ
ちやりとのことづけだ
翁　それはまことかや
まい　まこととも〳〵。おれ生まれてから、ない事ばかり言ふて、ある事のさっ
ぱり言はないおれだ
唄　それを思へば今くやし、おやが言ふにも子が言ふにも、女に心を許すまい。
今ははや、かいもさをもおりすて、この世であわねば来世のみ代の、みだの
じようどてあをうぞもの、みだのじようどてあをうぞもの
まい　ぢや行く〳〵。行きたいから行きあがれ、こんどてこんど、わらびおりの
女郎ぢやもんだ
唄　それぢやもの、よいども、若い時大そう歌など上手だふだしよんで、こぶし
の一つもきかせてくれ、ずっぱりはりあげて
まい（うた）ありや出た、こりや出た、横根が出たとなコリヤ〳〵、横根なを
しのな医者こひし、のんのこサイ〳〵
かのし、は、いわのがんけさひるねして、またぎきたとて、ゆめ見てた、のん
のこサイ〳〵
女郎　春の日和のかぎわらび、おれどもおれども、手にはたまらめ
唄　どんどせんど、三蛇のすがたにあらはれけり、ぢ翁の思ひは今来たり、ぢ翁
の思ひは今来たり、はっ、そりや、そりや共いそがれたり

○からうすからみ

一、秋田音頭です、いずれこれより、ごめんなこうむり、音頭のむだを言ふ、お
耳ざわりもあろうけれ共、さつさとだしかける
一、さんば笛の調子で、三回、ちよらりろら、、ぢよらかやつさい
一、伊勢音頭
伊勢はない、津でもつ、津は伊勢でもつ、おわり名古屋は、やんさ城でもつ、せや、
やとこせえや、よんやな、あら、、これわのせえ、さ、なんでもせえ
一、うすひき
うすひきたのだば、ばゞどこたのだえ、ばゞもわかい時なぼよかろ
又もかへしてうすひきあらば、こんなくろうはせまいもの
うすもあたらし、ひき手もわかい、もみわふるもみ、ひけるもみ
うすもひきあげた、もみもないし、あがてやすどない、やすどない
五合と五合は一升ぢやないか、一升とさだめて、今まさらどうする
一、はと
はと、さえ、はと、にわとりと遊びに出たば、はとは豆食し、にわとり米食、
そこにかいどうに、ぜにが百おちた、はとは拾たとて、こっちの方にひっぱる
やら、にわとり拾たとて、あっちの方にひっぱるやら、はととにわとりとあら
そひおきた、そこにありどがもそらやと出はて、われだ何をする、おれがわけ
つける、はとわ八文、にわとり二文、あとのさえ、あとのありたけ、ありどの
もうけだなえ
一、とりさし舞
おくの山の青木の枝に、とりが一羽くついた、ありやにくいとりだな、なんと
さえづると、たちよつてきけば、のろすけほしせ
右のはねを、左のはねを、はねをとつてくれろや、はねをとつてくれろや
このもつくにがんまへて、ふるしもちおば、もと方にすっこいて、あたらしも
ちおば、先のほうにぬだくて、かさめしよかろ、かさめしよかろ
だいぢ〳〵、あけるはだいぢ、だいぢ、だいぢ
千秋万世、福の止り、よそにわやらずと御退散

（高山　茂）

（九）荒沢番楽『舞子案内』

（表紙）

舞子案内

（一頁目欠損）

此世常世ノ闇トならせ□□、其時八人の花の八乙女、五人の神楽男、テイトウ颯々鈴のこえと諸ともに、岩戸の前にて打はやさせ玉ひハ、天照太神宮国土に面白事有やらんとて、妻戸すこしあけさせ玉ひハ、其時戸隠の大明神、天の妻戸三間とりて推開、月日共に出させ玉ひハ、国土安全今の代まで治リ候事の御祭相学候獅子舞なり

此獅子舞の祈ル事、天下泰平国土安穏五穀成就、いか成天魔厄神も相のかれし御事ニ御座候。

獅子舞を習ふ者ハ、不精進にて習ふべからす、随分身を清メ天照太神宮、八幡大菩薩、春日大明神ニ祈誓ヲかけ、相勤候よふ本海坊被申候事。神代神楽の流を酌し晩楽なれハ、国の祭り、家の祭りとも可相成事ニ御座候間、御見物の御方左様思召可成と本海坊の被申御事

以上

岩戸開

あさ姫の照しはしむる国分寺、四方の神々舞あそぶ

沙門

斯ふ前に罷り立たる者ハ、いかなる者と思召。われこそは伊勢神明天照太神宮の御子にて候。いさなき、いさなミ、伊弉諾にハ月日の相を持たせ、伊奘冉には神の相をもたせ玉ふ。神の相を持へきもの丶無甚とて、月日の相を持へきもの丶世の中に、伊勢の国高天原の山田森に日月共引籠られ、此世ハ常夜の闇と成りて候。其時七搦のふきを集メ、閻浮檀金の金をもつて、厚ミ四寸廻リ八尺の唐の鏡を鋳奉れと、其甲斐ハ更になし。其時八人の花の八乙女、五人の神楽男、青銅鈴の諸声に、七日七夜をうちはやし、天の岩戸おし開玉ひハ、此世東しらんて見へ玉ふ。其時又花の八乙女、五人の神楽男、青銅す丶のもろ声をよりあけ引あけ、七日七夜を打はやせハ、世の中に何やらとて天の岩戸を少し其時、戸隠の明神、中の間三間推開、昨日迄も今日迄も常夜の闇と成ッて候。今日は一偏の白妙の日となり、上中下の人々ハ御しつまれや静まれや、よきよふに御聴聞なされ

翁幕出

きり丶や。たらりらんかと。とう〳〵たらりらんかと。われも何所の翁そや。翁や先きに生れすや。先ッや先に生れすや。いさ〳〵出て年競べせんや姫小松。鶴の千歳、亀万却と諷ウたりや、彼おきなり

中言立

花の色春咲き染る夏のよし、秋実なる冬迄も、身ハおとらんす、たのしむこえの目出度さよ。春ハ来て秋ハ陸條の燕鳥、彼殿の玉の湯殿に巣を掛て、十二の飼子産生立ウミソタテ、囀ル音モ目出度さよ

彼翁ハ東の星を拝んて見奉れハ、薬師の浄土も月高見へまします。さつて南の星を拝んて見奉れハ、観音の浄土も月高見へまします。さつて西の星を見奉れハ、阿弥陀の浄土も月高く見へまします。さつて北の星を拝んて見奉れハ、釈迦毘沙門の浄土も月高く

空にハ白蓋玉の幡、下にハはんしやう八重畳、錦の御座をしづろふて、金子ノ蝶

に舞遊ぶ

それ天笠の跋提河の池の亀は、それ三宿の星を戴き、見奉シ額には四海の波を湛たり。峯の松風颯々と、谷の砂ハこは磷々と、万代の言の葉も妙に伝ふたりや、歌ふたり。扨彼翁ハは髭の長さと、わか君の御祝ひ、千代や千代と御万歳に勝れたり。さつて彼翁は目出度ことを申そふや。上にハ天長、下にハ地久、五願円満息災延命と踏ミ鎮めん

四番　三番神

吉野に〳〵どんと、落ルハ滝の水、日か照とも〳〵常に大山鳴ハは淹の水、鶴と亀と戯て幸こゝろにまつかしたり

中言立

東方南方西方北方中央に向ッて、きり〳〵きりつと舞ッて候。されハ目出度き所には、目出度事をもふそふや。久しい所にハ、久しい事を申そふや。されハ先にまいたる翁にも劣らんとて、只今参たる三巴猿子ハ、色も黒く勢も少く、蹋まつてハ候得とも、大紋のさしぬけに徳斎行坊の打たる式の面を取りて顔に当、額には四海の波をたゝへ置く。されハ向へ通らせ玉ふ、地蔵菩薩のめしたる葦毛の尾を取りて髭鬢なんどと存候。きり〳〵きりつと舞いて候ふ。されハ此所に百世百代の千代御万歳か間、地をしつとゝ踏しつめんか為メに参らいて候ふ。先に参たる翁にもおとらぬ、只今参たる三巴猿子ハ勢も少く色黒く、せく、まつてハ候得共、大紋の差抜にはりさい行坊が式の面を取りて面に当、四海の波をたゝへ置。されハ向へ通らせ玉ふ地蔵菩薩のめしたる葦毛の尾取りて、そのあたりはねあるく、てんくろなんとの尾とつて鬢髭なんとの尾さため、きり〳〵きりつと廻りて候されハ式上人の人々ハ打鼓もうたさす、吹笛もふきさせす、どふ〳〵咄とわらハせ玉ふ。われらもしらす笑ッて候。いや〳〵笑ふよふハ、シゝイ、ハゝア、ホゝフとわらつて候。是も時の狂言、われらはにしま生立の者なれハ上の拍子も八拍子、鹿嶋生立の者なれハ下の拍子も八拍子、合して十六拍子の秋の田の露の靡ことくに一ト〻まひまつてもとろと、五拍子を頼む。切イヤ〳〵東西〳〵打ッた事も打させ、吹た事も吹させ、とふバういんの水車たやはやさんとハもうせとも、四ッの草葉にはやされて、壱更程ももふそう。上を見たれハ桂川とて流たり。下を見たれハ藍染川とて流たり。冲の鴎ハまハるよふ。□ニ千鳥の歩行よふに、ざつと廻れや、舞戻ス〳〵

鳥舞

伊勢の国高天原に神遊あそふ、諷ハひらく天の岩戸ハ〳〵
天の岩戸に神遊ふ、あらハれ玉ひや天照太神〳〵

七番　衣更着

立来浪ハさつ〳〵と〳〵蹴立〳〵南無御神体とハ現ハれたり

中言立

神宮皇后八幡山のことハりハ、有かとおもひハ、彼白雲にさつと居合候。世に〳〵ふよ思儀と存候。我こそハ本地八播大菩薩の御神体にてましますか。結跏趺坐に座を組んで、日本六拾六ケ国只壱ト目にえんやさあ

拍子

衣更着や、初卯の神楽おもしろや、諷や〳〵神の誘ふも返ス〳〵も歌ふたり。実に〳〵忘て有り。実に末世と有なから、数有ル玉のいとふの印、獣類翎松吹風も南無御神体とあらハれたり　切

一人晩楽

旅の衣に露なきつゆなき袖をしほふらん

九番　地神舞

神々や深き遊ひし、あそふにハ、笛と拍子を打揃ひ、いさめし神ハ舞あそぶ

暦の舞

五番　念（事）

白雲や峯の通ひ路花散りて、嵐ハ雪を誘ふらん、雪に戻レハ山人の〳〵、嵐ハ雪を誘ふらん

中言立

抑念じかさね楽しミの上に、ウイテ遊へは只仏神の誓なり。向ふは三年か間にて、されハ女は五濁に逢あふけハ守ル誓ハ弥々心ナ増。それ三十三度の大願の條々極ル所にハ、我等住し遊ひし里の名ハ、門トを出れハ朝日さす、出羽のき浦咲乱、若葉の松や津の国の、なに浦や難波か浦の長者とハ譬ハ此方の事を申候。三更四更の夜も更て、五更の天も開れハ、いサ同道、下向道に趣て古き人を呼出し、和歌の遊を申さはやと存候

拍子

酒ハ万事の薬となる、憂を忘るゝたのしミに、只飲酒に毒入て、又のむ酒に毒さるゝ、酒は薬となるものよ、千代世迄も目出度さよ

同

いましめて又あるに、斯てその夜も更行と御睡眠なく、通夜を申所いかはかりにも、瑞相をかふむりてハ御入候。八旬に余りし彼翁を三十斗になさんとす。三十斗りの女をハ、二十はかりになさんとす。ケ様なる御夢相を蒙りてハ候得共、空言にてハ候まし。斯て此事空言にて下らせ玉ふ程事ならハ、我朝におゐてハ源氏実方、伊勢小町そういふもむかし人

同

立寄り近付れんとすれハ、それも長者の久しさよ。鶴亀やく〳〵、あの松の翠にて浦嶋か玉手箱、開れハ老の山となる。閉れハ後も近なる。壱より過てハ若くなる。二より過てハ若なる。盛りの花を見るに付ても、千代世迄もめてたさよ

扇の的

よふく〳〵急き行ほとに沖の潮屋に着にけり

中言立

源氏と平家と境の的、立はやなんと、存候。陸にたてハ珍しからぬ。沖の潮屋に立る的をハ、浪に浮んす沈んそせし程に、なミの上にハ筏をむすひ、筏の上に立とも聞て有ル。実にく〳〵忘れて有り。奈須の与市九郎宗高ハ、弓にハ小兵なれとも、てまつ人とも聞て有ル。いさく〳〵廉的ほとなくゐとらせもふさはやとそんし候

拍子

源氏と平家の境の的、源氏の内神正八幡まんむり玉ひと、重藤ゆんミの真中をよつ引しめて、兵と放せハば廉的ほとなく射とらせ玉ふと存候。常陸の国には八百八町重て酒代に玉ハる、主人なる社目出度さよ

曽我幕出

曽我の反橋打渡り、冨士野、しそに出にけり

中言立

曽我の十郎五郎兄弟貳人の者なりしか、昔し業平ある時吾妻下りて、時ならん雪をハ鹿子またらと詠めつゝ、夏野、鹿をからめん迚、冨士野、裾に出て有り。聞は鎌倉の人々ハ、近国隣州之者迚も、雲かすミの如くに靡ハ、浮嶋ケ原のきさき迚なひけ洩たル方ハなし。靡洩たル方ハあらは迚、父をハいどこに打れし思ひの色、景色に流るゝ、惣なミた、泪の露とも聞て有ル。埋火の浮て甲斐なき身を持て、十や二十や余りしや、親の本望遂んとて、野に伏し山に隠れつゝ、敵の通ひ見ル時ハ、敵ハ大勢なり、古郷の曽我に帰り、かたき庶ミ大力はや七日の牧狩にもなりぬれハ、男鹿か二ツに目か壱ツ、三頭つれて打来り、

妻手の三家の其中に、大かしはんかひの直垂に、脇ふかくとかせ行騰ニ烏黒なる駒に打乗たる両式者

拍子

尋て聞ハ敵の祐恒なり。祐恒と見るゟ、以来嬉しき心にそゝろうき立、聢と鐙をもみ合、弓持あけて引んとすれハ、中陰の極メ哉、伏し木に駒を走かけて、ヤア屏風帰しに伏し、駒打引上乗らんとすれハ、敵ハ馬武者物あへはるかに見へたりけり

切

ケ程少なき親の中陰とふかと、我等兄弟二人して差違んとハもふせとも、其時武持の重忠一首の歌にもれんしあり。又つく色つく紅葉葉を見て、其日の明の夕暮を待て、問ひ帰ス一首の歌にもれんしたり

拍子

其日も夜半になりぬれハ、持ッたるテンダイ打振り〳〵祐経屋形に忍たり。ヤア斯て敵ハ打たりしか、頓て御所にと帰り来ル

潮酌

塩地遠く鳴海潟、女ハなるめかた、門ンハは松風さし来ル。潮を酌上て見れハ、月社桶に有り。女浪男浪を分除て、さし来ル潮を酌上てめれハ、月社桶に有り。ヤア夜ルの車に月を乗せて、後ト引浪にゆられなから、又来る浪に失にけり

山神舞

八番　女舞幕出

親の為メ折ル小蕨ハ、去年の古雪群消て、霞かゝりて春々と、急行社たのもしや〳〵

中日立

われもふたりの親を持、年闌よはひかたむけハ、峯の額の根なし草、かろき大身のいたはり頭巾、上ケ限りとならせ玉ふによりて、四方山に分行て蕨折に来りたり。今ハ此迄来りたり。恐ろしや四方の山路を見わたせハ、去年の古雪群消残りて、未タ見ぬ思氷の内の鉤蕨、壱筋折も親の為メ、二筋折も親の為メ、思ひハ苦ウ更になし。子また親に孝行有り、子に又親ハ孝ハなし。偏に恋しゐ此川を、蓬莱山にまし出て、舩ハあれ共舩頭なし、舩人あれともかゑそなし。何迚此川を上ケハ槽る、瀬ハなし。岩うつ波ハ寄りてハ戻れとも、何と我等ハ戻らさるらんと身を静めしつ我か古里をほの〳〵と見渡ハ、霞かゝりてはる〳〵とヤアラなつかしや。なつかしや思案とや

祖父王

今朝の嵐ハ白虎はけしい候に依て、舟場の舳へに立寄りて向ひ歌なんと、、詠めはやとそんし候

女

向ヒの汀に立せ玉ふハは、祖父王殿にてましますか。此小川を舩壱棹さし越たひ玉ハれや

祖父王も年若時ハ三双の花の筏を積下し、今ハ年闌齢かたむけハ、手膝もかひのふ候によりて、余の若き方御願候得

余の若方とて頼へき方も更になし。祖父王ハ此川を舟壱棹指越たひ玉ハる程な□□□、祖父王殿の上に召したる麻の衣をすゝき可申にて候

それハ女の誠かや

舟の越ル嬉しさに、祖父王との、仰にしたかひへくにて候

夫レハ左様にましまさハ、向への汀にしんす〳〵と御乗そふらい

祖父王ハ舟を越ならハ、年立舟に〳〵向ひの汀に着にけり

越付参らセ候に依りて、舟の内にしんす〳〵と御乗りそふらい。うつゝに余りし老の身ハ、末の頼もはかなさよ。八旬に余りし、九旬に近く祖父王ハ、舩を越ならハ、年立舩に〳〵なひく嵐に誘れて、四海の波ハよりけるもの、水に影ハさしけるもの、年立舩に〳〵向ひの汀に着にけり。舩ハなんなく着候に依りて、見苦敷とも祖父王か屋形にしんす〳〵と御寄り候得

祖父王殿ニ申度事ハ御座候

それハ何事
今日三日の日間をたび玉ハれや
ヲホ人を待るハ一時二時三年、四端万事送り越よりも、また久しい候ニ依りて、
今日三日の日間ハ、イヤ〳〵叶ふましくニテ候
親の願を念する女にて候。今日一日の日間をたひ玉ひ、実もあすれハおもしろや。
それ天竺の大天狗のあゆミとなす。まつた小天狗も今日一日の日間にハ何の胡乱
かする、あら嬉しや身をもたひ兼、雨に濡、日中里に帰りたり。日中の里に着に
けり

三人立

船弁慶幕出

漸々急行ほどに、はや高館に着きにけり
中言立
かふ前に罷立たッたる者ハ、如何なる者と思召。我社ハ紀州にも隠れなき、斎塔
武蔵坊弁慶とハ扨某か事にて候。今度きけハ、鎌倉殿と御兄弟の間中を隔申たるゝ
に付、奥州に下り秀衡を頼はやと存候。はや堀川にて御立あひ十三人の人々ハ、
沖をさしてそ出にけり。最早沖にもなりぬれハ、互に梶を執直し、其日も夜半斗
になりしかハ、弁慶を近付、君の仰せたるよふハ、アレ〳〵北よりハザツト黒雲
出きたり。常の雲とは候半、御身紀州生の者なれハ、祈りもふせと有りけれハ、
弁慶対て参候、居たる座敷をスツト立、舟底にスツト入り、笥の堅箱ふたはねあ
け珠数錫杖取り出し、船の艦にツゝ立上り大音声に祈ル
拍子　言立
東方にハ降三世南方軍荼利、西方大威徳、北方金剛、中央にハ大日大聖、伊勢神
明天照大神、熊野の三社権現、羽黒権現、山々嶽々八天狗、海の上にハ船玉龍神、
只今納受垂玉ひ、如何にや申さん我君様、今宵の乱風、八嶌の浦にて教多亡し平
家の亡霊にて候ふ。斯ふ申弁慶ハ、是てかなハん者有らハ、此大刀長刀にて切は
らへ申へくにて候
番所
ヤア祈ル利生の有かたさよ。船ハなんなく跡しら浪によりふせたり

切合幕出

衆生ハ他人に付く、嵐こからし波の音、天鼓に直して夥し
中言立
禅海坊ハ内にましますか。さよふなる人ハましませす。なふと通ッ玉ふ音をハ聞
知りぬかしや申さん。先天狗の御供にハ誰々や、カクウウンミノ三勘坊、筑紫に
マナキニテソロ○マツ
てハ愚禅坊、伊豆名の三郎藤井太郎ハ父の為メとて、愛岩屋に衆生ハ他人に付く、
嵐し凩し波の音ト、天鼓に直して夥し
善海まく出
南あらしに北時雨、嵐ハ雪をさそふらん

木曽幕出

木曽義仲の御供に、よふ〳〵急行程に、北国ハ他人に付に着にけり
中言立
木曽殿や木曽御殿や、信濃を立せ玉ひし御時は、十万余騎にてまします。今出
川を通らせ玉ひし御時ハ四十七騎に打亡され、今ハはやかゝる便もなかりけり。
扨御身ハ何国の僧、木曽のおん御内にて、木曽の孫にてましますか。今ハ何をか
包へし、今ハ何をか隠すへし、御ミうちにて今井ノ四郎兼平なり。あおひ、巴、
山吹とて其レ兄弟三人あり。葵と云し兄弟ハ、暮から北国ハ多人にて討死に玉ひ、
今やはや巴ハかり御供なり。余りにあまり心ハ雨々とせしほとに、法華経の提婆
品にて兄弟の葵、山吹を吊まはやと存候
一者不得作梵天王、二者帝釈、三者魔王、四者転輪聖王、五者仏身福徳運加入

道と唱ひつ、

今田八郎幕出

よふ〳〵急行ほとに、北国ハ他に付にけり

言立

巴と云し女なり、七十五人の力なり。葵といひし女なり、八十五人の力なり。今田八郎追取りまき、必死になれと戦けり

金巻

ヨホフ、ならのはに、ならの都に着にけり

中言立

かふ前に罷り立たッたる女をハ、如何なる女と思召。我杜や雨や日や長者の壱人姫にて候。年ハ当年二十三、凡名所旧跡堂塔上方廻りハ一見仕りてハ候得共、未タ音にきく奈良の御寺によふ〳〵急く女にて候。奈良の御寺と申するハ、尊き御山の事なれハ、山ニ七に七のふ思議あり。七ニ七ッノふ思議にとりてハ、木ハ男木立とも、女木たゝす。鳥ハ男島通ひとも、女鳥通といふ例なし。鹿は男か参れとも、麀参らす。役の行海行遊も、上越立ツるいふ例なし。鐘の音信聞ふといふ事もなし。雨ふりて軒端の露の落るいふ例なし。全庭にも草生す。是て七に七のふ思議にて候

我等女人の身として、とふ〳〵御帰り候。男ハ百日の行にて参とも承り、我等女人の身として千日万日の行に何の胡乱かする。夫れハ兎もいひ角もいひ、参りて鐘をハ納んとす。諸行無常、是生滅法、諸滅々已、寂滅為楽の鐘の緒

沙門

只今の女をハ如何なる女と思召。あれ社や雨や日や長者の壱人姫にて候。年ハ当年二十三、凡名所旧跡堂塔、上方廻りハ壱見仕りてハ候得とも、未タ音に聞、奈良の御寺に参らんと言し、御寺に参り納んといひし鐘を納メ、鐘の緒に撞込られし、忽鬼神と成りて候。是を祈り出したる者有ならハ、金銀米銭宝物におゐてハ、相望のまゝとらしよふとの高札を此町に立ましよふ

幕出

熊野参詣の御客僧、泊りハ何国の羽黒山

沙門

天気よけれハ道橋街道もよし、そろ〳〵急きましよふ。急に程なく名誉希代の高札を打て有。書たる事なけれハ、読んたる例なし。読んたる事なけれハ、書たる例しなし。先追取差上拝見申さはやと存候。誠ヤラ雨や日や長者の壱人り姫にて候。年ハ当年二十三、凡名所旧跡堂塔、上方の廻りハ一見仕ッてハ候得とも、未タ音にきく奈良の御寺に参らんといひし、御寺に参りおさんといひし鐘を納メ、鐘の緒に撞込られて忽鬼神に成ッて候。是を祈リ出したる者有ならハ、金銀米銭宝物におゐて、相望のまゝ取とらしよふとの高札にて候

扨我等か先祖ヲ申せは、坂上田村麿の後胤にて候得は、全汝ハ大峯三十三度、葛城三十三度、合して六十六度の懸出の御女にて候共、我等法力にとれてハ大川を逆に流し、枯木に花を咲せ、石に貌をつけ、山中に舟を浮はせ、日中を闇とし、闇を日中と行ふほとの法力にて候得は、只今是を祈り出して上中人の人々に御めにかけはやなんとゝ存候

機織

若狭なる池の汀の八重桜、風にて散ハ恨なし、己と散ハうらみあり

言立

弥奈落苦ならくの底に沈とも、御法の船に浮さるらん。来春や東の空の果迄も、おもひ旅出し旅衣、浦山かけしはる〳〵と、詠メの空に雲りなく、日も重りて行ほとに、若狭に早く着にけり〳〵

ヤアラ、これもはや〳〵急行程に、若狭か浦山王か池に着たとも存候。虚ハ何しあふ、此池に立せ玉ふやな。日本にハ名山名所旧社旧跡、皆廻りては候得共、未タ音トに聞く若狭か浦山王か池一見せん程□□一景なかめはやと存、立休らいて候それハ左様にてましまさハ、我等か柴の庵に一夜とゝまり玉ひや、此池のいはれ事懇にかたり可申にて候。夫生とし年物、何れか陰陽はなれさるらん。比里に夫婦の者有し、比翼連理のかたらい深き夜中に込メし玉椿、かハらぬ色のたの

しミハ、只仮初の始の秋の契りして、織果はやと思し機絹もすゝダずんだと切リむずて、此池に望ミしや、夢覚てすさまじや、身の毛も余立目も苦し、末に浮身ハなけしもの、夢のことくに逢にけり、幻のよふに失にけり

沙門

東西〳〵只今の女をハ、如何なる女と思召。あれハ是日本一番の機織女郎にて候。天気能ときハ、日に二百反の蜀江の錦をおらせ玉ふ。天気悪ときハ、日に百反の金襴をおらせ玉ふ。織立〳〵殿子の御介抱被成て候。殿公ハ京に登り、三年か間在京をなさる其内に、金てのほせる時も有り、両足とのほせる時も有り、織立〳〵殿公の御介抱なされて候

全并に心小心の長者壱人おはします。雨のふるにもふらぬにも、風のたつにもたゝぬ夜も、九十九夜とハもふせとも、ないし百夜程も通ハれて候。全心御かたしきの機織女良なれハ、壱面の鏡を二夕面と見へきや、男と言て一張の弓を二張の引せるものかやといひけれハ、ツイニ女量扉にてましませハ、是をなひかず僻あらんとて、ある里にさかり馬鹿者を頼ミ、チウカ井をいわして候。何とチウカ井の様子ハ、殿公ハ都に登り三年か間在京の其内に、我より美目美しき女良を持、女郎とハ人々しや、国に下るまへとのよふそうふハ承て候と、チウカ井いわして候。全彼機織女良、かいしつき、かしつき殿公の御介抱なされて候。我をもふて人も思ハぬ山桜の花かな、咲の後に悔しなんとゝいふまゝに、織機絹も何いらん、側有る金太刀を追取て、さんはらりんとかり切て、若狭浦山王か池に急かれて候。若狭か浦山王か池に詣する所、十四ツ斗の心もこん高しき小若者壱人候得しか、ヤレと、まれや、御とゝまれやと留メ候申てハ候得共、国てさい主探題止メて留らぬ、はた織女良か主ばつたる小若者壱人候得しとて、留たて留る者かや、シヤレ、ヤレはなせ、此池に引込れなんと有ほとに、ヤラ、ヲツカナと其侭うつはなし申候。飛去て、はねさりて、壱本薄の其下にねりよりて、壱句のクカイを遊さる。何とクカイのよふそふハ、此池に死する命ハおしくなへ、京の殿公ハ怨めしや、底なる石にハ額を当ましき、上にハ波を立ましき、池に身をハ、ガツハリらいと沈たり。あへ七日か内に殿公ハ下り、我妻やドラ我妻やと堪休なされて候。我里ハ有里の馬鹿者にテウカヒをいはれ、テウカヒのよふそふハ、若狭か浦山王か池に身をハなけられたと聞テ有ル。ヤラむさんやいふまゝに守り刀をすると抜、たぶさを切、夫より西の方になけ、是より京に登り黒谷法然上人の御弟子となつて、高き所に堂を建、ひくき所に塔を組、あたりに御寺を建、大川には舟を浮マ、小ゥ川に八橋を掛、昼ハ壱部の経を読、夜ルは夜と共に六万遍の念仏を唱ひ、念仏宝珠功力をもつて、はた織女良在所ざんげの姿に現れへくにて候。上中人の人々ハ御しつまれや、しつまれや、能々御聴聞なされて候得　織拍子

すみさんめてすさましや、身の毛も余立目もくるゝ、末の浮身ハなけし者、夢のことくにあひにけり、幻のよふに失にけり　跡織拍子

有難やな〳〵、頼母しや〳〵。ヤア御法のこえか、松風の音か、川の鳴瀬か、はた織の池か、紅の舌を巻、グレンノ氷の内より在所さんけの姿に現れたり

山之神

信夫太郎幕出

しのふ隠れの山姿、しのふの里三着にけり

中言立

信夫太郎景時おとろの草の蔭よりも、たをすハ信夫の太郎よかとき、、明日ハ前の高舘に籠り、八千のもよふしを事念頃にかたり申へくにて候

拍子

信夫太郎懸来りて、其日の出立装束にハ、肌に取りてハ紺地の錦の直垂、卯花鍛の御鎧、五枚兜のしころの緒をみんちとしめて、兵とはなせハ角的程なく射て取れハ、今ハはや進ミ出たる兵者後の草摺するりとぬゐて、遥の浜辺にはふ鞍しめて立ッたりけり。今ハはや櫓より飛て下りて、一文字の鞘打はつし、北から南に一トあたり、西から東に一トあたり、雲にかぐなハ十文字、八ッ股刀ナて切りはらひ

天女幕出

こつの六月十五日、いさゝら出て天女舞

中言立

去れは日本の神々は、善光寺如来の堂に集りて由来を歴、山王三五月に隈もなし。堂前の庭に棹突て、唐紙さへはら打ツゝみ、中にもすぐれし諏訪明神ハ、年積て老浪、昔勝門(他)久し事、かつかと上て諷ふたり。扨て今夜の舞神ハとなたの御番に当て舞候。明神御前の番ならハ、取調て柏子すへし。扨て鞁は祇遠(園)、笛ハ熱田の明神

崩

扨も神木は神の木ならハ、おんの、とな、かんさしたり、とか、とりや、ら、、、トリヤトリヤ

(註) 本文のルビは後から書き加えたもののようである。誤読が多いが、そのまま記載した。

(髙山　茂)

鳥海山北麓の獅子舞番楽　主要参考文献

単行本・報告書・市町村史等

本田安次『山伏神楽・番楽』『日本の伝統芸能』第五巻）錦正社、一九九四年九月
菊地和博『東北の民俗芸能と祭礼行事』清文堂出版、二〇一七年三月
齊藤壽胤『鳥海山小滝番楽考』小滝舞楽保存会、一九八九年四月
山本宏子『秋田県鳥海町本海流獅子舞における舞と太鼓の関係』芸能の科学二二、二〇〇四年
高橋四郎平『本海獅子舞』ふるさとの話第二集、鳥海村教育委員会、一九六六年十月
『秋田の民俗芸能』秋田県文化財調査報告書第二集、秋田県教育委員会、一九六三年十月
『秋田県の民俗芸能』秋田県文化財調査報告書第一三四集、秋田県教育委員会、一九八五年三月
『秋田県の民俗芸能』秋田県文化財調査報告書第二二七集、秋田県教育委員会、一九九三年三月
『秋田の獅子頭』文化財収録作成調査報告書第二七二集、秋田県教育委員会、一九九七年三月
『秋田県民俗芸能誌』秋田県民俗芸能事務局、一九八〇年十二月
『本荘市史　文化・民俗編』本荘市、二〇〇〇年三月
『小友・石沢の民俗』本荘市史民俗調査報告第一集、本荘市、一九九〇年十二月
『子吉地区 埋田・葛法の民俗』本荘市史民俗調査報告第二集、本荘市、一九九一年三月
『南内越・北内越の民俗』本荘市史民俗調査報告第三集、本荘市、一九九二年三月
『本荘の民俗芸能と祭り』本荘市文化財調査報告書第一二集、本荘市教育委員会、一九九五年三月
『赤田大仏祭り』本荘市文化財調査報告書第一三集、本荘市教育委員会、一九九六年三月
『わが町の獅子神楽』矢島町教育委員会、二〇〇四年三月
『由利町史　文化編』由利町町史編さん委員会、一九六七年三月
『屋敷番楽調査報告書一　―諸道具編―』由利町教育委員会、二〇〇〇年一月
『屋敷番楽調査報告書二　―言立編―』由利町教育委員会、二〇〇一年二月
『大内町史』大内町、一九九〇年三月
『大内町の獅子舞』大内町教育委員会、一九七九年三月
『東由利町史』東由利町、一九八九年十月
『西目町史　資料編』西目町、一九九八年三月
『西目町史　通史編』西目町、二〇〇一年二月
『鳥海町史』鳥海町、昭和一九八五年十一月
『本海番楽―鳥海山北麓に伝わる修験の舞―』鳥海町教育委員会、二〇〇〇年三月
『仁賀保町史』仁賀保町、一九七二年十一月
『象潟町史　資料編1』象潟町、一九九八年三月
『象潟町史 通史編下』象潟町　二〇〇一年三月
『象潟の文化　十七』象潟町教育委員会、一九八八年四月
『象潟の民俗誌』象潟町地域文化調査会、二〇〇四年二月
『横岡郷土誌』横岡郷土誌編集委員会、二〇〇四年六月
『鳥海山日立舞』横岡番楽保存会、二〇〇五年六月

論文等

菊地和博「鳥海山麓に伝承される修験系芸能（番楽）の考察―秋田県小滝番楽・横岡番楽と山形県杉沢比山の比較検討―」『東北文教大学短期大学部紀要』第八号、東北文教大学、二〇一八年三月
神田より子「鳥海山の比山番楽」『山の祭りと芸能〔下〕』、平河出版社、一九八四年七月
神田より子「山伏神楽・番楽から見た獅子舞―鳥海山周辺を中心に―」『民俗芸能研究』第五〇号、民俗芸能学会、二〇一一年三月
高山　茂「東北修験の神楽―翁・三番叟に関する芸能史的試論―」『神楽―歴史民俗学論集1』名著出版、一九九〇年九月
高山　茂「鳥海山麓の獅子舞」『まつり』四十四号、まつり同好会、一九八五年六月
高山　茂「鳥海修験と番楽」『藝能』一九九一年五月号、芸能発行所
高山　茂「八木山番楽―本海流番楽と八木山番楽―」『民俗芸能』七十七、民俗芸能刊行委員会、一九九六年十一月
高山　茂「下直根番楽」『民俗芸能』六十六号、民俗芸能友の会、一九八五年十一月
高山　茂「番楽の伝承と地域的異同」『日本大学国際関係学部研究年報』第二十四集、日本大学国際関係学部、二〇〇三年二月
高山　茂「八幡信仰と本海流番楽―獅子・「小弓の舞」・「いか」、『東アジアにおける民俗と芸能』国際シンポジウム論文集、『東アジアにおける民俗と芸能』国際シンポジウム論文刊行委員会、一九九五年七月
高山　茂「番楽研究における課題三点」『民俗芸能における神楽の諸相』、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、一九九四六年三月
茶谷十六「番楽の一演目「団七」について―秋田における「奥州白石噺」の普及と番楽の変遷過程」『日本歌謡研究』通号十四、日本歌謡学会、一九七五年三月

調査協力者及び機関

調査の実施及び本書の作成にあたって次の方々に多大なご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。（敬省略、順不同）

茂木勇一　巴太吉　藤谷弘一　高橋安男　大場聰　齋藤真人　佐藤留吉　阿部久
佐藤三造　吉川栄一　齋藤昭市　齋藤朝次郎　伊藤嘉惣治　高橋広晃　佐藤彰秀
坂之下番楽保存会　屋敷番楽保存会　濁川獅子舞保存会　伊勢居地番楽保存会
釜ヶ台番楽保存会　冬師番楽保存会　鳥海山小滝舞楽保存会　横岡番楽保存会
本海獅子舞番楽上直根講中　本海獅子舞番楽中直根講中
本海獅子舞番楽前ノ沢講中　本海獅子舞番楽下直根講中　本海獅子舞番楽猿倉講中
本海獅子舞番楽二階講中　本海獅子舞番楽天池講中　本海獅子舞番楽八木山講中
本海獅子舞番楽平根講中　本海獅子舞番楽上百宅講中　本海獅子舞番楽下百宅講中
本海獅子舞番楽提鍋講中　杉沢比山連中
秋田県教育委員会文化財保護室　秋田県立博物館　山形県遊佐町教育委員会
【本荘地域】柴野獅子舞保存会　畑谷獅子舞保存会　山田獅子舞保存会
赤田獅子舞保存会　福田獅子舞保存会　土谷獅子舞保存会　谷地獅子舞保存会
埋田獅子舞保存会　大築青年団　烏川町内会　船岡獅子舞
鳥田目番楽保存会　長者屋敷獅子舞　雪車町番楽保存会　南ノ股番楽
横山獅子舞　川口獅子舞保存会　北ノ股部落番楽部　鮎瀬獅子連中
大沢獅子舞青年会　二十六木獅子舞　上万願寺神楽
【矢島地域】沢内獅子舞若者会　行平獅子舞　中山獅子舞　砂子沢獅子舞
杉沢獅子舞　新荘弥勒神社獅子神楽　須郷田獅子舞　矢越獅子舞
津雲神社氏子会　佐藤洋一　高橋作太郎　三浦祐子　阿蘇義則　土田竜太郎
佐藤三郎　三浦昌志
【岩城地域】月山神社獅子舞冨田権現講　下黒川獅子舞　君ヶ野餅搗き舞
上蛇田獅子舞　滝俣獅子舞
【由利地域】新上条獅子舞保存会　町村獅子舞連中　蟹沢獅子舞連中　沢口獅子舞
新屋敷獅子舞米山八幡神社氏子　黒沢獅子舞
【大内地域】岩谷町獅子舞保存会　新沢八幡神社獅子舞講　大倉沢獅子舞
岩谷麓獅子舞　葛岡金峯神社獅子舞保存会　高尾山金峰神社御獅子講
三川獅子舞保存会　中館獅子舞保存会　深沢獅子舞　中帳獅子舞　川口獅子舞
長坂獅子舞　滝番楽
【東由利地域】舟打場若者組合　地下ノ沢番楽保存会　葎沢獅子舞
大琴獅子舞保存会　黒渕獅子舞保存会　新田若獅子会　本宮獅子舞保存会　沼番楽
【西目地域】中沢番楽保存会　田高神楽
【鳥海地域】貝沢からうすからみ保存会　村木獅子舞　橇連獅子舞　間木ノ平獅子舞
小川獅子舞　野宅獅子舞　鐙ヶ平獅子舞　上杉沢獅子舞　赤倉獅子舞　福島獅子舞
皿川番楽　才ノ神獅子舞
【にかほ市】水岡番楽保存会　大須郷獅子舞　本郷獅子舞番楽　上小国番楽
【その他の団体】山谷番楽保存会　黒川番楽保存会　荒巻番楽保存会
【資料編作成】岡田伊代　須藤満寿代　田村明子

あとがき

「鳥海山北麓の獅子舞番楽」は、秋田・山形の県境に聳える鳥海山の北面、秋田県の由利本荘市、にかほ市に伝承する獅子舞番楽である。平成二十四年に「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択された。平成二十六年に秋田県で国民文化祭が開催されたため、翌平成二十七年度から記録作成事業に着手することとなり、事業は平成三十年度までの四年間にわたった。

記録選択の対象となったのは、由利本荘市域が三カ所、にかほ市域が五カ所、計八カ所の伝承団体である。由利本荘市が少ないのは、同市鳥海町の獅子舞番楽一三団体が町村合併前の平成八年に記録選択となり、すでに平成十一年度に記録作成事業を完了しているからである。この事業において平成十二年三月に『本海番楽―鳥海山麓に伝わる修験の舞―』という調査報告書が刊行され、平成二十三年には「本海獅子舞番楽」として国の重要無形民俗文化財に指定された。

このたびの二市にまたがる八カ所の広域的な調査は、記録選択の中でも稀なケースだといえよう。調査の主体となる八カ所については調査委員、調査員がそれぞれ一～二カ所担当したほか、音楽の調査委員二名が別途テーマに沿って調査を実施した。そればかりか、八カ所以外の二市の獅子舞番楽について、祭礼行事、聞き取り、獅子頭および道具類等の悉皆調査を行い、活動中・休止・消滅に分けて調査カードを作成した。これは調査地が多数にわたるため、調査委員をはじめ何名かの調査員が、数カ所から十数カ所を分担して調査にあたり、活動中四五団体、休止・消滅四三団体の個々の現況を確認した。その内容は、第七章「記録選択以外の獅子舞番楽」の一覧表等で示した。

鳥海山北麓全地域の獅子舞番楽は、活動中・休止・消滅の伝承地を合せると一〇九カ所に上り、そのうち由利本荘市が九九カ所以上を占める。もしかすると、まだこれ以外にも未調査のところがあるかもしれないが、ほぼ全体を網羅していると思われる。これまで漠然としていた鳥海山北麓の今昔の伝承数と現況が明確になったのも、悉皆調査あってのことである。このように休止・消滅の伝承地を含めて、調査員が記録選択以外の数多くの伝承地を訪れて、同種の芸能の悉皆調査を展開するという例は記録選択では珍しいことかと思われる。この調査がそれぞれの伝承地に何らかの活力をもたらしたとしたら、調査員にとってそれほど嬉しいことはない。

この四年間の調査では、実に多くの保存団体等の皆様にお世話になった。記録選択八カ所については、複数の調査員が何度も調査に訪れ、そのたびに快く時間を割いていただき、悉皆調査についても、急な調査依頼にもかかわらずいつも丁寧に対応していただいた。お蔭で私たち調査員も皆様方の温かいお人柄と、獅子舞番楽継承に対する思いに触れながら、円滑に調査を進め、記録を作成することができた。鳥海山北麓の全ての獅子舞番楽伝承地にわたる調査を無事に完結することができたのは、まずもってそれぞれの伝承地の関係者各位のご協力によるものである。調査委員会を代表して心より御礼申し上げる次第である。また、さまざまな面でお世話になった多くの方々に厚く御礼申し上げる。

平成三十一年三月

（「鳥海山北麓の獅子舞番楽」調査委員会委員長　髙山　茂）

国記録選択無形民俗文化財
鳥海山北麓の獅子舞番楽

発行　由利本荘市教育委員会
　　にかほ市教育委員会
　　平成三十一年三月二十七日
編集　由利本荘市教育委員会文化課
　　〒〇一八―〇六九二　秋田県由利本荘市西目町沼田字弁天前四〇―六一
　　電話〇一八四―三二―一三三七　ＦＡＸ〇一八四―三三―二二〇二
　　にかほ市教育委員会文化財保護課
　　〒〇一八―〇一〇四　秋田県にかほ市象潟町字狐森三一―一
　　電話〇一八四―四三―二〇〇五　ＦＡＸ〇一八四―四三―二〇一四
印刷　株式会社　本間印刷所

掲載の写真等の無断複製及び転載は、法律で禁止されています。